BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

八登崇之 (Takayuki YATO; aka. "ZR" v1.5a [2017/03/14]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザマニュアル bxjscls-manual.pdf を参照してください。

目次

9	フォントコマンド	79
8.6	キャプション	78
8.5	フロート	76
8.4	パラメータの設定	75
8.3	リスト環境	68
8.2	章·節	56
8.1	表題	51
8	文書のマークアップ	51
7	ページスタイル	48
6	改ページ(日本語 TEX 開発コミュニティ版のみ)	46
5.1	ページレイアウト	39
5	レイアウト	38
4	フォントサイズ	33
3	和文フォントの変更	32
2	オプション	7
1	はじめに	3

10	相互参照	81
10.1	目次の類	81
10.2	参考文献	87
10.3	索引	88
10.4	脚注	90
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	92
12	いろいろなロゴ	96
13	amsmath との衝突の回避	96
14	初期設定	96
付録 A	和文ドライバの仕様 圏	100
付録 B	和文ドライバ:minimal 轡	101
B.1	補助マクロ	101
B.2	(u)pT _E X 用の設定	103
B.3	pdfT _E X 用の処理	107
B.4	XgT _E X 用の処理	108
B.5	後処理 (エンジン共通)	108
付録 C	和文ドライバ:standard 圏	110
C.1	共通処理 (1)	111
C.2	pT _E X 用設定	115
C.3	pdfT _E X 用設定: CJK + bxcjkjatype	118
C.4	X _H T _E X 用設定: xeCJK + zxjatype	120
C.5	LuaT _E X 用設定: LuaT _E X-ja	122
C.6	共通処理 (2)	124
付録 D	和文ドライバ:modern 🕾	125
D.1	フォント設定	125
D.2	fixltx2e 読込	126
D.3	和文カテゴリコード	126
D.4	完了	126
付録 E	和文ドライバ:pandoc 圏	126
E.1	dupload システム	126
E.2	lang 変数	127
E.3	geometry 変数	128
E.4	CJKmainfont 変数	128
E.5	fixltx2e パッケージ	128

E.6	cmap パッケージ	129
E.7	microtype パッケージ	129
E.8	完了	129
付録F	補助パッケージー覧	129
付録 G	補助パッケージ:bxjscompat 🕾	129
G.1	準備	130
G.2	X _H T _E X 部分	130
G.3	LuaT _E X 部分	131
G.4	完了	132
付録 H	補助パッケージ:bxjscjkcat 圏	132
H.1	準備	132
H.2	和文カテゴリコードの設定	133
H.3	ギリシャ・キリル文字の扱い	134
H.4	初期設定	140
H.5	完了	140

1 はじめに

この文書は「BXJSドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

```
〈article〉 bxjsarticle.cls 短いレポート (章なし)
```

〈report〉 bxjsreport.cls 長いレポート (章あり)

⟨book⟩ bxjsbook.cls 書籍用

⟨slide⟩ bxjsslide.cls スライド用

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる 「pIATEX 2_{ε} 新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラス に関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対する解説である。

これは IATEX3 Project の classes.dtx と株式会社アスキーの jclasses.dtx に基づいて奥村が改変したものです。権利については両者のものに従います。奥村は何の権利も主張しません。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upIATEX 対応パッチを取り込みました。 以下では実際のコードに即して説明します。

■BXJS クラス特有の設定 彎

- 1 %<*cls>
- 2 %% このファイルは日本語文字を含みます.

長さ値の指定で式を利用可能にするため calc を読み込む。

3 \RequirePackage{calc}

クラスオプションで key-value 形式を使用するため keyval を読み込む。

4 \RequirePackage{keyval}

クラスの本体ではこの他に geometry パッケージが読み込まれる。 互換性のための補助パッケージを読み込む。

- 5 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
- 6 \let\jsAtEndOfClass\@gobble
- 7 \RequirePackage{bxjscompat}%

8 }{}

\jsDocClass [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等:\jsArticle=bxjsarticle, \jsBook=bxjsbook, \jsReport=bxjsreport, \jsSlide=bxjsslide.

- 9 \let\jsArticle=a
- 10 \let\jsBook=b
- 11 \let\jsReport=r
- 12 \let\jsSlide=s
- 13 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
- 14 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
- 15 %<book>\let\jsDocClass\jsBook
- 16 %<book>\def\bxjs@clsname{bxjsbook}
- 17 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
- 18 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
- 19 %<slide>\let\jsDocClass\jsSlide
- 20 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}

〔暗黙文字トークン〕エンジン(T_{EX} の種類)の種別: $j = pT_{EX}$ 系、 $x = X_{H}T_{EX}$ 、p =\jsEngine $pdfT_FX$ (含 DVI モード)、 $1 = LuaT_FX$ 、 $J = NTT jT_FX$ 、0 = Omega 系、<math>n = 以上の何れでもない。

- $21 \le 5 \le 1$
- 22 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
- 23 \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
- $24 \qquad \texttt{\edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}\%}$
- \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
- 26 \bxjs@test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}
- 27 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
- 28 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=0}
- 29 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
- 30 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
- 31 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=1}

\ifjsWithupTeX 〔スイッチ〕エンジンが(内部漢字コードが Unicode の)upTrX であるか。

- 32 \newif\ifjsWithupTeX
- 33 \ifx\ucs\@undefined\else \ifnum\ucs"3000="3000

```
34 \jsWithupTeXtrue
                                                  35 \fi\fi
                                                  36 \let\if@jsc@uplatex\ifjsWithupTeX
  \ifjsWithpTeXng 〔スイッチ〕エンジンが pTFX-ng であるか。
                                                  37 \newif\ifjsWithpTeXng
                                                  38 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}
        \ifjsWitheTeX 〔スイッチ〕エンジンが\varepsilon-TpX 拡張をもつか。
                                                  39 \newif\ifjsWitheTeX
                                                  40 \bxjs@test@engine\eTeXversion{\jsWitheTeXtrue}
                                                        非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。
                                                  ※ NTT jT<sub>E</sub>X と Omega 系。
                                                  41 \let\bxjs@tmpa\relax
                                                  42 \in J\ Unified \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
                                                  43 \ifx O\jsEngine \def\bxjs@tmpa{Omega}\fi
                                                  44 \ \texttt{\fx} \ \texttt{\constraint} \ \texttt{\cons
                                                  45 \else
                                                  46 \ClassError\bxjs@clsname
                                                                {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
                                                                 {It's a fatal error. I'll quit right now.}
                                                  49 \expandafter\@firstofone
                                                  50 \fi{\endinput\@@end}
  \bxjs@protected \varepsilon-TFX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。
                                                  51 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected
                                                  52 \else \let\bxjs@protected\@empty
                                                  53 \fi
\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。
                                                  54 \ifjsWitheTeX
                                                  55 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}
                                                  56 \else
                                                  57 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand*}
                                                  58\fi
     \ifjsInPdfMode [スイッチ] pdfTFX / LuaTFX が PDF モードで動作しているか。
                                                  ※ LuaT<sub>F</sub>X 0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。
                                                  59 \newif\ifjsInPdfMode
                                                  60 \verb|\Cnameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}|
                                                  61 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine
                                                  62 \let\PackageWarningNoLine\PackageInfo % suppress warning
                                                  63 \verb|\RequirePackage{ifpdf}|
                                                  64 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa
                                                  65 \@nameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}
                                                  66 \let\ifjsInPdfMode\ifpdf
```

\bxjs@cond\ifXXX \cdots \fi{ $\langle \dot{a} \rangle$ }{ $\langle \dot{a} \rangle$ }

 T_{FX} の if-文(\ifXXX……〈真\\else〈偽〉\fi)を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。

- 67 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%
- 68 #1\expandafter\@firstoftwo
- 69 \else\expandafter\@secondoftwo
- 70 \fi}

\jsAtEndOfClass

このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)

- 71 \def\jsAtEndOfClass{%
- 72 \expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-h@@k\endcsname}

LuaT_EX の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリコードを一時的に 11 に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。

※現在の LualATEX では、漢字のカテゴリコードは最初から 11 になっているので、この処理は特段の意味を持たない。しかし、昔は 12 になっていて、この場合、日本語文字のコントロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを 11 に変更する必要がある。

- 73 \@onlypreamble\bxjs@restore@jltrcc
- 74 \let\bxjs@restore@jltrcc\@empty
- 75 \if l\jsEngine
- 76 \def\bxjs@change@jltrcc#1{%
- 77 \xdef\bxjs@restore@jltrcc{%
- 78 \bxjs@restore@jltrcc
- 79 \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}%
- 80 \catcode`#1=11\relax}
- 81 \@tfor\bxjs@x:=西暦\do
- 82 {\expandafter\bxjs@change@jltrcc\bxjs@x}
- 83 \fi

\jsInhibitGlue は \inhibitglue が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何もしない。

- $84 \verb|\bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%}|$
- 85 \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了させる。

- 86 \if@compatibility
- 87 \ClassError\bxjs@clsname
- 88 {Something went chaotic!\MessageBreak
- 89 (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak
- 90 I cannot go a single step further...}
- 91 {If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak
- 92 then there'll still be hope....}
- 93 \expandafter\@firstofone
- $94 \le \exp \text{Moster} \$
- 95 \fi{\typeout{Farewell!}\endinput\@@end}

2 オプション

これらのクラスは \documentclass{jsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{jsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

96 \newif\if@restonecol

\if@titlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

97 \newif\if@titlepage

\ifCopenright \chapter, \part を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要するに片起こし、奇数ページ起こしになります。

98 % < book | report > \newif \if@openright

\ifCopenleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。

\if@mainmatter 真なら本文、偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。

100 % < book | report > \newif \if@mainmatter \@mainmattertrue

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチです。

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

101 \newif\if@enablejfam \@enablejfamfalse

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積 $1 \, \mathrm{m}^2$,縦横比 $1:\sqrt{2}$ の長方形の辺の長さを mm 単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては mm 単位に切り捨てたものが A1,A2,…です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が $1.5\,\mathrm{m}^2$ ですが,ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$ です。このため,IATEX 2_{ε} の b5paper は $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$ ですが,pIATEX 2_{ε} の b5paper は $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$ になっています。ここでは pIATEX 2_{ε} に ならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形, $182\text{mm} \times 230\text{mm}$), a4var (A4 変形, $210\text{mm} \times 283\text{mm}$) を追加しました。

BXJS クラスではページレイアウト設定に geometry パッケージを用いる。用紙サイズ設定は geometry に渡すオプションの指定と扱われる。

```
102 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
103 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
104 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
105 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
106 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
107 \DeclareOption{b4paper}{\bxjs@setpaper{{257truemm}{364truemm}}}
108 \DeclareOption{b5paper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{257truemm}}}
109 \DeclareOption{b6paper}{\bxjs@setpaper{{128truemm}}{182truemm}}}
110 \DeclareOption{a4j}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
111 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
112 \DeclareOption{b4j}{\bxjs@setpaper{{257truemm}{364truemm}}}
113 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}257truemm}}}
114 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}}{283truemm}}}
115 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
116 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
117 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
118 \DeclareOption{executivepaper}{\bxjs@setpaper{executivepaper}}
```

■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

- 119 \newif\if@landscape
- 120 \@landscapefalse
- 121 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}
- ■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったので、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

122 \newif\if@slide

BXJS ではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。 ※この \if@slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

- $123 \% < !slide > \@slidefalse$
- 124 %slide>\@slidetrue

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的なドキュメントクラスと同様にポイント数から 10 を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設

しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag です。

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag* を新設しました。

\Optsize は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は \jsUnusualPtSize (=-20) にする。

- 125 \newcommand{\@ptsize}{0}
- 126 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}
- 127 \def\jsUnusualPtSize{-20}

\bxjs@setbasefontsize 基底フォントサイズを実際に変更する。

128 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%

- \bxjs@setbasefontlength\@tempdima{#1}%
- \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}% 130
- \ifdim\@tempdima=10pt \long\def\@ptsize{0}% 131
- \else\ifdim\@tempdima=10.95pt \long\def\@ptsize{1}%
- \else\ifdim\@tempdima=12pt \long\def\@ptsize{2}% 133
- \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}

\bxjs@setbasefontlength base、jbase で指定される長さ(式)のための特別な \setlength。与えられた式が"(実 数〉Q"の形の場合、Q単位の長さを代入する(この場合"式"は使えない)。

> ※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、IAT_FX はファイル の読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で \iQ をサポートすることは原 理的に不可能である。

135 \def\bxjs@setbasefontlength#1#2{%

ここで true の長さが使われるのは不合理なので、式が "true" を含む場合には警告を出す。

\bxjs@setbasefontlength@a#2true\@nnil

式の末尾が"Q"である時は特別に扱い、それ以外は\setlengthに移譲する。

- \ifx j\jsEngine \setlength#1{#2}% 137
- 138 \else
- \bxjs@setbasefontlength@b#2\@nil Q\@nil\@nnil 139
- \ifx\bxjs@tmpa\relax \setlength#1{#2}% 140
- \else \@tempdimc0.25mm #1=\bxjs@tmpa\@tempdimc 141
- 142 \fi
- \fi} 143
- $144 \ensuremath \ensuremath \ensuremath \ensuremath \ensuremath \ensuremath{\texttt{1Q}}\ensuremath{\texttt{0nil}\#2}\ens$
- \ifx\@nnil#2\@nnil \let\bxjs@tmpa\relax
- \else \def\bxjs@tmpa{#1}% 146
- 147fi
- 148 \def\bxjs@setbasefontlength@a#1true#2\@nnil{%
- \ifx\@nnil#2\@nnil\else
- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname 150
- 151 {You should not use 'true' lengths here}%
- 152\fi}

```
\ifjsc@mag は「\mag を使うか」を表すスイッチ。
  \ifjsc@mag@xreal は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。
153 \newif\ifjsc@mag
154 \newif\ifjsc@mag@xreal
155 %\let\jsc@magscale\@undefined
156 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}
157 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}
158 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}}
159 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}
160 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
161 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
162 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}
163 \DeclareOption{20pt}{\bxjs@setbasefontsize{20pt}}
164 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
165 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
166 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
167 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
168 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
169 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
170 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}
171 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
172 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
173 \DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}
174 \DeclareOption{12ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{12pt}}
  JS クラス互換の magstyle 設定オプション。
175 \verb|\DeclareOption{usemag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@usemag}| \\
176 \DeclareOption{nomag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@nomag}
177 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal}
```

■トンボオプション

欧文 LATEX のカーネルではサポートされないため削除。 ただし JS クラスとの互換のため以下の変数を用意する。

※ JS クラスでは、2017-01-11 の改修で、「トンボオプション指定時のみ \stockwidth/height を定義する」という仕様に変更された。BXJS での対応は要検討。

178 \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight

■面付け

欧文 IATEX のカーネルではサポートされないため削除。

- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- 179 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse}
- 181 \DeclareOption{vartwoside}{\@twosidetrue \@mparswitchfalse}
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- 182 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
- 183 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
- ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 184 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
- 185 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
- ■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれをopenright と表すことにしてあります。openany で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] openright は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは IATEX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、jsclasses では新たに openleft も追加しました。

- 186 %<book|report>\DeclareOption{openright}{\Copenrighttrue\Copenleftfalse}
- 187 % book | report > \DeclareOption { openleft} { \Qopenlefttrue \Qopenrightfalse }
- 188 % book | report > \DeclareOption { openany } { \@openrightfalse \@openleftfalse }
- ■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。
- eqnarray IATEX の eqnarray 環境では & でできるアキが大きすぎるようですので,少し小さくしま す。また,中央の要素も \displaystyle にします。
 - 189 \def\eqnarray{%
 - 190 \stepcounter{equation}%
 - 191 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
 - 192 \global\@eqnswtrue
 - 193 \m@th
 - 194 \global\@eqcnt\z@
 - 195 \tabskip\@centering
 - 196 \let\\\@eqncr
 - 197 \$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
 - 198 \hskip\@centering\$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}\$\@eqnsel
 - 199 &\global\@eqcnt\@ne \hfil\$\displaystyle{{}##{}}\$\hfil
 - 200 &\global\@eqcnt\tw@ \$\displaystyle{##}\$\hfil\tabskip\@centering
 - 201 &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
 - 202 \tabskip\z@skip
 - 203 \cr}

leqnoで数式番号が左側になります。fleqnで数式が本文左端から一定距離のところに出力されます。森本さんにしたがって訂正しました。

```
204 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
205 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}%
206 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
     \def\eqnarray{%
207
208
       \stepcounter{equation}%
209
       \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
210
       \global\@eqnswtrue\m@th
211
       \global\@eqcnt\z@
       \tabskip\mathindent
212
213
       \let\\=\@eqncr
       \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
214
       \ifvmode
215
         \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
216
217
       \fi
       \addtolength\abovedisplayskip{\parskip}%
218
219
       \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
       \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
220
221
       \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
222
       $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
       \bgroup
223
         \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
224
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
225
         &\global\@eqcnt\tw@
226
           $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
227
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
228
       \tabskip\z@skip\cr
229
230
       }}
```

■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。

```
231 % \DeclareOption{openbib}{%
232 % \AtEndOfPackage{%
233 % \renewcommand\@openbib@code{%
234 % \advance\leftmargin\bibindent
235 % \\temindent -\bibindent
236 % \listparindent \\temindent
237 % \\parsep \z@}%
238 % \renewcommand\newblock{\par}}}
```

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォントしか使えません。AMSFonts や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん使うと "Too many math alphabets ..." というエラーが起こってしまいます。disablejfam オプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので、数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので、この新ドキュメントクラ

スでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメ ントクラスの仕様に合わせることにしました。

\bxjs@enablejfam 〔暗黙文字トークン〕enablejfam オプションの状態:

239 %\let\bxjs@enablejfam\@undefined

fancyhdr オプションの処理。

- 240 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
- 241 \def\bxjs@kv@enablejfam@false{\let\bxjs@enablejfam=f}
- $242 \end{thm} a widefault {\end{thm} a widefault {\end{thm} enable} fam \end{thm} enable {\end{thm} enable} fam \end{thm} a widefault {\end{thm} enable} f$
- 243 \define@key{bxjs}{enablejfam}{%
- 244 \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

JS クラスとの互換のため disablejfam オプションを定義する。

245 \DeclareOption{disablejfam}{\let\bxjs@enablejfam=f}

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せに より、enablejfam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は 異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。

\ifjsDraft JS クラスは \ifdraft という公開名のスイッチを用いているが、これは ifdraft パッケー ジと衝突するので、代わりに \ifjsDraft の名前を用い、本文開始時に \ifdraft が未定 義の場合に限り、\ifjsDraft を \ifdraft にコピーする処理にする。

- ※ JS クラスの \ifdraft は 2016/07/13 版で廃止された。よって \ifdraft は 2.0 版で廃 止を予定する。
- 246 \let\ifjsDraft\iffalse
- 247 \@onlypreamble\bxjs@draft
- 248 \def\bxjs@draft#1{%
- \expandafter\let\expandafter\ifjsDraft\csname if#1\endcsname}
- $250 \end{draft} {\bf \{bxjs@draft\{true\}\setminus setlength\setminus overfullrule\{5pt\}\}}$
- $251 \end{final} \bxjs@draft{false}\setlength\\overfullrule{0pt}}$
- 252 \AtBeginDocument{%
- \expandafter\ifx\csname ifdraft\endcsname\relax 253
- 254 \expandafter\let\csname ifdraft\expandafter\endcsname
- 255 \csname ifjsDraft\endcsname
- 256 \fi}

■和文フォントメトリックの選択

ここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用

geometry パッケージが行う。

\ifbxjs@papersize 〔スイッチ〕 papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプ ションで無効にできる。

- ※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。
- 257 \newif\ifbxjs@papersize
- 258 \bxjs@papersizetrue
- 259 \DeclareOption{nopapersize}{\bxjs@papersizefalse}
- 260 \DeclareOption{papersize}{\bxjs@papersizetrue}
- ■英語化 オプション english を新設しました。
- 261 \newif\if@english
- 262 \@englishfalse
- 263 \DeclareOption{english}{\@englishtrue}
- ■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していまし たが、新しくjsreport クラスも作りました。どちらでもお好きな方を使ってください。

BXJS では 'report' 相当のものは別に bxjsreport クラスとして用意する。

- ※ FIXME: jsbook+report と jsreport のどちらに合わせるか。
- ■jslogo パッケージの読み込み IAT_FX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読み 込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおりの 動作となります。デフォルトは jslogo で、すなわちパッケージを読み込みます。

BXJS クラスでは、nojslogo を既定とする。

- 264 \newif\if@jslogo \@jslogofalse
- 265 \DeclareOption{jslogo}{\@jslogotrue}
- 266 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}
- ■BXJS 特有のオプションの一覧 灣
 - エンジンオプション: xelatex 等。
 - ドライバオプション: dvipdfmx 等。
 - 複合設定オプション: pandoc 等。
 - nopapersize : papersize (既定で有効)の否定。

- zw / nozw : \jsZw と等価な命令として \zw を定義する/しない。
- js / nojs : JS クラスを読込済として扱う/扱わない。
- precisetext / noprecisetext : XTTEX の "generateactualtext" を有効/無効にする。
- simplejasetup / nosimplejasetup : XTTEX の "linebreaklocale" を有効/無効にする。
- bigcode / nobigcode : upT_EX で CMap として UTF8-UCS2 の代わりに UTF8-UTF16 を使う/使わない。
- oldfontcommands / nooldfontcommands : 古い "二文字フォント命令" に対する 警告を抑止する/しない。
- base= $\langle dimen \rangle$: 基底フォントサイズを直接指定する。(xxpt オプションの代用なので、既定値は $10\,\mathrm{pt}$ である。)
- jbase=〈dimen〉: 基底フォントサイズを "和文規準で"直接指定する。
- scale= $\langle real \rangle$: 和文フォントのスケールを表すマクロ \jsScale の値を設定する。 もちろんこの値を何らかの方法で和文処理モジュールに渡さないと意味を成さない。 既定値は 0.924715 (= $13 \, \mathrm{Q}/10 \, \mathrm{pt}$)。
- noscale : scale=1 と等価。
- mag=⟨int⟩: \mag 値の直接設定。既定は base から算出する。
- paper={\(\langle dimen: width\\)}{\(\langle dimen: height\\)} : 用紙サイズ設定。用紙サイズオプションの代用で、既定値は a4paper 相当。
- ja=(name) : 使用する和文ドライバの指定。
- jafont= $\langle name \rangle$: 和文フォントプリセットの指定。
- japaram=(name) : 和文フォントパラメタの指定。
- magstyle=(name): "版面拡大"の実現方法の選択。
- $dvi=\langle name \rangle$: DVI モードの時のみに参照されるドライバ指定。
- geometry={class | user} : geometry パッケージの読込を自動的に行うかユーザ に任せるか。
- $fancyhdr=\langle bool \rangle$: fancyhdr パッケージ用の調整を行うか。
- layout= $\langle name \rangle$: レイアウト変種の指定。
- textwidth-limit= $\langle number \rangle$: bxjsbook における、\textwidth の上限の全角単位での値。
- paragraph-mark= $\langle char \rangle$: $\mathcal{N} \ni \mathcal{O} \ni \mathcal{O} \ni \mathcal{O} = \mathcal{O}$.
- whole-zw-lines=(bool) : 行長を全角単位に丸めるか。
- hyperref-enc=(bool) : hyperref の文字コード指定補正を行うか。

\bxjs@invscale \bxjs@invscale は TEX における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば \bxjs@invscale\dimX{1.3} は \dimX=1.3\dimX の逆の演算を行う。

※局所化の \begingroup ~ \endgroup について、以前は \group ~ \egroup を使っていたが、これだと数詞モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

 $267 \mbox{ \mbox{$\mbox{mathchardef\bxjs@csta=}}259}$

```
268 \def\bxjs@invscale#1#2{%
269
     \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax
270
       \@tempcnta\@tempdima \multiply\@tempcnta\@cclvi
271
       \divide\@tempcnta\@tempdimb \multiply\@tempcnta\@cclvi
       \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb
272
       \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@
273
       \@tempdimb\@tempcnta\@ne
274
275
       \advance\@tempcnta\@tempcntb \advance\@tempcnta\@tempcntb
       \advance\@tempcnta\bxjs@csta \@tempdimc\@tempcnta\@ne
276
       \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%
277
         \@tempcntb\@tempdimb \advance\@tempcntb\@tempdimc
278
         \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@
279
         \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima
280
           \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne
281
282
         \else \@tempdimb=\@tempcntb\@ne \fi}%
283
       \xdef\bxjs@gtmpa{\the\@tempdimb}%
```

■複合設定オプション 彎

284

複合設定オプションとは、「エンジンやドライバや和文ドライバの設定を含む、複数の設定を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断される場合に用意される。

\bxjs@composite@proc

複合設定オプションのための遅延処理マクロ。

\endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}

285 \let\bxjs@composite@proc\relax

pandoc オプションは、Pandoc で IATEX 用の既定テンプレートを用いて他形式から IATEX (および PDF) 形式に変換する用途に最適化した設定を与える。

286 \DeclareOption{pandoc}{\%}

和文ドライバを pandoc に、エンジン指定を autodetect-engine に変更する。

287 \def\bxjs@composite@proc{%

288 \bxjs@oldfontcommandstrue

289 \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}%

290 \let\bxjs@engine@given=*}%

ドライバオプションを dvi=dvipdfmx 相当に変更する。

※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。

※これは実際のドライバ設定で上書きできる(オプション宣言順に注意)。

TODO: できない気がする…。

291 \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%

292 \bxjs@dvi@opttrue}

■エンジン・ドライバオプション 湾

```
\bxjs@engine@given オプションで明示されたエンジンの種別。
                  293 \label{lem:293} \let\bxjs@engine@given\@undefined
 \bxjs@engine@opt 明示されたエンジンのオプション名。
                  294 %\let\bxjs@engine@opt\@undefined
                    エンジン明示指定のオプションの処理。
                   ※ 0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は ...latex に限定する。 xetex や pdftex
                   は一般的な IATFX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。
                  295 \DeclareOption{autodetect-engine}{%
                      \let\bxjs@engine@given=*}
                  297 \DeclareOption{latex}{%
                       \def\bxjs@engine@opt{latex}%
                  298
                       \let\bxjs@engine@given=n}
                  300 \DeclareOption{platex}{%
                       \def\bxjs@engine@opt{platex}%
                  301
                       \let\bxjs@engine@given=j}
                  303 \DeclareOption{uplatex}{%
                       \def\bxjs@engine@opt{uplatex}%
                      \let\bxjs@engine@given=u}
                  306 \DeclareOption{xelatex}{%
                       \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%
                       \let\bxjs@engine@given=x}
                  308
                  309 \DeclareOption{pdflatex}{%
                       \def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
                  310
                       \let\bxjs@engine@given=p}
                  311
                  312 \DeclareOption{lualatex}{%
                      \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
                  313
                      \let\bxjs@engine@given=1}
                  314
                  315 \DeclareOption{platex-ng}{%
                  316
                       \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
                       \let\bxjs@engine@given=g}
                  317
                  318 \DeclareOption{platex-ng*}{%
                      \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
                  319
                  320
                      \let\bxjs@platexng@nodrv=t%
                      \let\bxjs@engine@given=g}
                  321
\bxjs@driver@given オプションで明示されたドライバの種別。
                  322 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
                  323 \let\bxjs@driver@@dvimode=0
                  324 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
```

\bxjs@driver@opt 明示された「ドライバ指定」のオプション名。 327 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined

325 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2 326 \let\bxjs@driver@@xetex=3

```
328 \DeclareOption{dvips}{%
    \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
329
     \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
331 \DeclareOption{dviout}{%
     \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
332
    \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
333
334 \DeclareOption{xdvi}{%
    \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
    \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
337 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
     \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
338
    \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}
340 \DeclareOption{pdftex}{%
    \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
    \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
342
343 \DeclareOption{luatex}{%
    \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
     \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
346 \DeclareOption{xetex}{%
    \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
347
    \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}
  「もし DVI モードであればドライバを dvipdfmx にする」というオプション。
※ 1.2 版で dvi オプションが新設されたが、互換性のためこのオプションも残す。
349 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{%
```

■その他の BXJS 独自オプション 彎

\setkeys{bxjs}{dvi=dvipdfmx}}

\ifbxjs@usezw \jsZw の同義語として \zw を使えるようにするか。既定は真。

351 \newif\ifbxjs@usezw \bxjs@usezwtrue

zw、nozw オプションの定義。

352 \DeclareOption{nozw}{%

353 \bxjs@usezwfalse}

354 \DeclareOption{zw}{\%}

355 \bxjs@usezwtrue}

\ifbxjs@disguise@js JS クラスの派生クラスのふりをするか。既定は真。

356 \newif\ifbxjs@disguise@js \bxjs@disguise@jstrue

nojs、js オプションの定義。

357 \DeclareOption{nojs}{%

358 \bxjs@disguise@jsfalse}

359 \DeclareOption{js}{%

360 \bxjs@disguise@jstrue}

\ifbxjs@precisetext XATeX の "generateactualtext" を有効にするか。既定は偽。

361 \newif\ifbxjs@precisetext

noprecisetext / precisetext オプションの定義。

362 \DeclareOption{noprecisetext}{%

363 \bxjs@precisetextfalse}

364 \DeclareOption{precisetext}{%

365 \bxjs@precisetexttrue}

\ifbxjs@simplejasetup XATEX の "linebreaklocale" を有効にするか。既定は真(であるが多くの場合は後に無効化 される)。

366 \newif\ifbxjs@simplejasetup \bxjs@simplejasetuptrue

nosimplejasetup / simplejasetup オプションの定義。

367 \DeclareOption{nosimplejasetup}{%

368 \bxjs@simplejasetupfalse}

369 \DeclareOption{simplejasetup}{%

370 \bxjs@simplejasetuptrue}

\ifbxjs@bigcode upTEX で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」 を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、この ファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、オプションで指定することとする。

371 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodefalse

その上で、「 T_FX 環境がある程度新しければ利用可能であろう」と判断し bxjs@bigcode の 既定値を真とする。具体的な判断基準として、「TpX のバージョンが 3.14159265(2014 年 1 月)以上であるか」を採用する。

372 \edef\bxjs@tmpa{\expandafter\noexpand\csname\endcsname}

373 \def\bxjs@tmpb#1 #2#3\@nil{%

374 \ifx1#2\bxjs@bigcodetrue \fi}

375 \expandafter\bxjs@tmpb\meaning\bxjs@tmpa1 0\@nil

nobigcode / bigcode オプションの定義。

376 \DeclareOption{nobigcode}{%

377 \bxjs@bigcodefalse}

378 \DeclareOption{bigcode}{%

\bxjs@bigcodetrue}

\ifbxjs@oldfontcommands \allowoldfontcommands を既定で有効にするか。

380 \newif\ifbxjs@oldfontcommands

nooldfontcommands、oldfontcommands オプションの定義。

※ oldfontcommands オプションの名前は memoir クラスに倣った。 ちなみに KOMA-Script では enabledeprecatedfontcommands であるがこれはチョットアレなので避けた。

 $381 \ensuremath{\mbox{\sc Nooldfontcommands}} \ensuremath{\mbox{\sc No$

382 \bxjs@oldfontcommandsfalse}

383 \DeclareOption{oldfontcommands}{%

384 \bxjs@oldfontcommandstrue}

■keyval 型のオプション 彎

```
385 \def\bxjs@setkey{%
                                                       \expandafter\bxjs@setkey@a\expandafter{\CurrentOption}}
                                            387 \def\bxjs@setkey@a{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}
                                            388 \DeclareOption*{\bxjs@setkey}
\bxjs@safe@setkeys 未知のキーに対してエラー無しで無視する \setkeys。
                                            389 \def\bxjs@safe@setkeys#1#2{%
                                                        \let\bxjs@KV@errx\KV@errx
                                                        \let\KV@errx\bxjs@safe@setkeys@a
                                            392 \setkeys{#1}{#2}%
                                            393 \let\KV@errx\bxjs@KV@errx}
                                            394 \def\bxjs@safe@setkeys@a#1{}
    \verb|\bxjs@set@keyval| \{\langle key \rangle\} \{\langle value \rangle\} \{\langle error \rangle\}|
                                                   \bxjs@kv@\key\@\value\ が定義済ならそれを実行し、未定義ならエラーを出す。
                                            395 \det bxjs@set@keyval#1#2#3{%}
                                                        \expandafter\let\expandafter\bxjs@next\csname bxjs@kv@#1@#2\endcsname
                                            396
                                            397
                                                        \ifx\bxjs@next\relax
                                            398
                                                             \bxjs@error@keyval{#1}{#2}%
                                                             #3%
                                            399
                                            400
                                                        \else \bxjs@next
                                            401
                                            402 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
                                            403 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
                                            404
                                                        \ClassError\bxjs@clsname
                                                           {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
                                            405
    \ifbxjs@scaleset 和文スケール値が指定されたか。
                                            406 \neq 100
                       \jsScale 〔実数値マクロ〕和文スケール値。
                                            407 \def\jsScale{0.924715}
                                                   base オプションの処理。
                                            408 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{
                                                   jbase オプションの処理。ここでは \jsScale の値を使用する。scale の処理との順序
                                              依存を消すため、jbase の処理の実行を遅延させている。
                                            409 \@onlypreamble\bxjs@do@opt@jbase
                                            410 \let\bxjs@do@opt@jbase\relax
                                            411 \define@key{bxjs}{jbase}{\bxjs@setjbasefontsize{#1}}
                                            412 \def\bxjs@setjbasefontsize#1{%
                                                        \def\bxjs@do@opt@jbase{%
                                                             \bxjs@setbasefontlength\@tempdima{#1}%
                                            414
```

\bxjs@invscale\@tempdima\jsScale

415

```
\bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}}}
                                                                                               416
                                                                                                                 scale オプションの処理。
                                                                                               417 \define@key{bxjs}{scale}{%
                                                                                               418 \bxjs@scalesettrue
                                                                                               419
                                                                                                                        \edef\jsScale{#1}}
                                                                                                                noscale オプションの処理。
                                                                                                420 \DeclareOption{noscale}{%
                                                                                                                             \bxjs@scalesettrue
                                                                                                                             \def\jsScale{1}}
\bxjs@param@mag mag オプションの値。
                                                                                               423 \det \bxjs@param@mag\relax
                                                                                                                mag オプションの処理。
                                                                                               424 \ensuremath{$\ $$} {\ag}{\ensuremath{$\ $$}} {\ag} {\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=\color=
                                                                                                                paper オプションの処理。
                                                                                                425 \define@key{bxjs}{paper}{\edef\bxjs@param@paper{#1}}
     \bxjs@jadriver 和文ドライバの名前。
                                                                                               426 \let\bxjs@jadriver\relax
                                                                                               ja オプションの処理。
                                                                                                     ※ jadriver は 0.9 版で用いられた旧称。
                                                                                                     ※単なる ja という指定は無視される (Pandoc 対策)。
                                                                                               428 \define@key{bxjs}{jadriver}{\edef\bxjs@jadriver{#1}}
                                                                                               429 \ensuremath{ \mbox{\tt define@key{bxjs}{ja}[\ensuremath{\mbox{\tt with}} \ensuremath{\mbox{\tt with}} 
                                                                                                430 \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver{#1}\fi}
                                    \jsJaFont 和文フォント設定の名前。
                                                                                               431 \let\jsJaFont\@empty
                                                                                                                 jafont オプションの処理。
                                                                                               \jsJaParam 和文ドライバパラメタの文字列。
                                                                                               433 \let\jsJaParam\@empty
                                                                                                                 japaram オプションの処理。
                                                                                               434 \ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{
     \bxjs@magstyle magstyle 設定値。(古いイマイチな名前。)
                                                                                               435 \let\bxjs@magstyle@mag=m
                                                                                                436 \let\bxjs@magstyle@real=r
                                                                                                437 \let\bxjs@magstyle@xreal=x
```

```
(新しい素敵な名前。)
```

- ※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、\bxjs@magstyle@xreal の方を優先させる。
- 438 \let\bxjs@magstyle@usemag\bxjs@magstyle@mag
- 439 \let\bxjs@magstyle@nomag\bxjs@magstyle@real
- 440 \expandafter\let\csname bxjs@magstyle@nomag*\endcsname\bxjs@magstyle@xreal

\bxjs@magstyle@default は既定の値を表す。

- 441 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@usemag
- 442 \ifx 1\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
- 443 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
- 444 \fi\fi
- 445 \ifjsWithpTeXng
- 446 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
- 447 \fi
- 448 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default

magstyle オプションの処理。

- 449 \define@key{bxjs}{magstyle}{%
- $450 \verb| \expandafter\expandafter\bxjs@magstyle\csname | \\$
- 451 bxjs@magstyle@#1\endcsname
- 452 \ifx\bxjs@magstyle\relax
- 453 \ClassError\bxjs@clsname
- 454 {Invalid value '#1' for option magstyle}\@ehc
- 455 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
- 456 \fi}

\bxjs@geometry geometry オプションの値。

- 457 \let\bxjs@geometry@class=c
- 458 \let\bxjs@geometry@user=u
- 459 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class

geometry オプションの処理。

- 461 \expandafter\let\expandafter\bxjs@geometry\csname
- 462 bxjs@geometry@#1\endcsname
- 463 \ifx\bxjs@geometry\relax
- 464 \ClassError\bxjs@clsname
- 465 {Invalid value '#1' for option geometry}\@ehc
- 466 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
- 467 \fi}

\ifbxjs@fancyhdr 〔スイッチ〕fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。

 $468 \newif\ightharpoonup \bxjs@fancyhdrtrue$

fancyhdr オプションの処理。

- 470 \let\bxjs@kv@fancyhdr@false\bxjs@fancyhdrfalse
- 471 \define@key{bxjs}{fancyhdr}{%

```
\ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。
                                                                          473 \newif\ifbxjs@dvi@opt
                                                                                  DVIモードのドライバとドライバ種別との対応。
                                                                           474 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
                                                                          475 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvimode
                                                                           476 \let\bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode
                                                                          477 \let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode
                                                                                  dvi オプションの処理。
                                                                          478 \ensuremath{\mbox{define@key{bxjs}{dvi}{{\%}}}
                                                                                       \expandafter\let\expandafter\bxjs@tmpa\csname
                                                                          479
                                                                                          bxjs@dvidriver@@#1\endcsname
                                                                           480
                                                                           481
                                                                                       \ifx\bxjs@tmpa\relax
                                                                                            \ClassError\bxjs@clsname
                                                                          482
                                                                                               {Invalid value '#1' for option dvi}\@ehc
                                                                           484
                                                                             \bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
                                                                                             \def\bxjs@driver@opt{#1}%
                                                                           485
                                                                           486
                                                                                            \let\bxjs@driver@given\@undefined
                                                                                             \bxjs@dvi@opttrue
                                                                           487
                                                                           488
                                                                                       \fi}
  \ifbxjs@layout@buggyhmargin [スイッチ] bxjsbook の左右マージンがアレか。
                                                                             ※ layout が v1 の場合はアレになる。
                                                                           489 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin
vifbxjs@force@chapterabstract 〔スイッチ〕abstract 環境を chapterabstract にするか。
                                                                             ※ bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
                                                                             ※ただし 1.5 版では移行措置のため bxjsreport の既定値を真にする。
                                                                           490 \newif\ifbxjs@force@chapterabstract
                                                                           layout オプションの処理。
                                                                           492 \Onamedef{bxjs0kv0layout0v1}{%
                                                                           493 %<book>\bxjs@layout@buggyhmargintrue
                                                                           494 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                                                                           495 }
                                                                          496 \verb|\document| 496 
                                                                           497 % <book > \bxjs@layout@buggyhmarginfalse
                                                                          498 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
                                                                          499 }
                                                                          500 \define@key{bxjs}{layout}{%
                                                                                     \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}
                  \bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。\textwidth の上限。
```

\bxjs@set@keyval{fancyhdr}{#1}{}}

```
502 %\let\bxjs@textwidth@limit\@undefined
503 \define@key{bxjs}{textwidth-limit}{%
    \edef\bxjs@textwidth@limit{#1}}
```

\bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。パラグラフのマーク。

505 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined

506 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%

\edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}

\ifbxjs@whole@zw@lines 〔スイッチ〕 whole-zw-lines の指定値。

508 \newif\ifbxjs@whole@zw@lines \bxjs@whole@zw@linestrue

509 \let\bxjs@kv@wholezwlines@true\bxjs@whole@zw@linestrue

 $510 \verb|\label{lem:bxjs@kv@wholezwlines@false|bxjs@whole@zw@linesfalse||}$

511 \define@key{bxjs}{whole-zw-lines}{\bxjs@set@keyval{wholezwlines}{#1}{}}

\ifbxjs@hyperref@enc 〔スイッチ〕 hyperref-enc の指定値。

512 \newif\ifbxjs@hyperref@enc \bxjs@hyperref@enctrue

513 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@true\bxjs@hyperref@enctrue

 $514 \verb|\label{lem:bxjs@kv@hyperrefenc@falsebxjs@hyperref@encfalse||}$

515 \define@key{bxjs}{hyperref-enc}{\bxjs@set@keyval{hyperrefenc}{#1}{}}

■オプションの実行

IATeX の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に { } が含まれ ると正常に処理ができない。これに対処する為 \@removeelement の実装に少し手を加える (仕様は変わらない)。

※クラスに \DeclareOption* がある場合は \@unusedoptions は常に空のままであるこ とを利用している。

516 \let\bxjs@ltx@removeelement\@removeelement

517 \def\@removeelement#1#2#3{%

\def\reserved@a{#2}%

\ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty 519

520 \else \bxjs@ltx@removeelement{#1}{#2}{#3}%

521 \fi}

デフォルトのオプションを実行し, dvi ファイルの先頭に dvips の papersize special を書 き込みます。この special は dvips や最近の dviout が対応しています。multicols や url を \RequirePackage するのはやめました。

522 % <article > \ExecuteOptions {a4paper, one side, one column, notitle page, final}

523 % <book > \ExecuteOptions {a4paper, two side, one column, title page, open right, final}

524 %%<report>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,titlepage,openany,final}

525 %<slide>\ExecuteOptions{36pt,a4paper,landscape,oneside,onecolumn,titlepage,final}

526 \ProcessOptions\relax

527 \bxjs@composite@proc

```
グローバルオプションのトークン列に { } が含まれていると、やはり後のパッケージの読
込処理で不具合を起こすようである(\ProcessOptions* がエラーになる)。従って、この
 ようなオプションは除外することにする。
528 \@onlypreamble\bxjs@purge@brace@elts
529 \def\bxjs@purge@brace@elts{%
    \def\bxjs@tmpa{\@gobble}%
    \expandafter\bxjs@purge@be@a\@classoptionslist,\@nil,%
    \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa}
532
533 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@a
534 \def\bxjs@purge@be@a#1,{%
    \ifx\@nil#1\relax\else
535
      \bxjs@purge@be@b#1{}\@nil
      \if@tempswa \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}\fi
537
538
      \expandafter\bxjs@purge@be@a
539
    \fi}
540 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@b
541 \def\bxjs@purge@be@b#1#{\bxjs@purge@be@c}
542 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@c
543 \def\bxjs@purge@be@c#1\@nil{%
    \ifx\@nil#1\@nil \@tempswatrue \else \@tempswafalse \fi}
545 \bxjs@purge@brace@elts
  papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性が
 あるため、グローバルオプションから外す。
546 \@expandtwoargs\@removeelement
    {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist
548 \@expandtwoargs\@removeelement
    {10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist
550 \@expandtwoargs\@removeelement
    {\tt noscale} \verb|\@classoptionslist| @classoptionslist| }
  現在の(正規化前の)和文ドライバの値を \bxjs@jadriver@given に保存する。
552 \ifx\bxjs@jadriver\relax\else
553 \let\bxjs@jadriver@given\bxjs@jadriver
554\fi
  エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するか
 を検査する。
555 \let\bxjs@tmpb\jsEngine
556 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng
557 \let\bxjs@tmpb=g
558 \fi\fi
559 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX
560 \let\bxjs@tmpb=u
561 \fi\fi
562 \ifx p\bxjs@tmpb\ifjsInPdfMode\else
563 \let\bxjs@tmpb=n
```

564 \fi\fi

```
(この時点で \bxjs@tmpb は \bxjs@engine@given と同じ規則で分類したコードをもって
いる。)
565 \ifx *\bxjs@engine@given
566 \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb
エンジン指定が autodetect-engine であり、かつ実際のエンジンが (u)pLATFX だった場
合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。
    \ifx j\bxjs@engine@given
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,platex}
568
    \else\ifx u\bxjs@engine@given
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
570
571
    \fi\fi
572\fi
573 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else
    \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else
575
      \ClassError\bxjs@clsname
576
       {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc
    \fi
577
578\fi
  エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに uplatex を追加する。
579 \ifjsWithpTeXng
580 \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
581 \fi
   ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合するかを検査する。
582 \@tempswatrue
583 \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
    \ifjsInPdfMode
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
585
        \@tempswafalse
586
      \fi
587
    \else\ifx x\jsEngine
588
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else
        \@tempswafalse
590
591
    \else
592
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
593
594
        \@tempswafalse
      \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
595
596
        \@tempswafalse
597
      \fi\fi
      \ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx\else
598
        \@tempswafalse
599
      \fi\fi
600
601
    \fi\fi
602 \fi
603 \if@tempswa\else
   \ClassError\bxjs@clsname
```

```
{Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
606 \fi
  DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。
607 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
608 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
609 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
610 \else \@tempswatrue
611 fi\fi
612 \if@tempswa
 ドライバオプションがない場合は警告を出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする (0.3 版との互換性のため)。
    \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@given\@undefined\else
      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
614
615
      {No driver option is given}
   \fi\fi
616
dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオ
プションに XXX を追加する。)
    \ifbxjs@dvi@opt
      \edef\bxjs@nxt{%
618
        \let\noexpand\bxjs@driver@given
619
         \csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
620
        \noexpand\g@addto@macro\noexpand\@classoptionslist
621
622
         {,\bxjs@driver@opt}%
623
      }\bxjs@nxt
624
    \fi
625 \fi
  エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、
エンジンオプションが platex-ng*(*付)の場合、および既に dvipdfmx が指定されてい
る場合を除く。
626 \ifjsWithpTeXng
    \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
      \let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
628
    \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
629
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
631
   \fi\fi
632\fi
  \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は minimal に変える。ただしエンジンが
(u)pT<sub>F</sub>X である場合は standard に変える。
633 \def\bxjs@@minimal{minimal}
634 \ifx\bxjs@jadriver\relax
    \ifx j\jsEngine
635
636
      \def\bxjs@jadriver{standard}
637
    \else
```

\let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal

638

```
639 \fi
         640 \fi
           エンジンオプションがない場合はエラーを出す。
         ※ただし ja 非指定の場合はスキップする。
         641 \ifx\bxjs@jadriver@given\@undefined\else
             \ifx\bxjs@engine@given\@undefined
         643
               \ClassError\bxjs@clsname
         644
                {An engine option must be explicitly given}%
                {When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak
         645
         646
                 engine option.\MessageBreak\@ehc}
         647 \fi\fi
           新しい LuaT<sub>F</sub>X (0.87 版以降) では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されて
         いた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag* であり、エラーの場合は既定値に
         置き換えられる。)
         648 \ifx\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@mag\else
         649
             \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
               \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
         650
               \ClassError\bxjs@clsname
         651
         652
                {The engine does not support 'magstyle=usemag'}%
                {LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak
         653
         654
                 The default value 'nomag*' is used instead.\MessageBreak \@ehc}
         655
             \fi
         656 \fi
           オプション処理時に遅延させていた jbase の処理をここで実行する。
         657 \bxjs@do@opt@jbase
\Cjascale 和文クラス共通仕様(※ただし ZR 氏提唱)における、和文スケール値の変数。
         658 \let\Cjascale\jsScale
           後処理
         659 \if@slide
         \verb| def\maybeblue{\oifundefined{ver@color.sty}{}}{\color{blue}}| \\
         661 \fi
         662 \if@landscape
             \setlength\@tempdima {\paperheight}
             \setlength\paperheight{\paperwidth}
             \setlength\paperwidth {\@tempdima}
         665
         666 \fi
           8bit 欧文 TrX の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を
         通用させるため。)
         667 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
```

\@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100

\catcode\@tempcnta\active

668

669

- 670 \advance\@tempcnta\@ne
- 671 \repeat

672 \fi

js オプション指定時は、jsarticle(または jsbook)クラスを読込済のように振舞う。 ※「2 つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に

異常ではない。

- 673 \ifbxjs@disguise@js
- 674 % <book | report > \def \bxjs@js@clsname{jsbook}
- 675 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}

677\fi

color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。

678 \g@addto@macro\@classoptionslist{,nosetpagesize}

oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。

- 679 \ifbxjs@oldfontcommands
- 680 \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}
- 681 \fi

■papersize スペシャルの出力

geometry パッケージが行う。

■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

- $682 \$ slide>\def\n@baseline{13}%
- $683 \label{limbxjs@param@basefontsize} $$ 683 \label{limbxjs@param@basefontsize} $$ \end{15} % $$$
- 684 %<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi

■拡大率の設定

\bxjs@magstyle の値に応じてスイッチ jsc@mag と jsc@mag@xreal を設定する。

- 685 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
- 686 \jsc@magtrue
- 687 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal
- 688 \jsc@mag@xrealtrue
- 689 \fi\fi

サイズの変更は T_EX のプリミティブ \mbox{mag} を使って行います。9 ポイントについては行送 9 も若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていたところを \inv@mag in に直しましたので,geometry パッケージと共存できると思います。なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

設定すべき \mag 値を (基底サイズ)/($10\,\mathrm{pt}$) × $1000\,\mathrm{c}$ 2 算出。BXJS クラスでは、\mag を直接指定したい場合は、geometry 側ではなくクラスのオプションで行うものとする。

```
690 \ifx\bxjs@param@mag\relax
```

- 691 \@tempdima=\bxjs@param@basefontsize
- 692 \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25
- 693 \divide\@tempdima16384\relax \@tempcnta\@tempdima\relax
- 694 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 695 \else
- 696 % mag 値が直接指定された場合
- 697 \let\c@bxjs@cnta\@tempcnta
- 698 \setcounter{bxjs@cnta}{\bxjs@param@mag}
- 699 \ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
- 700% 有効な mag 値の範囲は 1--32768
- 701 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 702 \advance\@tempcnta100000
- 703 $\def\bxjs@tmpa#1#2#3#4#5\@nil{\dempdima=#2#3#4.#5\p@}$
- 704 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
- $705 \qquad \verb|\edgf\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}|$
- 706 \fi
- 708 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4\@nil{\@tempdima=#2#3.#4\p@}
- $709 \verb|\expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil=\cite{Monthsol}|$
- 710 \edef\jsc@magscale{\strip@pt\@tempdima}
- $711 \verb|\let\jsBaseFontSize\bxjs@param@basefontsize| \\$
- 712 %\typeout{\string\jsDocClass: \meaning\jsDocClass}
- 713 %\typeout{\string\jsEngine: \meaning\jsEngine}
- 714 %\typeout{\string\jsBaseFontSize: \jsBaseFontSize}
- 715 %\typeout{\string\bxjs@param@mag: \bxjs@param@mag}
- 716 %\typeout{\string\jsc@magscale: \jsc@magscale}
- 717 %\typeout{\string\ifjsc@mag: \meaning\ifjsc@mag}
- 718 % typeout{\string\ifjsc@mag@xreal: \meaning\ifjsc@mag@xreal}

[2016-07-08] \jsc@mpt および \jsc@mmm に、それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

\mag する場合(現状はこれが既定)にコードの変更を低減するために、以下では必要に応じて、\jsc@mpt を \p@? と書く。その上で、\mag する場合は?を無視して \p@ と解釈させ、\mag しない場合は?を英字扱いにして \p@? という制御綴を\jsc@mpt と同値にする。

```
※(多分 2.0 版あたりで) JS クラスに合わせるため \po? 表記を止める予定。
        719 \ifjsc@mag
             \let\jsc@mpt\p@
        720
             \verb|\newdimen|| jsc@mmm | jsc@mmm=1mm||
             \catcode`\?=9 % \p@? read as \p@
        723 \else
        724
             \newdimen\jsc@mpt \jsc@mpt=\jsc@magscale \p@
        725
             \newdimen\jsc@mmm \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
        726
             \catcode`\?=11 \let\p@?\jsc@mpt
        727\fi
        728 \chardef\bxjs@qmcc=\catcode`\?\relax
           ここで pTpX の zw に相当する単位として用いる長さ変数 \jsZw を作成する。約束によ
         り、これは \jsScale × (指定フォントサイズ) に等しい。
           nozw 非指定時は \zw を \jsZw と同義にする。
        729 \newdimen\jsZw
        730 \jsZw=10\jsc@mpt \jsZw=\jsScale\jsZw
        731 \ifbxjs@usezw
            \providecommand*\zw{\jsZw}
        733 \fi
\zwspace 全角幅の水平空き。
        734 \def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}
           そして、magstyle が nomag* の場合は、NFSS にパッチを当てる。
        735 \ifjsc@mag@xreal
            \RequirePackage{type1cm}
             \let\jsc@invscale\bxjs@invscale
         ムニャムニャムニャ……。
        738
             \ensuremath{\texttt{Vexpandafter}}\ OT1/cmr/m/n/10\endcsname\relax
             \verb|\expandafter\ex| OMX/cmex/m/n/10\endcsname\end{|} relax
        739
             \let\jsc@get@external@font\get@external@font
             \def\get@external@font{%
        741
               \jsc@preadjust@extract@font
        742
        743
               \jsc@get@external@font}
             \def\jsc@fstrunc#1{%
        744
               \edef\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%
        745
               \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.****\@nil}
        746
        747
             \def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@nil{%
        748
               \f $1$
                 \edef\jsc@tmpa{#1%
        749
                 750
        751
               \fi}
             \def\jsc@preadjust@extract@font{%
        752
               \let\jsc@req@size\f@size
        753
               \dimen@\f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
        754
               \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
        755
```

```
756
                            \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
                            \let\f@size\jsc@ref@size}
                     757
                          \def\execute@size@function#1{%
                     758
                            \let\jsc@cref@size\f@size
                     759
                            \let\f@size\jsc@req@size
                     760
                     761
                            \csname s@fct@#1\endcsname}
                     762
                          \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
                     763
                          \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
                            \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
                     764
                            \edef\jsc@tmpa{{#1}{#2}{#3}{#4}{\strip@pt\@tempdimc}}
                     765
                     766
                            \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
                          \def\gen@sfcnt{%
                     767
                            \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
                     768
                     769
                            \empty@sfcnt}
                          \def\genb@sfcnt{%
                     770
                            \edef\mandatory@arg{%
                     771
                              \mandatory@arg\expandafter\genb@x\jsc@cref@size..\@@}%
                     772
                     773
                            \empty@sfcnt}
                     774
                          \label{lem:cont} $$ \DeclareErrorFont{OT1}{cmr}{m}{n}{10} $$
                     775 \fi
                        [2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている \smallskip の,単位 pt を
                      \jsc@mpt に置き換えた \jsc@smallskip を定義します。これは \maketitle で用い
                      られます。\jsc@medskip と \jsc@bigskip は必要ないのでコメントアウトしています。
     \jsc@smallskip
        \jsc@medskip 776 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}
                     777 \def\jsc@medskip{\vspace\jsc@medskipamount}
                     778 %\def\jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}
\jsc@smallskipamount
  \verb|\jsc@medskipamount|| 779 \verb|\newskip\jsc@smallskipamount||
                     780 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt
  \jsc@bigskipamount
                     781 %\newskip\jsc@medskipamount
                     782 \ jsc@medskipamount =6\jsc@mpt plus 2\jsc@mpt minus 2\jsc@mpt
                     783 %\newskip\jsc@bigskipamount
                     784 %\jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt
                      ■pagesize スペシャルの出力
                        削除。
```

3 和文フォントの変更

\@ 欧文といえば、IATEX の \def\@{\spacefactor\@m} という定義 (\@m は 1000) では I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次 のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

785 $\chardef\bxjs@periodchar=`\.$

 $786 \verb|\bxjs@protected\def\bxjs@SE{\spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar}|$

 $787 \def\0{\bxjs0SE{}}$

4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など)の実際の挙動の設定は, 三つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って, たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い, 行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では 10 と同義の IAT_{EX} の内部命令 Content of the content

\@vpt	5	\@vipt	6	\@viipt	7
\@viiipt	8	\@ixpt	9	\@xpt	10
\@xipt	10.95	\@xiipt	12	\@xivpt	14.4

ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して、段落の字下げ \parindent, 和文文字間のスペース \kanjiskip, 和文・欧文間のスペース \xkanjiskip を変更しています。

\kanjiskip は pIATeX 2ε で Opt plus .4pt minus .5pt に設定していますが,これは そもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに,プラスになったりマイナスになったりするのは,追い出しと追い込みの混在が生じ,統一性を欠きます。なるべく追い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが,ごくわずかなマイナスは許すことにしました。

\xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あるいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けても空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 (1zw) に直します。 [2008-02-18] english オプションで \parindent を 1em にしました。

\set@fontsize \fontsize 命令(\large 等でなく)でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行されるように、\@setfontsize ではなく \set@fontsize に対してパッチを当てるように変更。

```
788 \def\bxjs@tmpa{\def\set@fontsize##1##2##3}
789 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%
790 \set@fontsize{#1}{#2}{#3}%
791% 末尾にコードを追加
    \expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{%
792
       \size@update
793
       \jsFontSizeChanged}%
794
795 }
```

\jsFontSizeChanged フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。\jsZw を再設定している。その後でユーザ定義用 のフック \jsResetDimen を実行する。

796 \newcommand*\jsFontSizeChanged{\%}

- 797 \jsZw=\f@size\p@
- \jsZw=\jsScale \jsZw 798
- 799 \ifdim\parindent>\z@
- \if@english \parindent=1em 800
- \else \parindent=1\jsZw 801
- \fi 802
- \fi\relax 803
- \jsResetDimen} 804

\jsResetDimen ユーザ定義用のフック。

805 \newcommand*\jsResetDimen{}

\jsc@setfontsize クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した \jsc@setfontsize を\@setfontsize の 変わりに用いることにします。

- 806 \ifjsc@mag
- \let\jsc@setfontsize\@setfontsize 807
- $808 \ensuremath{\setminus} else$
- 809 \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
- 810 $\c tfontsize #1{#2\jsc@mpt}{#3\jsc@mpt}}$
- 811 \fi

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、\emergencystretch に訴え ます。

これはフォントサイズ非依存なので \Cwd で書くのが適当だが、\Cwd はまだ定義されて いない。

 $812 \text{ \emergencystretch } 3\jsZw$

\ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines

\widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対し て、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。 TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

別行立て数式に入るときに \narrowbaselines が呼ばれるが、このコードでは「数式中で \normalsize などのサイズ命令(\@currsize の実体)が呼ばれた」ことになり警告が出る。JS クラスでは、\@setfontsize 中の \@nomath 実行を消して「そもそもサイズ命令で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないので、BXJS クラスの実装では、\narrowbaselines の時だけ警告が出ないようにする。

```
813 \newif\ifnarrowbaselines
```

- 814 \if@english
- 815 \narrowbaselinestrue
- 816 \fi
- 817 \def\narrowbaselines{%
- 818 \narrowbaselinestrue
- 819 \skip0=\abovedisplayskip
- 820 \skip2=\abovedisplayshortskip
- 821 \skip4=\belowdisplayskip
- 822 \skip6=\belowdisplayshortskip
- 823% 一時的に警告を無効化する
- 824 \let\bxjs@ltx@nomath\@nomath
- 825 \let\@nomath\@gobble
- 826 \@currsize\selectfont
- 827 \let\@nomath\bxjs@ltx@nomath
- 828 \abovedisplayskip=\skip0
- 829 \abovedisplayshortskip=\skip2
- 830 \belowdisplayskip=\skip4
- 831 \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
- 832 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}

microtype パッケージを読み込んだ場合、\normalsize 等のフォントサイズ変更命令の 定義の中に if 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは microtype が邪悪 なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

833 \def\bxjs@if@narrowbaselines{%

- 834 \ifnarrowbaselines\expandafter\@firstoftwo
- 835 \else \expandafter\@secondoftwo
- 836 \fi

837 }

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アスキーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、ここでは 16 ポイントにしました。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント(アスキーのものの 0.961 倍)であることもあり、行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際、 $16/9.25\approx 1.73$ であり、和文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75)に近づきました。

microtype 対策のため if 文を避ける。

838 \renewcommand{\normalsize}{%

839 \bxjs@if@narrowbaselines{%

841 }{%else

842 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}%

843 }%

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip),数式の下のアキ(\belowdisplayshortskip)の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T_EX Q & A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調節してみることにしました。

 $\ \$ \abovedisplayskip 11\p0? \0plus3\p0? \0minus4\p0?

845 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?

846 \belowdisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?

847 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

最後に、リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を、\@listi にコピーしておきます。\@listI の設定は後で出てきます。

848 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

849 \normalsize

\Cht 基準となる長さの設定をします。 $pIAT_{EX} 2_{\varepsilon}$ カーネル(plfonts.dtx)で宣言されているパ \Cdp ラメータに実際の値を設定します。たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅(1zw)です。

\Cwd

\Cvs まず \Cwd 等の変数を定義する。

\Chs $850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} \right)} {\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} \right)} {\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} {\frac{850} \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} {\frac{850} \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} {\frac{850} \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} {\frac{850} \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} {\frac{850} \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} {\frac{850} \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} \right)} {\frac{850} \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\frac{850} \right)} {\frac{850} \right)} {\frac{850} \left(\frac{850 \left(\frac{850 \left(\right)} {\frac{850} \right)} {\frac{850} {\frac{850} \right)} {\frac{850} {\frac{850} \right)} {\frac{850} {\frac{850} {\frac{850} \right)} {\frac{850} {\frac{850} {\frac{850} {\frac{850} {\frac{850} {\frac{850} {\frac{850$

851 \ifx\Cdp\@undefined \newdimen\Cdp \fi

 $852\$ \ifx\Cwd\Qundefined \newdimen\Cwd \fi

853 \ifx\Cvs\@undefined \newdimen\Cvs \fi

854 \ifx\Chs\@undefined \newdimen\Chs \fi

規約上、現在の \jsZw の値が \Cwd である。\Cht と \Cdp は単純に \Cwd の 88% と 12% の値とする。

 $^{855 \}setlength\Cht{0.88\jsZw}$

 $^{856 \}setlength\Cdp{0.12\jsZw}$

 $^{857 \}sline Cwd{1\jsZw}$

^{858 \}setlength\Cvs{\baselineskip}

$859 \stlength\Chs{1\jsZw}$

\LARGE \huge \Huge

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば $16 \times 0.9 = 14.4$ ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ 4 ± 2 , 2 ± 1 ポイントでしたが,ここではゼロ(\z0)にしました。

```
microtype 対策のため if 文を避ける。後の \footnotesize も同様。
             860 \newcommand{\small}{%
                 \bxjs@if@narrowbaselines{%
                            \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%
             862 %<!kiyou>
             863 %<kiyou>
                           \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%
             864 }{%else
             865 %<!kiyou>
                            \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%
             866 %<kiyou>
                           \jsc@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%
             867
                  \abovedisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
             868
                  \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
             869
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip
             870
                  \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
             871
                  \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
             872
                             \topsep \z@
             873
             874
                             \parsep \z@
             875
                             \itemsep \parsep}}
\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は,元はそれぞれ 3\pm 1, 2\pm 1 ポイン
              トでしたが、ここではゼロ(\z0)にしました。
             876 \newcommand{\footnotesize}{%
                 \bxjs@if@narrowbaselines{%
             878 %<!kiyou>
                            \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
             879 %<kiyou>
                           \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
             880 }{%else
             881 %<!kiyou>
                            \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
             882 %<kiyou>
                           \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
             883
                  \abovedisplayskip 6\p0? \@plus2\p0? \@minus3\p0?
             884
                  \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip
             886
                  \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
             887
                  \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
             888
                             \topsep \z@
             889
             890
                             \parsep \z@
             891
                             \itemsep \parsep}}
             それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
 \scriptsize
              ます。特に注意すべきは \large で、これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い、
       \tinv
      \large
                                                   37
      \Large
```

行送りを \normalsize と同じにすることによって, 節見出しが複数行にわたっても段間で 行が揃うようにします。

[2004-11-03] \HUGE を追加。

```
892 \newcommand{\scriptsize}{\jsc@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
893 \newcommand{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
894 \if@twocolumn
895 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
896 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\fill 1.111}{\n@baseline}}
897 \else
898 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\fill 1.111}{17}}
899 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\fill 1.111}{17}}
900 \fi
901 %<!kiyou>\newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\Large\fill 2.22}{21}}
902 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\fill 2.22}{21}}
903 \newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\fill 2.22}{21}}
904 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\fill 2.22}}
905 \newcommand{\Huge}{\jsc@setfontsize\huge\fill 2.22}}
```

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは、行列や場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送りが変わるような大きいものを使わず、行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがいいでしょう。

907 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

906 \newcommand{\HUGE}{\jsc@setfontsize\HUGE{30}{40}}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく,\headfont という命令で定めることにします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが,通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。 $\mathbb{P}^{IAT}EX\ 2\varepsilon$ 美文書作成入門』(1997年) では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが,\fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

```
908 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}
```

- 909 \newcommand{\headfont}{\sffamily}
- 910 % \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}

5 レイアウト

■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが、2zw にしました。 \columnseprule このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

911 %<!kiyou>\setlength\columnsep{2\Cwd}

- 912 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}
- 913 \setlength\columnseprule{0\p0}

■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら, \lineskip より近づかないようにし

\normallineskip ます。元は Opt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

 $\verb|\lineskiplimit| 914 \end{tength} $$\lim 914 \end{tength} $$$

 $\label{lineskiplimit} 915 \textbf{ setlength normal lineskip \{1 \neq 0\}} \\$

916 \setlength\lineskiplimit{1\p@?}

917 \setlength\normallineskiplimit{1\p@?}

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

\renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の2倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行 送りの伸縮はしないのが一般的です。

918 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが、ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

919 \setlength\parskip{0\p0}

 $920 \footnote{off}$

921 \setlength\parindent{0\p0}

922 \else

923 \setlength\parindent{1\Cwd}

924 \fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう

\@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

\@highpenalty 925 \@lowpenalty 51

926 \@medpenalty 151

 $927 \ensuremath{\setminus} \ensuremath{\texttt{@highpenalty}} 301$

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

928 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。

929 % \brokenpenalty 100

5.1 ページレイアウト

BXJS ではページレイアウトの処理は geometry パッケージが担当している。

■準備 ※

```
現状ではここで \mag を設定している。
                     \topskip も指定する。
                  930 \ifjsc@mag
                  931 \mag=\bxjs@param@mag
                  933 \setlength{\topskip}{10\p@?}
                     \bxjs@param@paper が長さ指定({W}{H})の場合、geometry の形式(papersize={W,H})
                   に変換する。
                  934 \def\bxjs@read@a{\futurelet\bxjs@tmpa\bxjs@read@b}
                  935 \def\bxjs@read@b{%
                       \ifx\bxjs@tmpa\bgroup \expandafter\bxjs@read@c
                        \else \expandafter\bxjs@read@d \fi}
                  938 \def\bxjs@read@c#1#2#3\@nil{\def\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}}
                  939 \def\bxjs@read@d#1\@nil{}
                  940 \expandafter\bxjs@read@a\bxjs@param@paper\@nil
\bxjs@layout@paper geometry の用紙設定のオプション。
                  941 \edef\bxjs@layout@paper{%
                  942
                       \ifjsc@mag truedimen,\fi
                       \if@landscape landscape,\fi
                  943
                       \bxjs@param@paper}
     \bxjs@layout geometry のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。
                  945 %<*article|report>
                  946 \def\bxjs@layout{%
                       headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
                  947
                       headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
                  949
                       hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
                       vscale=0.83, vmarginratio=1:1,%
                  950
                  951 }
                  952 %</article|report>
                  953 %<*book>
                  954 \ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                     %---
                  955 % アレ
                  956 \def\bxjs@layout{%
                       headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                  957
                  958
                       hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
                       vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                  959
                  960 }
                  961 \ensuremath{\setminus} else
                                                     %---
                  962 % 非アレ
                  963 \def\bxjs@layout{%
                       headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                       hmargin=18\jsc@mmm,%
                  965
                       vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                  966
```

```
967 }
                     968 \fi
                                                         %---
                     969 %</book>
                     970 %<*slide>
                     971 \def\bxjs@layout{%
                          noheadfoot,%
                     972
                          hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
                           vscale=0.944,vmarginratio=1:1,%
                     975 }
                     976 %</slide>
          \fullwidth 〔寸法レジスタ〕ヘッダ・フッタ領域の横幅。
                     977 \newdimen\fullwidth
   \jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕bxjsbook における、\textwidth の上限の全角単位での値。
                     978 %<*book>
                     979 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}
                     980 \ifx\bxjs@textwidth@limit\@undefined\else
                           \let\c@bxjs@cnta\@tempcnta
                           \setcounter{bxjs@cnta}{\bxjs@textwidth@limit}
                     982
                     983
                           \long\edef\jsTextWidthLimit{\the\@tempcnta}
                     984\fi
                     985 %</book>
\bxjs@postproc@layout geometry の後処理。
                     986 \def\bxjs@postproc@layout{%
                     987 % ドライバ再設定
                     988
                           \ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else
                     989
                             \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver
                     990
                          \fi
                     991 % textwidth 調整
                     992
                          \ifbxjs@whole@zw@lines
                             \@tempdimb=\textwidth
                     993
                     994
                             \if@twocolumn \@tempdima=2\Cwd \else \@tempdima=1\Cwd \fi
                             \divide\textwidth\@tempdima \multiply\textwidth\@tempdima
                     995
                             \advance\@tempdimb-\textwidth
                     996
                             \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb
                     997
                             \advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb
                     998
                           \fi
                     999
                          \fullwidth=\textwidth
                     1000
                     1001 %<*book>
                           \ifdim\textwidth>\jsTextWidthLimit\Cwd
                             \textwidth=\jsTextWidthLimit\Cwd
                     1003
                             \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
                     1004
                     1005
                          \fi
                     1006 %</book>
                     1007 % textheight 調整
                          \@tempdimb=\textheight
                     1008
                           \advance\textheight-\topskip
                     1009
```

```
1010
                       \divide\textheight\baselineskip \multiply\textheight\baselineskip
1011
                       \advance\textheight\topskip
1012
                       \advance\@tempdimb-\textheight
                       \advance\topmargin0.5\@tempdimb
1013
1014 % headheight 調整
                    \@tempdima=\topskip
1015
                      \advance\headheight\@tempdima
1016
1017
                       \advance\topmargin-\@tempdima
1018 % marginpar 設定
                       \setlength\marginparsep{\columnsep}
1019
                       \verb|\colored| \colored| \c
1020
1021
                       \setlength\marginparwidth{\paperwidth-\oddsidemargin-1truein%
                                       -\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep}
1022
                      \ifbxjs@whole@zw@lines
1023
                              \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
1024
1025
                     \fi
1026 % 連動する変数
                       \maxdepth=.5\topskip
1027
1028
                       \stockwidth=\paperwidth
                       \stockheight=\paperheight
1029
1030 }
```

\jsGeometryOptions geometry パッケージに渡すオプションのリスト。

- ※ geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。
- 1031 \edef\jsGeometryOptions{%
- \bxjs@layout@paper,\bxjs@layout}

■geometry パッケージ読込 彎

geoemtry オプションの値に応じて分岐する。

まずは geometry=class の場合。

1033 \ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class

geometry は \topskip が標準の行高(\ht\strutbox) より小さくならないようにする 自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避(無効化)して いる。

- 1034 \@onlypreamble\bxjs@revert
- 1035 \let\bxjs@revert\@empty
- 1036 \edef\bxjs@tmpa{\the\ht\strutbox}
- 1037 \ht\strutbox=10\p@?
- 1038 \g@addto@macro\bxjs@revert{\ht\strutbox=\bxjs@tmpa\relax}

geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止 するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプ ションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時 は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。

```
1039 \ifbxjs@papersize
                           \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
                      1040
                      1041
                              \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
                      1042
                           \fi
                            \let\bxPapersizeSpecialDone=t
                      1043
                      1044 \else
                           \PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}
                      1045
                      1046 \fi
                          ここで geometry を読み込む。
                       ※ geometry の begin-document フックにおいて、LuaTrX の旧版互換を有効にする。
                      1047 \edef\bxjs@nxt{%
                            \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}}
                      1049 \AtBeginDocument{\bxjs@pre@geometry@hook}
                      1050 \AtBeginDocument{\ImposeOldLuaTeXBehavior}
                      1051 \bxjs@nxt \bxjs@revert
                      1052 \AtBeginDocument{\RevokeOldLuaTeXBehavior}
 \bxjs@geometry@driver geometryが用いるドライバの名前。
                        ※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、\bxjs@postproc@layout において書
                        き戻す処理を入れている。
                      1053 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver
                      1054 \bxjs@postproc@layout
\bxjs@pre@geometry@hook 1.2 版より、geometry の 4.x 版の使用は非推奨とする。
                        ※将来サポートを廃止する予定。
                      1055 \@onlypreamble\bxjs@pre@geometry@hook
                      1056 \def\bxjs@pre@geometry@hook{%
                      1057
                            \@ifpackageloaded{geometry}{%
                              \@ifpackagelater{geometry}{2010/02/12}{}{%else
                      1058
                      1059
                               \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
                                {The 'geometry' package installed\MessageBreak
                      1060
                      1061
                                 is too old (< v5.0)}%
                               \if x\jsEngine \ifnum\mag=\@m\else
                      1062
                                 \def\bxjs@Gm@driver{pdftex}
                      1063
                                 \ifx\pdfhorigin\@undefined \newdimen\pdfhorigin \fi
                      1064
                      1065
                                 \ifx\pdfvorigin\@undefined \newdimen\pdfvorigin \fi
                               \fi\fi
                      1066
                             }%
                      1067
                              \ifjsWithpTeXng
                      1068
                               \ifx\Gm@driver\@empty
                      1069
                      1070
                                  \def\Gm@driver{pdftex}%
                               \fi
                      1071
                              \fi
                      1073
                           }{}}
        \setpagelayout ページレイアウト設定のためのユーザ命令。
```

• \setpagelayout{\langle text\rangle}: 現在の geometry の設定の一部を修正する。

• \setpagelayout* $\{\langle text \rangle\}$: 用紙以外の設定をリセットして、改めて設定を行う。

```
どちらも設定の後で後処理 \bxjs@postproc@layout を実行する。
1074 \def\setpagelayout{\@ifstar
             {\bxjs@reset@layout}{\bxjs@modify@layout}}
1076 \def\bxjs@modify@layout#1{%
1077
             \edef\bxjs@nxt{\noexpand\geometry{#1,truedimen}}%
1078
              \bxjs@nxt\bxjs@postproc@layout}
1079 \def\bxjs@reset@layout#1{%
              \edef\bxjs@nxt{\noexpand\geometry{reset,\bxjs@layout@paper,#1,truedimen}}%
1080
              \bxjs@nxt\bxjs@postproc@layout}
        geometry=class の場合の処理はここで終わり。
        次に、geometry=user の場合の処理。
1082 \else\ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@user
         この場合はユーザが何らかの方法(例えば geometry を読み込む)でページレイアウトを
    設定する必要がある。もし、本体開始時に \textwidth がカーネル設定の値 (.5\maxdimen)
    のままになっている場合はエラーを出す。
    ※\jsUseMinimalPageLayout は動作テスト用。
1083 \AtBeginDocument{\bxjs@check@page@layout}
1084 \@onlypreamble\bxjs@check@page@layout
1085 \def\bxjs@check@page@layout{%
             \ifdim\textwidth=.5\maxdimen
                  \ClassError\bxjs@clsname
1087
1088
                     {Page layout is not properly set}%
                     {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
1089
              \fi}
1090
1091 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
              \setlength{\textwidth}{6.5in}%
1092
1093
              \setlength{\textheight}{8in}}
        \setpagelayout はとりあえず無効にしておく。
1094 \let\bxjs@geometry@driver\relax
1095 \def\setpagelayout{\@ifstar
              {\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}
1097 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
1098
             \ClassError\bxjs@clsname
                {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak
1099
                  because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}
        geometry=user の場合の処理はここで終わり。
1101 \fi\fi
```

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- zw の代わりに \jsZw を用いる。
- article/report/book/slide の切り分けの処理が異なる。

■脚注

\footnotesep

各脚注の頭に入る支柱(strut)の高さです。脚注間に余分のアキが入らないように、footnotesize の支柱の高さ(行送りの 0.7 倍)に等しくします。

ここは元々は

 ${\c tootnotesize\global\setlength\footnotesep{\baselineskip}}$

としていたが、そもそも \global\setlength~ は calc 使用時には有意義な動作をしない。 \global\footnotesep だと所望の値が得られるが、同時に \footnotesize のフォントを 固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

1102 \footnotesep=11\p0? \footnotesep=0.7\footnotesep

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが,和文の行送りを考えてもうちょっと大きくします。

1103 \setlength{\skip\footins}{16\p0? \0plus 5\p0? \0minus 2\p0?}

■フロート関連 フロート (図,表) 関連のパラメータは $I \not = T_E X 2_\varepsilon$ 本体で定義されていますが、ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)とフロートだけのページで設定が異なります。ちなみに、カウンタは内部では \co を名前に冠したマクロになっています。

\c@topnumber topnumber カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1104 \setcounter{topnumber}{9}

\topfraction 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

1105 \renewcommand{\topfraction} $\{.85\}$

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1106 \setcounter{bottomnumber}{9}

\bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

1107 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1108 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2 を 0.1 に変えました。

1109 \renewcommand{\textfraction}{.1}

```
floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。
                 1110 \renewcommand{\floatpagefraction}{.8}
     \c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。
                    [2003-08-23] ちょっと増やしました。
                 1111 \setcounter{dbltopnumber}{9}
     \dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7
                   を 0.8 に変えてあります。
                 1112 \mbox{renewcommand{\dbltopfraction}{.8}}
\dolfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8
                   に変えてあります。
                 1113 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}
         \floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・
      \textfloatsep 下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本
         \intextsep 文との距離です。
                 1114 \setlength\floatsep
                                      {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
                 1115 \setlength\textfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?}
                 1116 \setlength\intextsep {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?}
       \dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。
    \dbltextfloatsep 1117 \setlength\dblfloatsep
                                          {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
                 1118 \setlength\dbltextfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?}
           \@fptop フロートだけのページに入るグルーです。\@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部,
           \Ofpsep \Ofpsep はフロート間に入ります。
           \@fpbot 1119 \setlength\@fptop{0\p@? \@plus 1fil}
                 1120 \setlength\@fpsep{8\p@? \@plus 2fil}
                 1121 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}
         \@dblfptop 段抜きフロートについての値です。
         \@dblfpsep1122 \setlength\@dblfptop{0\p@? \@plus 1fil}
         \verb|\dblfpbot|| 1123 \textbf{ } 123 \textbf{ } 2fil \\
                 1124 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}
```

6 改ページ(日本語 TEX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage [2017-02-24] コミュニティ版 pLATEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,同じ命令を追 \pltx@cleartoleftpage 加しました。

\pltx@cleartooddpage \pltx@cleartoevenpage

1. \pltx@cleartorightpage: 右ページになるまでページを繰る命令

2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令

3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令

4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

```
となっています。
```

```
1125 %\def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
1126 % \ifodd\c@page
1127 %
         \iftdir
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1128 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1129 %
1130 %
         \fi
1131 % \else
1132 %
         \ifydir
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1133 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1134 %
1135 %
         \fi
1136 % \fi\fi}
1137 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1138 % \ifodd\c@page
1139 %
         \ifydir
1140 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1141 %
         \fi
1142 %
1143 % \else
1144 %
1145 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1146 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1147 %
         \fi
1148 % \fi\fi}
1149 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
      \ifodd\c@page\else
1151
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1152
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
      \fi\fi}
1153
1154 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
      \ifodd\c@page
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1156
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1157
1158
      \fi\fi}
```

BXJS クラスでは \iftdir 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

1160 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage

\cleardoublepage [2017-02-24] コミュニティ版 pIATEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて, report と book クラスの場合に\cleardoublepage を再定義します。

```
1161 %<*book|report>
```

 $1162 \if@openleft$

 ${\tt 1163} \quad \verb|\label{thm:eq:leartoleftpage}| \\$

1164 \else\if@openright

1165 \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
1166 \fi\fi
1167 %</book|report>

7 ページスタイル

ページスタイルとして、IATEX 2_{ε} (欧文版)の標準クラスでは empty, plain, headings, myheadings があります。このうち empty, plain スタイルは IATEX 2_{ε} 本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが, ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps@... の形のマクロで定義されています。

\Cevenhead \Coddhead, \Coddfoot, \Cevenhead, \Cevenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

\Coddhead フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。

\@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

****Coddfoot** 柱の内容は、****Chapter が呼び出す \chaptermark{何々}**、****Section が呼び出す \sectionmark{何々} で設定します。柱を扱う命令には次のものがあります。**

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右}右の柱を設定します。\leftmark左の柱を出力します。\rightmark右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

\ps@empty empty ページスタイルの定義です。IFTEX 本体で定義されているものをコメントアウトした 形で載せておきます。

1168 % \def\ps@empty{%

1169 % \let\@mkboth\@gobbletwo

1170 % \let\@oddhead\@empty

1171 % \let\@oddfoot\@empty

1172 % \let\@evenhead\@empty

1173 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

1174 \def\ps@plainfoot{%

```
1175
                  \let\@mkboth\@gobbletwo
            1176
                  \let\@oddhead\@empty
            1177
                  \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}%
                  \let\@evenhead\@empty
            1178
                  \let\@evenfoot\@oddfoot}
            1179
            1180 \def\ps@plainhead{%
                  \let\@mkboth\@gobbletwo
            1181
                  \let\@oddfoot\@empty
                  \let\@evenfoot\@empty
            1183
            1184
                  \def\@evenhead{%
            1185
                    \if@mparswitch \hss \fi
                    \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
            1186
                    \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                  \def\@oddhead{%
            1188
                    \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
            1189
            1190 % <book > \let\ps@plain\ps@plainhead
            1191 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot
\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン
              ダーラインを引くようにしてみました。
                まず article の場合です。
            1192 %<*article|slide>
            1193 \if@twoside
            1194
                  \def\ps@headings{%
                    \let\@oddfoot\@empty
            1195
            1196
                    \let\@evenfoot\@empty
                    \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
            1197
                      \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
            1198
                      \if@mparswitch\else \hss \fi}%
            1199
                    \def\@oddhead{%
            1200
                      \underline{%
            1201
            1202
                        \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
            1203
                    \let\@mkboth\markboth
                    \def\sectionmark##1{\markboth{%
            1204
            1205
                       \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\jsZw\fi
                       ##1}{}}%
            1206
            1207
                    \def\subsectionmark##1{\markright{%
                       \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection \hskip1\jsZw\fi
            1208
            1209
            1210
            1211 \else % if not twoside
                  \def\ps@headings{%
                    \let\@oddfoot\@empty
            1213
            1214
                    \def\@oddhead{%
            1215
                      \underline{%
            1216
                        \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
            1217
                    \let\@mkboth\markboth
                    \def\sectionmark##1{\markright{%
            1218
```

```
1219
                         \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\jsZw\fi
             1220
                         ##1}}}
             1221 \fi
             1222 %</article|slide>
                 次は book および report の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッ
               チを取り込ませていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。
             1223 %<*book|report>
             1224 \newif\if@omit@number
             1225 \def\ps@headings{%
                   \let\@oddfoot\@empty
             1226
                   \let\@evenfoot\@empty
             1228
                   \def\@evenhead{%
             1229
                     \if@mparswitch \hss \fi
                     \underline{\hbox to \fullwidth{\autoxspacing}
             1230
                         \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
             1231
                     \if@mparswitch\else \hss \fi}%
             1232
                   \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\autoxspacing}
             1233
                         {\if@twoside\rightmark\else\leftmark\fi}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
             1234
                   \let\@mkboth\markboth
             1235
                   \def\chaptermark##1{\markboth{%
             1236
             1237
                     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
             1238
                       \if@mainmatter
             1239
                         \if@omit@number\else
                           \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\jsZw
             1240
                         \fi
             1241
                       \fi
             1242
                     \fi
             1243
                     ##1}{}}%
             1244
                   \def\sectionmark##1{\markright{%
                     \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\jsZw\fi
             1246
                     ##1}}}%
             1247
             1248 %</book|report>
                 最後は学会誌の場合です。
             1249 %<*jspf>
             1250 \def\ps@headings{%
                   \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
             1251
                   \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
                   \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
             1253
                   \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
             1255 %</jspf>
\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するた
               め,ここでの定義は非常に簡単です。
                 [2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。
             1256 \def\ps@myheadings{%
                   \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
             1258
                   \def\@evenhead{%
```

```
\if@mparswitch \hss \fi%
1259
1260
        \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
1261
        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
      \def\@oddhead{%
1262
        \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%
1263
      \let\@mkboth\@gobbletwo
1264
1265 % <book | report > \let\chaptermark \@gobble
     \let\sectionmark\@gobble
1267 %<!book&!report> \let\subsectionmark\@gobble
1268 }
```

8 文書のマークアップ

8.1 表題

\title これらは \LaTeX 本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示し\author ます。

\subtitle 副題を設定する。

\jsSubtitle ※プレアンブルにおいて \newcommand*{\subtitle}{...} が行われることへの対策として、\subtitle の定義を \title の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題より前に副題を設定したい場合は、\jsSubtitle 命令を直接用いればよい。

本体を \jsSubtitle として定義する。

```
\label{local-prop} $$1273 \end{*{\sc}} 1274 \end{*{\sc}} 1274 \end{*{\c}} 1274 \end{*{\c}
```

\title にフックを入れる。

```
1275 \renewcommand*{\title}[1]{\bxjs@decl@subtitle\gdef\@title{#1}}
```

1276 \AtBeginDocument{\bxjs@decl@subtitle}

1277 \def\bxjs@decl@subtitle{%

1278 \global\let\bxjs@decl@subtitle\relax

 $1279 \quad \texttt{\footnote{line}}$

1280 \global\let\subtitle\jsSubtitle

1281 \fi}

\bxjs@annihilate@subtitle \subtitle 命令を無効化する。

※独自の\subtitle が使われている場合は無効化しない。

1282 \def\bxjs@annihilate@subtitle{%

.283 \ifx\subtitle\jsSubtitle \global\let\subtitle\relax \fi

1284 \global\let\jsSubtitle\relax}

\etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル,英語の著者名,キーワード,メールアドレスです。 \eauthor 1285 %<*jspf> 1287 \newcommand*{\eauthor}[1]{\gdef\@eauthor{#1}} 1288 \newcommand*{\keywords}[1]{\gdef\@keywords{#1}} 1289 \newcommand*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}} 1290 \newcommand*{\AuthorsEmail}[1]{\gdef\authors@mail{author's e-mail:\ #1}} 1291 %</jspf> \plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにし ます。 1292 \def\plainifnotempty{% \ifx \@oddhead \@empty 1293 \ifx \@oddfoot \@empty 1294 \else 1295 1296 \thispagestyle{plainfoot}% 1297 \fi 1298 \else \thispagestyle{plainhead}% 1300 \fi} \maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large, 和 文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。 [2016-11-16] 新設された nomag および nomag* オプションの場合をデフォルト (usemag 相当) に合わせるため、\smallskip を\jsc@smallskip に置き換えました。\smallskip のままでは nomag(*) の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。 1301 %<*article|book|report|slide> 1302 \if@titlepage \newcommand{\maketitle}{% 1303 1304 \begin{titlepage}% 1305 \let\footnotesize\small \let\footnoterule\relax 1306 \let\footnote\thanks 1307 \null\vfil 1308 1309 \if@slide {\footnotesize \@date}% 1310 \begin{center} 1311 $\mbox{} \mbox{} \mbo$ 1312 1313 \large $\mbox{\mbox{\mbox{$\sim$}}\par} \$ 1314

1315

1316

\jsc@smallskip

\@title

```
\ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1317
1318
                                          \par\vskip\z@
1319
                                          {\small \bxjs@subtitle\par}
                                     \fi
1320
                                     \jsc@smallskip
1321
                                     1322
                                     \vfill
1323
1324
                                     {\small \@author}%
                                \end{center}
1325
                          \else
1326
                          \wedge 60\p0?
1327
                          \begin{center}%
1328
                                {\LARGE \@title \par}%
1329
                                \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1330
1331
                                     \space{1mm} \spa
1332
                                     {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1333
                                \fi
                                \vskip 3em%
1334
1335
                                {\large
                                     \lineskip .75em
1336
1337
                                     \begin{tabular}[t]{c}%
                                          \@author
1338
                                     \end{tabular}\par}%
1339
                                \vskip 1.5em
1340
                                {\large \@date \par}%
1341
1342
                          \end{center}%
                          \fi
1343
1344
                          \par
1345
                          \end{titlepage}%
1346
                     \setcounter{footnote}{0}%
1347
1348
                     \global\let\thanks\relax
                     \global\let\maketitle\relax
1349
1350
                     \global\let\@thanks\@empty
                     \global\let\@author\@empty
1351
1352
                     \global\let\@date\@empty
                     \global\let\@title\@empty
1353
                     \global\let\title\relax
1354
1355
                     \global\let\author\relax
                     \global\let\date\relax
1356
1357
                     \global\let\and\relax
                     \bxjs@annihilate@subtitle
1358
               }%
1359
1360 \else
1361
                \newcommand{\maketitle}{\par
                     \begingroup
1362
1363
                          \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
                          1364
                          \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1365
```

```
\llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\jsZw}##1}%
                                1367
                                1368
                                                             \if@twocolumn
                                                                   \ifnum \col@number=\@ne
                                1369
                                                                         \@maketitle
                                1370
                                                                   \else
                                1371
                                                                        \twocolumn[\@maketitle]%
                                1372
                                1373
                                                                   \fi
                                                             \else
                                1374
                                1375
                                                                   \newpage
                                                                   \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
                                1376
                                                                   \@maketitle
                                1377
                                1378
                                                             \fi
                                                             \plainifnotempty
                                1379
                                1380
                                                             \@thanks
                                1381
                                                       \endgroup
                                                       \setcounter{footnote}{0}%
                                1382
                                                       \global\let\thanks\relax
                                1383
                                1384
                                                       \global\let\maketitle\relax
                                                       \global\let\@thanks\@empty
                                1385
                                1386
                                                       \global\let\@author\@empty
                                                       \global\let\@date\@empty
                                1387
                                1388
                                                       \global\let\@title\@empty
                                1389
                                                       \global\let\title\relax
                                                       \global\let\author\relax
                                1390
                                1391
                                                       \global\let\date\relax
                                                       \global\let\and\relax
                                1392
                                1393
                                                       \bxjs@annihilate@subtitle
                                1394
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
                                 1395
                                                 \def\@maketitle{%
                                1396
                                                       \newpage\null
                                1397
                                                       \vskip 2em
                                                       \begin{center}%
                                1398
                                1399
                                                             \let\footnote\thanks
                                                             {\LARGE \@title \par}%
                                1400
                                                             \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                1401
                                1402
                                                                   \space{2.5cm} 
                                                                   {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                                1403
                                1404
                                                             \vskip 1.5em
                                1405
                                1406
                                                             {\large
                                                                   \lineskip .5em
                                1407
                                1408
                                                                   \begin{tabular}[t]{c}%
                                1409
                                                                        \@author
                                1410
                                                                   \end{tabular}\par}%
                                                             \vskip 1em
                                1411
                                                             {\large \@date}%
                                1412
```

\parindent 1\jsZw\noindent

1366

```
\end{center}%
1413
1414
                   \par\vskip 1.5em
1415 %<article|slide>
                                                         \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
1416 }
1417 \fi
1418 %</article|book|report|slide>
1419 %<*jspf>
1420 \mbox{ \mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}} pn pire proper proper proper proper proper proper proper proper proper proper}$$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbo
1421
              \begingroup
                   \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1422
1423
                   \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
1424
                   \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
                       \parindent 1\jsZw\noindent
1425
                       \label{lap(Qtextsuperscript{\normalfont\Qthefnmark}\hskip0.3\jsZw} $$\#1}% $$
1426
1427
                       \twocolumn[\@maketitle]%
1428
                   \plainifnotempty
                   \@thanks
1429
1430
              \endgroup
1431
              \setcounter{footnote}{0}%
              \global\let\thanks\relax
1432
1433
              \global\let\maketitle\relax
              \global\let\@thanks\@empty
1434
1435
              \global\let\@author\@empty
1436
              \global\let\@date\@empty
1437 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
             \global\let\title\relax
              \global\let\author\relax
1439
             \global\let\date\relax
1440
              \global\let\and\relax
              \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
1442
                   \def\@makefntext{\advance\leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}%
1444
                   \footnotetext[0]{\itshape\authors@mail}%
             }\fi
1445
              \global\let\authors@mail\@undefined}
1447 \def\@maketitle{%
              \newpage\null
1448
              \vskip 6em % used to be 2em
1449
             \begin{center}
1450
                   \let\footnote\thanks
1451
                   1452
1453
                   \lineskip .5em
1454
                   \ifx\@author\@undefined\else
                       \vskip 1em
1455
                       \begin{tabular}[t]{c}%
1456
1457
                            \@author
                       \end{tabular}\par
1458
                   \ifx\@etitle\@undefined\else
1460
1461
                       \vskip 1em
```

```
1462
          {\large \@etitle \par}%
1463
1464
        \ifx\@eauthor\@undefined\else
          \vskip 1em
1465
          \begin{tabular}[t]{c}%
1466
            \@eauthor
1467
          \end{tabular}\par
1468
1469
        \fi
        \vskip 1em
1470
        \@date
1471
     \end{center}
1472
1473
     \vskip 1.5em
     \centerline{\box\@abstractbox}
     \ifx\@keywords\@undefined\else
1475
1476
       \vskip 1.5em
        \centerline{\parbox{157mm}{\textsf{Keywords:}\\ \small\@keywords}}
1477
     \fi
1478
     \vskip 1.5em}
1479
1480 %</jspf>
```

8.2 章・節

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして * と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} * [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です(例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

前アキ この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

後アキ 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

* この*印がないと、見出し番号を付け、見出し番号のカウンタに1を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の6個の引数として定義されます。 次は \@startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが \baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

```
1481 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%
     \if@noskipsec \leavevmode \fi
1482
1483
     \par
1484% 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
     \@tempskipa #4\relax
1486 % \@afterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
     \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
1488 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
     \ifdim \@tempskipa <\z@
       \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
1490
1491
1492
     \if@nobreak
       \everypar{\everyparhook}% これは間違い
1493 %
       \everypar{}%
1495
     \else
1496
       \addpenalty\@secpenalty
1497% 次の行は削除
       \addvspace\@tempskipa
1498 %
1499 % 次の \noindent まで追加
1500
       \ifdim \@tempskipa >\z@
1501
         \if@slide\else
1502
           \null
           \vspace*{-\baselineskip}%
1503
1504
         \vskip\@tempskipa
1505
1506
       \fi
     \fi
1507
     \noindent
1508
1509% 追加終わり
1510
    \@ifstar
       {\c {\c 43}{\#4}{\#5}{\#6}}%
1511
       {\@dblarg{\@sect{#1}{#2}{#3}{#4}{#5}{#6}}}}
   \Osect と \Oxsect は、前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように、多少変え
 てあります。\everyparhook も挿入しています。
1513 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
     \ifnum #2>\c@secnumdepth
1514
1515
       \let\@svsec\@empty
1516
       \verb|\refstepcounter{#1}||
1517
1518
       \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
1519
1520% 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
    \@tempskipa #5\relax
1522% 条件判断の順序を入れ換えました
1523 \ifdim \@tempskipa<\z@
```

```
\def\@svsechd{%
1524
         #6{\hskip #3\relax
1525
1526
         \@svsec #8}%
         \csname #1mark\endcsname{#7}%
1527
         \addcontentsline{toc}{#1}{%
1528
           \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1529
             \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
1530
1531
           #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
1532
     \else
1533
1534
       \begingroup
         \interlinepenalty \@M % 下から移動
1535
1536
         #6{%
           \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
1537
1538 %
           \interlinepenalty \@M % 上に移動
           #8\@@par}%
1539
       \endgroup
1540
       \csname #1mark\endcsname{#7}%
1541
1542
       \addcontentsline{toc}{#1}{%}
         \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1543
1544
           \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
1545
         #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1546
1547
     \fi
     \0xsect{#5}}
1548
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され,それ
 以降は前者が実行されます。
   [2016-07-28] slide オプションと twocolumn オプションを同時に指定した場合の罫線の
 位置を微調整しました。
1549 \def\@xsect#1{%
1550% 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #1\relax
1552% 条件判断の順序を変えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1553
1554
       \@nobreakfalse
       \global\@noskipsectrue
1555
       \everypar{%
1556
         \if@noskipsec
1557
           \global\@noskipsecfalse
1558
          {\setbox\z@\lastbox}%
1559
           \clubpenalty\@M
1560
           \begingroup \@svsechd \endgroup
1561
1562
           \unskip
           \@tempskipa #1\relax
1563
           \hskip -\@tempskipa
1564
           \bxjs@ltj@inhibitglue
1565
         \else
1566
```

```
\clubpenalty \@clubpenalty
1567
1568
             \everypar{\everyparhook}%
1569
          \fi\everyparhook}%
1570
      \else
        \par \nobreak
1571
        \vskip \@tempskipa
1572
        \@afterheading
1573
1574
      \if@slide
1575
        {\vskip\if@twocolumn-5\jsc@mpt\else-6\jsc@mpt\fi
1576
         \maybeblue\hrule height0\jsc@mpt depth1\jsc@mpt
1577
         \vskip\if@twocolumn 4\jsc@mpt\else 7\jsc@mpt\fi\relax}%
1578
      \fi
1579
      \par % 2000-12-18
1580
      \ignorespaces}
1581
1582 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
      \@tempskipa #3\relax
1583
      \ifdim \@tempskipa<\z@
1584
1585
        \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
      \else
1586
1587
        \begingroup
          #4{%
1588
             \@hangfrom{\hskip #1}%
1589
               \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
1590
        \endgroup
1591
1592
      \fi
      \0xsect{#3}}
1593
```

上記の定義中の \bxjs@ltj@inhibitglue は $LuaT_EX$ -ja で用いられるフック。 1594 \let\bxjs@ltj@inhibitglue\@empty

■柱関係の命令

\chaptermark \...mark の形の命令を初期化します(第7節参照)。\chaptermark 以外は LATEX 本体で \sectionmark 定義済みです。

■カウンタの定義

\c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。
1601 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}

1602 % <book | report > \setcounter { secnumdepth } { 2}

```
\c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは
            \cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
       \colone{1}{constant} 1603 \newcounter{part}
 1605 % <book | report > \newcounter { section } [ chapter ]
         \verb|\c@paragraph||_{1606} \% < \verb|!book&!report>\\ \verb|\newcounter{section}||
   \c@subparagraph 1607 \newcounter{subsection}[section]
                               1608 \newcounter{subsubsection} [subsection]
                               1609 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                               1610 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
                                カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
                                      カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。
           \thechapter
           \thesection
                                                                                    1, 2, 3, ...
                                             \arabic{COUNTER}
     \thesubsection
                                                                                   i. ii. iii. ...
                                             \roman{COUNTER}
\thesubsubsection
                                                                                   I, II, III, ...
                                             \Roman{COUNTER}
       \theparagraph
                                             \alph{COUNTER}
                                                                                    a, b, c, ...
  \thesubparagraph
                                             \Alph{COUNTER}
                                                                                     A, B, C, ...
                                                                                   一, 二, 三, ...
                                             \kansuji{COUNTER}
                                      以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。
                               1611 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                               1612 %<!book&!report>% \renewcommand{\thesection}{\Carabic\c@section}
                               1614 \% < !book \&! report > renew command \{ the subsection \} \{ \ arabic \ c@section . \ derabic \ c@subsection \} \} 
                               1615 %<*book|report>
                               1616 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                               1617 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
                               1619 %</book|report>
                               1620 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                                            \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
                               1621
                               1622 \renewcommand{\theparagraph}{%
                                            \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
                               1624 \renewcommand{\the subparagraph}{\%
                                            \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
              \@chapapp \@chapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
                                      \Ochappos の初期値は \postchaptername(章)です。
              \@chappos
                                      \appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。
                                      [2003-03-02] \@secapp は外しました。
                               1626 % <book | report > \newcommand { \Qchapapp} { \prechaptername}
                               1627 \label{local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_loca
```

■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」、それ以外が「前付」「後付」です。

\frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。

[2017-03-05] \frontmatter と \mainmatter の 2 つの命令は、改丁または改ページした 後で \pagenumbering{...} でノンブルを1にリセットします。長い間 \frontmatter は openany のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に 偶奇逆転が起こる場合がありました。openany かどうかに依らず奇数ページまで繰るように 修正することで、問題を解消しました。実は、IATEX の標準クラスでは 1998 年に修正され ていた問題です(コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/03/05 も参照)。

```
1628 %<*book|report>
```

1629 \newcommand\frontmatter{%

\pltx@cleartooddpage

\@mainmatterfalse 1631

1632 \pagenumbering{roman}}

\mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。

1633 \newcommand\mainmatter{%

\pltx@cleartooddpage

1635 \@mainmattertrue

1636 \pagenumbering{arabic}}

\backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。

1637 \newcommand\backmatter{%

\if@openleft 1638

1639 \cleardoublepage

\else\if@openright 1640

\cleardoublepage

\else 1642

1643 \clearpage

1644 \fi\fi

1645 \@mainmatterfalse}

1646 %</book|report>

■部

\part 新しい部を始めます。

\secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。

\secdef{星なし}{星あり}

星なし * のない形の定義です。

星あり * のある形の定義です。

\secdef は次のようにして使います。

```
\def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }
```

[#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義 \def\CMDA \def\CMDB % \chapter*{...} の定義 #1{....}

```
まず book と report のクラス以外です。
     1647 %<*!book&!report>
     1648 \newcommand\part{%
           \if@noskipsec \leavevmode \fi
     1649
     1650
     1651
           \addvspace{4ex}%
     1652
           \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
           \secdef\@part\@spart}
     1654 %</!book&!report>
         book および report クラスの場合は、少し複雑です。
     1655 %<*book|report>
     1656 \newcommand\part{%
           \if@openleft
     1657
     1658
             \cleardoublepage
           \else\if@openright
     1659
     1660
             \cleardoublepage
     1661
             \clearpage
     1662
     1663
           \fi\fi
           \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
     1664
           \if@twocolumn
     1665
     1666
             \onecolumn
             \@restonecoltrue
     1667
     1668
           \else
             \@restonecolfalse
     1669
           \fi
     1670
           \null\vfil
           \secdef\@part\@spart}
     1672
     1673 %</book|report>
\@part 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。
         book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付け
       ます。
     1674 %<*!book&!report>
     1675 \def\@part[#1]#2{%
           \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
             \refstepcounter{part}%
     1677
             \addcontentsline{toc}{part}{%
     1678
               1679
     1680
           \else
             \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
     1681
     1682
           \fi
           \markboth{}{}%
     1683
     1684
           {\parindent\z@
             \raggedright
     1685
             \interlinepenalty \@M
             \n
     1687
             \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
     1688
```

```
1689
                 \Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname
       1690
                 \par\nobreak
       1691
               \fi
               \huge \headfont #2%
       1692
               \markboth{}{}\par}%
       1693
             \nobreak
       1694
             \vskip 3ex
       1695
             \@afterheading}
       1697 %</!book&!report>
           book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
       1698 %<*book|report>
       1699 \def\@part[#1]#2{%
             \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
       1700
       1701
               \refstepcounter{part}%
               \addcontentsline{toc}{part}{%
       1702
       1703
                 \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\jsZw}#1}%
       1704
             \else
       1705
               \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
       1706
             \fi
             \markboth{}{}%
       1707
             {\centering
       1708
               \interlinepenalty \@M
       1709
               \n
       1710
       1711
               \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
                 \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
       1712
                 \par\vskip20\p@?
       1713
       1714
               \fi
               \Huge \headfont #2\par}%
       1715
       1716
             \@endpart}
       1717 %</book|report>
\@spart 番号を付けない部です。
       1718 %<*!book&!report>
       1719 \def\@spart#1{{%
               \parindent \z@ \raggedright
       1720
       1721
               \verb|\interline penalty \0M| \\
       1722
               \normalfont
               \huge \headfont #1\par}%
       1723
             \nobreak
       1724
       1725
             \vskip 3ex
             \@afterheading}
       1727 %</!book&!report>
       1728 %<*book|report>
       1729 \def\@spart#1{{%
       1730
               \centering
       1731
               \interlinepenalty \@M
       1732
               \normalfont
               \Huge \headfont #1\par}%
       1733
```

```
1734 \@endpart}
1735 %</book|report>
```

\@endpart \@part と \@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加します。二段組のときには、二段組に戻します。

[2016-12-13] openany のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは I $\stackrel{\text{LYT}}{=}$ X では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されています。

```
1736 %<*book|report>
1737 \def\@endpart{\vfil\newpage
     \if@twoside
1739
      \if@openleft %% added (2017/02/24)
1740
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
1741
       \else\if@openright %% added (2016/12/13)
       \null\thispagestyle{empty}\newpage
1742
      \fi\fi \% added (2016/12/13, 2017/02/24)
1743
1744
     \if@restonecol
1745
1746
       \twocolumn
1747 \fi}
```

■章

\chapter 章の最初のページスタイルは、全体が empty でなければ plain にします。また、\@topnum を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。

```
1749 %<*book|report>
```

1748 %</book|report>

1750 \newcommand{\chapter}{\%

- ${\tt 1751} \quad \verb|\if@openleft\cleardoublepage\else| \\$
- 1752 \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
- 1753 \plainifnotempty % 元: \thispagestyle{plain}
- 1754 \global\@topnum\z@
- 1755 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
- 1756 \secdef
- 1757 {\@omit@numberfalse\@chapter}%
- 1758 {\@omit@numbertrue\@schapter}}

\@chapter 章見出しを出力します。**secnumdepth** が 0 以上かつ **\@mainmatter** が真のとき章番号を出力します。

```
1759 \texttt{\def\@chapter[#1]#2} \%
```

- 1760 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
- 1761 \if@mainmatter
- 1762 \refstepcounter{chapter}%
- 1764 \addcontentsline{toc}{chapter}%
- 1765 {\protect\numberline
- 1766 % %{\if@english\thechapter\else\@chapapp\thechapter\@chappos\fi}%

```
{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                                              1767
                                              1768
                                              1769
                                                                   \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
                                                             \else
                                              1770
                                                                  \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
                                              1771
                                                             \fi
                                              1772
                                                             \chaptermark{#1}%
                                              1773
                                                              \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                                                             \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                                              1775
                                              1776
                                                                   \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
                                              1777
                                                             \else
                                              1778
                                                                   \@makechapterhead{#2}%
                                              1779
                                                                   \@afterheading
                                              1780
                                              1781
  \@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。 \bfseries を \headfont に変えました。
                                              1782 \def\@makechapterhead#1{%
                                                             \vspace*{2\Cvs}% 欧文は 50pt
                                              1783
                                                              {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                                              1784
                                              1785
                                                                   \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                                                                        \if@mainmatter
                                              1786
                                              1787
                                                                             \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                                                                             \par\nobreak
                                              1788
                                                                             \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                                              1789
                                              1790
                                                                        \fi
                                                                   \fi
                                              1791
                                              1792
                                                                   \interlinepenalty\@M
                                              1793
                                                                   \Huge \headfont #1\par\nobreak
                                                                  \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                                              1794
                    \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                                              1795 \def\@schapter#1{%
                                              1796
                                                             \chaptermark{#1}%
                                                             \if@twocolumn
                                              1797
                                                                  \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                                              1798
                                              1799
                                                             \else
                                                                   \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                                              1800
                                              1801
                                                             fi
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                                              1802 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\
                                                             \vspace*{2\Cvs}% 欧文は 50pt
                                              1803
                                                             {\parindent \z@ \raggedright
                                              1804
                                              1805
                                                                  \normalfont
                                              1806
                                                                  \interlinepenalty\@M
                                               1807
                                                                   \Huge \headfont #1\par\nobreak
                                                                  \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                                              1808
                                              1809 %</book|report>
```

■下位レベルの見出し

\section 欧文版では \@startsection の第 4 引数を負にして最初の段落の字下げを禁止していますが、和文版では正にして字下げするようにしています。

段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。

```
1810 \if@twocolumn
                 \newcommand{\section}{%
            1811
            1812 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                    \@startsection{section}{1}{\z@}%
            1814 %<!kiyou>
                            \{0.6\Cvs\}\{0.4\Cvs\}\%
                           {\Cvs}{0.5\Cvs}%
            1815 %<kiyou>
                    {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
            1816 %
            1817
                    {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
            1818 \else
            1819 \newcommand{\section}{%
             1820
                   \if@slide\clearpage\fi
                   \ensuremath{\tt 0startsection{section}{1}{\ensuremath{\tt 1}}{\ensuremath{\tt 20}}\%
            1821
                    {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
                    {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
            1823
            1824 %
                    {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
             1825
                    {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
            1826 \fi
  \subsection 同上です。
            1827 \if@twocolumn
                 \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%
                    \label{linear_condition} $$ \sum_{i=0}^{i} 0.4\cvs \le z0 \fi}%
            1829
                    {\normalfont\normalsize\headfont}}
            1830
            1831 \else
                 1832
                    {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
            1833
                    {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
             1834
            1835
                    {\normalfont\large\headfont}}
             1836 \fi
\subsubsection [2016-07-22] slide オプション指定時に \subsubsection の文字列と罫線が重なる問題に
              対処しました (forum:1982)。
            1837 \if@twocolumn
                  {\z0}{\left(x_0\right)} = .4\cvs \le \z0 \fi}%
            1839
                    {\normalfont\normalsize\headfont}}
            1840
             1841 \else
                 1842
                    {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%
            1843
                    1844
                    {\normalfont\normalsize\headfont}}
            1845
             1846 \fi
```

\paragraph 見出しの後ろで改行されません。

[2016-11-16] 従来は \paragraph の最初に出るマークを「■」に固定していましたが、このマークを変更可能にするため \jsParagraphMark というマクロに切り出しました。これで、たとえば

\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラスでは従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から \jsParagraphMark をサポートしている。 段落のマーク (\blacksquare) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

\jsJaChar は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は \jachar と同義になるが、 それ以外は何もしない。

```
1847 \newcommand\jsParagraphMark{\jsJaChar{■}}
           1848 \ifx\bxjs@paragraph@mark\@empty
           1849 \let\jsParagraphMark\@empty
           1850 \else\ifx\bxjs@paragraph@mark\@undefined\else
           1851 \long\edef\jsParagraphMark{\noexpand\jsJaChar{\bxjs@paragraph@mark}}
           1852 \fi\fi
           1853 \let\jsJaChar\@empty
           1854 \if@twocolumn
                \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
           1855
                   {\z0}{\if0slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
                         {\normalfont\normalsize\headfont}}
           1857 %<jspf>
           1858 %<!jspf>
                          {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
           1859 \else
                \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
           1860
                  {0.5\cvs \clus.5\cdp \clus.2\cdp}%
                  {\ifOslide .5\Cvs \Oplus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
           1863 %<jspf>
                         {\normalfont\normalsize\headfont}}
           1864 %<!jspf>
                          {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
           1865 \fi
\subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
           1866 \if@twocolumn
                 \label{limits} $$ \sum_{s=0}^{\slight only on the conditions} Cdp \leq -1\jsZw\fi}%
           1868
                  {\normalfont\normalsize\headfont}}
           1869
           1870 \else
                 {\z0}{\in Cvs \c) -1\jsZw\fi}%
           1873
                  {\normalfont\normalsize\headfont}}
           1874 \fi
```

8.3 リスト環境

第 k レベルのリストの初期化をするのが \@listk です (k = i, ii, iii, iv)。 \@listkは \leftmargin を \leftmargink に設定します。

\leftmargini 二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが, ここでは全角幅の 2 倍にし ました。

[2002-05-11] 3zw に変更しました。

[2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。

1875 \if@slide

1876 \setlength\leftmargini{1\jsZw}

1877 \else

\if@twocolumn 1878

\setlength\leftmargini{2\jsZw} 1879

1880 \else

\setlength\leftmargini{3\jsZw} 1881

1882 \fi

1883 \fi

\leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくすること \leftmarginiii になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。

```
\verb|\label{leftmarginiv}| 1884 \verb|\label{leftm
```

 $\verb|\leftmarginv||^{1885}$ \setlength\leftmarginii {1\jsZw}

1886 \setlength\leftmarginiii{1\jsZw}

 $\label{leftmarginvi} $$ 1887 \quad \mathbf{1}_{1887} $$ \$

\setlength\leftmarginv {1\jsZw} 1888

\setlength\leftmarginvi {1\jsZw} 1889

1890 \else

1891 \setlength\leftmarginii {2\jsZw}

1892 \setlength\leftmarginiii{2\jsZw}

\setlength\leftmarginiv {2\jsZw} 1893

\setlength\leftmarginv {1\jsZw}

\setlength\leftmarginvi {1\jsZw} 1895

1896 \fi

\labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分 \labelwidth に変えました。

1897 \setlength \labelsep $\{0.5\jsZw\} \%$.5em

1898 \setlength \labelwidth{\leftmargini}

1899 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}

\partopsep リスト環境の前に空行がある場合, \parskip と \topsep に \partopsep を加えた値だけ 縦方向の空白ができます。0 に改変しました。

1900 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}

\@beginparpenalty リストや段落環境の前後,リスト項目間に挿入されるペナルティです。

\@endparpenalty

\@itempenalty

```
1901 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
                                                                       -\@lowpenalty
                     1902 \@endparpenalty
                     1903 \@itempenalty
                                                                       -\@lowpenalty
    \@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を
    \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえば \small の
                         中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せる
                         ように、\@listI で \@listi のコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここで
                         は簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてありま
                         す。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ最初と
                         最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。
                             [2004-09-27] \topsep のグルー ^{+0.2}_{-0.1} \baselineskip を思い切って外しました。
                     1904 \ensuremath{\mbox{\sc leftmargin}}\ensuremath{\mbox{\sc leftmargin}}\ensuremath}\ensuremath{\mbox{\sc leftmargin}}\ensuremath{\mbox{\sc
                                  \parsep \z@
                                  \topsep 0.5\baselineskip
                     1906
                                 \itemsep \z@ \relax}
                     1908 \let\@listI\@listi
                             念のためパラメータを初期化します (実際には不要のようです)。
                     1909 \@listi
 \colone{1} (Clistii 第 2\sim6 レベルのリスト環境のパラメータの設定です。
\@listiii 1910 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
  \verb|\@listiv|^{1911}
                                  \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
                     1912
                                \topsep \z@
    \verb|\@listv|_{1913}
                                  \parsep \z@
                                  \itemsep\parsep}
  \@listvi 1914
                     1915 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
                                  \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
                                  \topsep \z@
                     1917
                     1918
                                  \parsep \z@
                                  \itemsep\parsep}
                     1920 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
                     1921
                                                              \labelwidth\leftmarginiv
```

 \blacksquare enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumiii, enumiv を使います。 enumn は第 n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは I₽TEX 本体(ltlists.dtx 参照)で定義済み \theenumii ですが、ここでは表し方を変えています。\@arabic, \@alph, \@roman, \@Alph はそれぞ \theenumiii

 $\verb|\advance| labelwidth-| labelsep||$

\advance\labelwidth-\labelsep}

\advance\labelwidth-\labelsep}

\labelwidth\leftmarginv

\labelwidth\leftmarginvi

1923 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv

1926 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi

1922

1924

1925

1927 1928 れ算用数字,小文字アルファベット,小文字ローマ数字,大文字アルファベットで番号を出力する命令です。

- 1929 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}
- 1930 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}
- 1931 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
- 1932 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付 \labelenumii きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に \labelenumiii 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。

\labelenumiv

和文の括弧で囲むための補助命令 \jsInJaParen を定義して \labelenumii でそれを用いている。

※現状の zxjatype の \inhibitglue の実装には「前後のグルーを消してしまう」という不備があって、そのため enumii の出力が異常になるという不具合があった。zxjatype を修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫(\bxjs@dust)でガードしておく。

1933 \def\bxjs@dust{\vrule\@width\z@\@height\z@\@depth\z@}

- 1934 \newcommand*{\jsInJaParen}[1]{%
- 1935 \bxjs@dust\jsInhibitGlue (\theenumii) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}
- 1936 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
- 1937 \newcommand{\labelenumii}{\jsInJaParen{ (\theenumii) }}
- 1938 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
- 1939 $\mbox{\labelenumiv}{\theenumiv.}$

\p@enumii \p@enumn は \ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書 \p@enumiii 式です。これも第 2 レベルは和文用かっこにしました。

 $\verb|\pQenumiv| 1940 \verb|\renewcommand{pQenumii}{\theenumi}|$

- 1941 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii) }
- 1942 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}

■itemize 環境

\labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。

 $\verb|\labelitemii| 1943 \verb|\labelitemii| \{ textbullet \}$

 $\verb|\labelitemiii| 1944 \verb|\newcommand| labelitemii{\normalfont\bfseries \textendash}|$

1945 \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered}

 $\verb|\labelitemiv|_{1946} \verb|\labelitemiv{\texttextperiodcentered}|$

■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

1947 \newenvironment{description}{\%

1948 \list{}{%

```
1949 \labelwidth=\leftmargin
```

- 1950 \labelsep=1\jsZw
- 1951 \advance \labelwidth by -\labelsep
- 1952 \let \makelabel=\descriptionlabel}}{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\jsZw}) を入れるのもいいと思います。

1953 \newcommand*\descriptionlabel[1]{\normalfont\headfont #1\hfil}

■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは, 独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので, list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

bxjsreport クラスの abstract 環境は:

- layout=v1 の場合は jsbook + report の動作を継承する。 つまり jsbook と同じに なる。
- layout=v2 の場合は新設の jsreport の動作を継承する。つまり jsarticle (+titlapage) と同じになる。

chapterabstract jsbook の abstract 環境 (「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの)を chapterabstract と呼ぶことにする。

```
1954 %<*book|report>
```

1955 \newenvironment{chapterabstract}{%

1956 \begin{list}{}{%

1957 \listparindent=1\jsZw

1958 \itemindent=\listparindent

1959 \rightmargin=\z@

 $\label{list} $$ 1960 \qquad \left[\right]_{\c m[]}{\c m[]}{\c m[]}{\c m[]}{\c m[]}{\c m[]}{\c m[]}$

1961 %</book|report>

"普通の" abstract 環境の定義。

1962 %<*article|report|slide>

1963 $\newbox\@abstractbox$

 $1964 \ \text{if@titlepage}$

1965 \newenvironment{abstract}{%

1966 \titlepage

1967 \null\vfil

1968 \@beginparpenalty\@lowpenalty

1969 \begin{center}%

1970 \headfont \abstractname

1971 \@endparpenalty\@M

1972 \end{center}%

BXJS クラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。

```
1973
        \par}%
1974
      {\par\vfil\null\endtitlepage}
1975 \else
      \newenvironment{abstract}{%
1976
        \if@twocolumn
1977
          \ifx\maketitle\relax
1978
1979
            \section*{\abstractname}%
          \else
1980
            \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
1981
            \begin{minipage}[b]{\textwidth}
1982
              \small\parindent1\jsZw
1983
1984
              \begin{center}%
                {\mbox{\locality} {\mbox{\locality} \mbox{\locality}} \% }
1985
1986
              \end{center}%
              \left\{ \right\} 
                \listparindent\parindent
1988
                \itemindent \listparindent
1989
                \rightmargin \leftmargin}%
1990
              \item\relax
1991
          \fi
1992
1993
        \else
          \small
1994
1995
          \begin{center}%
            1996
1997
          \end{center}%
          \left\{ \right\} 
1998
1999
            \listparindent\parindent
2000
            \itemindent \listparindent
            \rightmargin \leftmargin}%
2001
          \item\relax
2002
        \fi}{\if@twocolumn
2003
2004
          \ifx\maketitle\relax
2005
            \endlist\end{minipage}\egroup
2006
          \fi
2007
2008
        \else
          \endlist
2009
2010
        \fi}
2011 \fi
2012 %</article|report|slide>
2013 %<*jspf>
2014 \newbox\@abstractbox
2015 \newenvironment{abstract}{%
      \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2016
2017
      \begin{minipage}[b]{157mm}{\sffamily Abstract}\par
2018
2019
        \if@english \parindent6mm \else \parindent1\jsZw \fi}%
```

```
2020 {\end{minipage}\egroup}
2021 %</jspf>
bxjs@force@chapterabstract が真の場合は、abstract 環境を chapterabstract 環境と
等価にする。
2022 %<*book|report>
2023 \ifbxjs@force@chapterabstract
2024 \let\abstract\chapterabstract
2025 \let\endabstract\endchapterabstract
2026 \fi
```

■キーワード

2027 %</book|report>

keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。

```
2028 %<*jspf>
2029 %\newbox\@keywordsbox
2030 %\newenvironment{keywords}{%
2031 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
2032 % \begin{minipage}[b]{157mm}{\sffamily Keywords:}\par
2033 % \small\parindentO\jsZw}%
2034 % {\end{minipage}\egroup}
```

■verse 環境

2035 %</jspf>

```
verse 詩のための verse 環境です。
```

```
2036 \newenvironment{verse}{%
2037
     \let \\=\@centercr
2038
     \left\{ \right\} 
2039
        \itemsep \z@
        \itemindent -2\jsZw % 元: -1.5em
2040
2041
        \listparindent\itemindent
        \rightmargin \z@
2042
        \advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em
      \item\relax}{\endlist}
2044
```

■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を $1.5 \mathrm{em}$ から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

```
2045 \newenvironment{quotation}{%
2046 \list{}{%
2047 \listparindent\parindent
2048 \itemindent\listparindent
2049 \rightmargin \z@}%
2050 \item\relax}{\endlist}
```

■quote 環境

quote quote 環境は,段落がインデントされないことを除き, quotation 環境と同じです。 2051 \newenvironment{quote}%

2052 ${\left(\sum_{x\in \mathbb{Z}_{\infty}} \right) \in \mathbb{Z}_{\infty}}$

■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

\newtheorem{definition}{定義} \newtheorem{axiom}{公理} \newtheorem{theorem}{定理}

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、\itshape を削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し、 \labelsep を 1 zw にし、括弧を全角に しました。

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 pI $oldsymbol{PITEX}$ の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,book クラスでタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても,横組クラスしかありませんでしたので,従来の挙動は何も変わっていません。また,book 以外の場合のページ番号のリセットもコミュニティ版 pI $oldsymbol{PITEX}$ の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが,こちらも片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので,従来の挙動は何も変わらずに済みました。

2057 \newenvironment{titlepage}{%

2058 % <book> \pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24

2059 \if@twocolumn

2060 \@restonecoltrue\onecolumn

2061 \else

2062 \@restonecolfalse\newpage

2063 \fi

2064 \thispagestyle{empty}%

2066 }%

2068 \if@twoside\else

2069 \setcounter{page}\@ne

2070 \fi}

■付録

\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。

```
2071 %<*!book&!report>
2072 \newcommand{\appendix}{\par
2073 \setcounter{section}{0}%
2074 \setcounter{subsection}{0}%
     \gdef\presectionname{\appendixname}%
2075
2076 \gdef\postsectionname{}%
2077 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]
      \gdef\thesection{\presectionname\@Alph\c@section\postsectionname}%
      \gdef\thesubsection{\@Alph\c@section.\@arabic\c@subsection}}
2080 %</!book&!report>
2081 %<*book|report>
2082 \mbox{newcommand{\appendix}{\par}}
     \setcounter{chapter}{0}%
2084 \setcounter{section}{0}%
2085
     \gdef\@chapapp{\appendixname}%
     \gdef\@chappos{}%
     \gdef\thechapter{\@Alph\c@chapter}}
2087
2088 %</book|report>
```

8.4 パラメータの設定

■array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 2089 \setlength\arraycolsep{5\p@?}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。
2090 \setlength\tabcolsep{6\p@?}

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

 $2091 \verb|\setlength\arrayrulewidth{.4\p@}|$

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 2092 \setlength\doublerulesep{2\p0}

■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

 $2093 \stlength \tabbingsep{\labelsep}$

■minipage 環境

Compfootins minipage 環境の脚注の \skip\Compfootins は通常のページの \skip\footins と同じ働きをします。

2094 \skip\@mpfootins = \skip\footins

■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

2095 \setlength\fboxsep{3\p@?}

2096 \setlength\fboxrule{.4\p0}

■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

2097 %<!book&!report>\renewcommand \theequation {\@arabic\c@equation}

2098 %<*book|report>

2099 \@addtoreset{equation}{chapter}

2100 \renewcommand\theequation

2101 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}

2102 %</book|report>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

2103 % \setlength\jot{3pt}

\@eqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\jsInhibitGlue (\theequation) \jsInhibitGlue のように和文かっこを使うことも可能です。

2104 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。

2105 % \def\tagform@#1{\maketag@@@{ (\ignorespaces#1\unskip\@@italiccorr) }}

8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置(float placement specifier)です。

 $\footnote{offtype@TYPE}$ フロートの番号です。2 の累乗(1, 2, 4, ...)でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

\@makecaption $\langle num \rangle \langle text \rangle$ キャプションを出力するマクロです。 $\langle num \rangle$ は \fnum@... の生成する番号, $\langle text \rangle$ はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

■figure 環境

\c@figure 図番号のカウンタです。

```
\thefigure 図番号を出力するコマンドです。
            2106 %<*!book&!report>
            2107 \newcounter{figure}
            2108 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}
            2109 %</!book&!report>
            2110 %<*book|report>
            2111 \newcounter{figure}[chapter]
            2112 \renewcommand \thefigure
                     {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}
            2113
            2114 %</book|report>
 \fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外し
\ftype@figure ました。
 \ext@figure 2115 \def\fps@figure{tbp}
2118 \def\fnum@figure{\figurename\nobreak\thefigure}
      figure *形式は段抜きのフロートです。
     figure * 2119 \newenvironment{figure}%
            2120
                              {\@float{figure}}%
            2121
                              {\end@float}
            2122 \newenvironment{figure*}%
            2123
                              {\@dblfloat{figure}}%
            2124
                               {\end@dblfloat}
              ■table 環境
    \c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が
   \t \thetable \thechapter{} · になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。
            2125 %<*!book&!report>
            2126 \newcounter{table}
            2127 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
            2128 %</!book&!report>
            2129 %<*book|report>
            2130 \newcounter{table}[chapter]
            2131 \ \renewcommand \thetable
            2132
                     {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
            2133 %</book|report>
  \fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外しま
\ftype@table した。
  \verb|\ext@table|^{2134} \def\fps@table{tbp}|
 \label{local-prop} $$ \int_{2135 \left( \frac{1}{5} \right)} \left( \frac{2}{5} \right) = 136 \left( \frac{1}{5} \right) $$
            2137 \def\fnum@table{\tablename\nobreak}\thetable}
       table * は段抜きのフロートです。
      table*
```

```
2138 \newenvironment{table}%
```

2139 {\@float{table}}%

 $2140 \qquad \qquad \{\end@float\}$

2141 \newenvironment{table*}%

2142 {\@dblfloat{table}}%

2143 {\end@dblfloat}

8.6 キャプション

\@makecaption \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。 \belowcaptionskip が 0 になっ \belowcaptionskip ていましたので、キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしま うのを直しました。

- 2144 \newlength\abovecaptionskip
- 2145 \newlength\belowcaptionskip
- 2146 \setlength\abovecaptionskip{5\p@?} % 元: 10\p@
- 2147 \setlength\belowcaptionskip{5\p@?} % 元: 0\p@

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2 cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

- 2148 %<*!jspf>
- 2149 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small
- 2150 % \advance\leftskip1cm
- 2151 % \advance\rightskip1cm
- 2152 % \vskip\abovecaptionskip
- 2153 % \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\jsZw\relax #2}%
- 2154 % \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
- 2155 % #1\hskip1\jsZw\relax #2\par
- 2156 % \else
- 2157 % \global \@minipagefalse
- 2158 % \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
- 2159 % \fi
- 2160 % \vskip\belowcaptionskip}}
- $2161 \verb|\long\def\@makecaption#1#2{{\small}}|$
- 2162 \advance\leftskip .0628\linewidth
- 2163 \advance\rightskip .0628\linewidth
- 2164 \vskip\abovecaptionskip
- 2166 \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi
- 2167 #1\zwspace#2\par
- 2168 \vskip\belowcaptionskip}}
- 2169 %</!jspf>
- 2170 %<*jspf>
- 2171 \long\def\@makecaption#1#2{%

```
2172
      \vskip\abovecaptionskip
2173
      \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
      \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
        {\small\sffamily
2175
          \list{#1}{%
2176
            \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
2177
                         \z@
2178
            \itemsep
2179
            \itemindent \z@
            \labelsep
                         \z0
2180
            \labelwidth 11mm
2181
2182
            \listparindent\z@
2183
            \leftmargin 11mm}\item\relax #2\endlist}
     \else
2184
        \global \@minipagefalse
2185
2186
        \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2187
      \vskip\belowcaptionskip}
2188
2189 %</jspf>
```

9 フォントコマンド

ここでは \LaTeX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ \text... と \math... を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の \scr@DeclareOldFontCommand に倣い、これらの命令を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さないようにするスイッチも付けます。

\if@jsc@warnoldfontcmd

f@jsc@warnoldfontcmdexception

\if@jsc@warnoldfontcmd はBXJS クラスでは不使用。

\if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態を表す。

```
2190 \newif\if@jsc@warnoldfontcmd
2191 \@jsc@warnoldfontcmdtrue
2192 \newif\if@jsc@warnoldfontcmdexception
2193 \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse
```

\jsc@DeclareOldFontCommand

```
2194 \newcommand*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{%
2195 \g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}%
2196 \DeclareOldFontCommand{#1}{%
2197 \bxjs@oldfontcmd{#1}#2%
2198 }{%
```

```
\bxjs@oldfontcmd{#1}#3%
                        2200
                              }%
                        2201 }
                        2202 \DeclareRobustCommand*{\jsc@warnoldfontcmd}[1]{%
                              \ClassInfo\bxjs@clsname
                               {Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak
                        2204
                        2205
                                The first occurrence is}%
                        2206 }
                         "二文字フォント命令"の使用を許可する(警告しない)。
  \allowoldfontcommands
                          "二文字フォント命令"の使用に対して警告を出す。
\disallowoldfontcommands
                        2207 \newcommand*{\allowoldfontcommands}{%
                              \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue}
                        2209 \newcommand*{\disallowoldfontcommands}{%
                              \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse}
                          ※ 1.x 版では Warning ではなく Info に留めておく。
                        2211 \let\bxjs@oldfontcmd@list\@empty
                        2212 \def\bxjs@oldfontcmd#1{%
                              \expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1}
                        2214 \def\bxjs@oldfontcmd@a#1#2{%
                              \if@jsc@warnoldfontcmdexception\else
                        2215
                        2216
                                \global\@jsc@warnoldfontcmdfalse
                        2217
                                \int x#1\relax
                                  \global\let#1=t%
                        2218
                                  \jsc@warnoldfontcmd{#2}%
                        2219
                                \fi
                        2220
                              \fi}
                        2221
                        2222 \def\bxjs@warnoldfontcmd@final{%
                        2223 % \par
                              \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
                        2224
                        2225
                              \let\@tempa\@empty
                              \def\do##1{%
                        2226
                                \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
                        2227
                                  \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
                        2228
                        2229
                              \bxjs@oldfontcmd@list
                        2230
                              \ifx\@tempa\@empty\else
                                \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                        2231
                                 {Some old font commands were used in text\MessageBreak
                        2232
                                  (see the log file for detail)}%
                        2233
                        2234
                                \ClassInfo\bxjs@clsname
                        2235
                                 {Some old font commands were used in text:\MessageBreak
                                  \space\@tempa\MessageBreak
                        2236
                                  You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak
                        2237
                                  new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak
                        2238
```

2199

new, combinable font commands. The

2239

```
2240 class provides\MessageBreak
```

- the old font commands
- 2242 only for compatibility%
- 2243 \@gobble}%
- 2244 \fi}

単純に \AtEndDocument のフックの中で \bxjs@warnoldfontcmd@final を実行した場合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行されるため捕捉できない。これに対処するため、\end{document} 中に実行される \clearpage の処理の直後に \bxjs....final が呼ばれるようにする。

2245 \def\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%

- 2246 \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}
- 2247 \AtEndDocument{\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}

\mc フォントファミリを変更します。

```
\label{locality} $$ \gt 2248 \jsc@DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc} $$
```

 $2250 \verb|\jsc@DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}|$

 $\label{lem:command} $$ _{2251 in malfont\sffamily}{\mathbf{f}_{2251 in malfont\sffamily}} $$$

\bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries です。

 $2253 \verb|\jsc@DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mbox{\mbox{\backslash}}}$

\it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま \sl せん (警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape \sc です。

 $2254 \ \texttt{\label{localine} fontCommand{\tilde{\localine}} {\bf \localine} {\bf \$

\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。

\mit 2257 \DeclareRobustCommand*{\cal}{\@fontswitch\relax\mathcal}
2258 \DeclareRobustCommand*{\mit}{\@fontswitch\relax\mathnormal}

10 相互参照

10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば \section に見出し番号が付く場合,上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \lo... というコマンドを実行するので, あらかじめ \lochapter, \location, \lofigure などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \odottedtocline コマンドを使って定義します。これは

\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\@pnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

\Otocrmarg 右マージンです。\Otocrmarg \geq \Opnumwidth とします。

\@dotsep 点の間隔です(単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが,ここでは一つずつ減らしています。

2259 \newcommand\@pnumwidth{1.55em}

2260 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}

2261 \newcommand\@dotsep{4.5}

2262 %<!book&!report>\setcounter{tocdepth}{2}

2263 % <book | report > \setcounter { tocdepth } { 1 }

■目次

\tableofcontents 目次を生成します。

\jsc@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)

 $2264 \verb|\newdimen\jsc@tocl@width|$

2265 \newcommand{\tableofcontents}{%

2266 %<*book|report>

 $\tt 2267 \verb| \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}| % \cite{Constraints} and the large of th$

2268 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%

2269 \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima \setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi

2270 \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi

```
2271
               \if@twocolumn
         2272
                 \@restonecoltrue\onecolumn
         2273
                 \@restonecolfalse
         2274
         2275
               \chapter*{\contentsname}%
         2276
               \@mkboth{\contentsname}{}%
         2278 %</book|report>
         2279 %<*!book&!report>
               \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%
               \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
         2281
               2282
               \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
               \section*{\contentsname}%
         2284
         2285
               \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
         2286 %</!book&!report>
         2287
               \@starttoc{toc}%
         2288 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
         2289 }
  \1@part 部の目次です。
         2290 \newcommand*{\l@part}[2]{%
               \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
         2292 %<!book&!report>
                                \addpenalty\@secpenalty
         2293 %<book|report>
                               \addpenalty{-\@highpenalty}%
         2294
                 \addvspace{2.25em \@plus\p@?}%
         2295
                 \begingroup
                   \parindent \z@
         2296
                   \@pnumwidth should be \@tocrmarg
         2297 %
         2298 %
                   \rightskip \@pnumwidth
                   \rightskip \@tocrmarg
         2299
                   \parfillskip -\rightskip
         2300
         2301
                   {\leavevmode
         2302
                     \large \headfont
                     \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
         2303
         2304
                     #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
         2305
                   \nobreak
         2306 % < book | report >
                               \global\@nobreaktrue
         2307 % < book | report >
                               \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
         2308
                 \endgroup
         2309
               \fi}
\lochapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。
             [2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by
           ts)
         2310 %<*book|report>
         2311 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
         2312 \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
                 \addpenalty{-\@highpenalty}%
         2313
```

```
\addvspace{1.0em \@plus\p@?}
              2314
                                            % book.cls では↑がこうなっている
              2315 %
                      \vskip 1.0em \@plus\p@
              2316
                      \begingroup
              2317
                       \parindent\z@
              2318 %
                       \rightskip\@pnumwidth
              2319
                       \rightskip\@tocrmarg
              2320
                       \parfillskip-\rightskip
              2321
                       \leavevmode\headfont
                       \% \in \mathbb{1}_{0.5}
              2322 %
                       \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2.683\jsZw
              2323
                       \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
              2324
                       #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
              2325
                       \penalty\@highpenalty
              2326
                      \endgroup
              2327
              2328
                    \fi}
              2329 %</book|report>
     \l0section 節の目次です。
              2330 %<*!book&!report>
              2331 \newcommand*{\l@section}[2]{%
                    \ifnum \c@tocdepth >\z@
                      \addpenalty{\@secpenalty}%
              2333
              2334
                      \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
              2335
                      \begingroup
              2336
                       \parindent\z@
              2337 %
                       \rightskip\@pnumwidth
                       \rightskip\@tocrmarg
              2338
              2339
                       \parfillskip-\rightskip
              2340
                       \leavevmode\headfont
              2341 %
                       % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
              2342
                       \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2\jsZw
              2343
                       \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
              2344
                       1\ to 0\ to 0\ pnumwidth {\hss#2}\par
              2345
                      \endgroup
                    \fi}
              2346
              2347 %</!book&!report>
                  インデントと幅はそれぞれ 1.5 \text{em}, 2.3 \text{em} でしたが、1 \text{zw}, 3.683 \text{zw} に変えました。
              [2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
                さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので、要修正かも
  \1@subsection
                しれません。
\1@subsubsection
                  [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
   \1@paragraph
\verb|\label{eq:condition}| 10subparagraph $2349 \%<*!book&!report>|
              2350 % \newcommand*{\l@subsection}
                                               {\dot{cline}{2}{1.5em}{2.3em}}
              2351 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
              2352 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                               {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
```

```
2354 %
          2355 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\jsZw}{3\jsZw}}
          2356 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                           {\@dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}
          2357 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
          2358 %
          2359 \newcommand*{\l@subsection}{%
          2360
                       \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                       \cline{2}{\cline{3\jsZw}}
          2361
          2362 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                       \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
          2363
                       \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\jsZw}}
          2364
          2365 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                       \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
          2366
          2367
                       \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5\jsZw}}
          2368 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                       \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2\jsZw
          2369
                       \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
          2370
          2371 %</!book&!report>
          2372 %<*book|report>
          2373 % \newcommand*{\l@subsection}
                                           {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
          2374\% \mbox{\losses} {\dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
          2375 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                           {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
          2376 % \newcommand*{\l0subparagraph} {\0dottedtocline{5}{12em}{6em}}
          2377 \newcommand*{\l@section}{%
                       \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
          2378
                       \@dottedtocline{1}{\@tempdima}{3.683\jsZw}}
          2379
          2380 \newcommand*{\l@subsection}{%
                       \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
                       \dot{0}
          2382
          2383 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
          2384
                       \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\jsZw
                       \cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{4.5\jsZw}}}}
          2385
          2386 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                       2387
                       \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5.5\jsZw}}
          2388
          2389 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                       \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw
          2390
                       \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6.5\jsZw}}
          2391
          2392 %</book|report>
\numberline 欧文版 LATFX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
           すが、アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
\@lnumwidth
           に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
            入れておきました。
          2393 \newdimen\@lnumwidth
          2394 \def\numberline#1{\hb@xt@\ellnumwidth{#1\hfil}\hspace{0pt}}
```

2353 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}

```
\@dottedtocline IATFX 本体(ltsect.dtx 参照)での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
                変えています。
              2395 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                    \vskip \z@ \@plus.2\p@?
                    {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
              2397
                      \parindent #2\relax\@afterindenttrue
              2398
                     \interlinepenalty\@M
              2399
                     \leavevmode
              2400
                     \@lnumwidth #3\relax
              2401
              2402
                     \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
              2403
                      {#4}\nobreak
                      \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep
              2404
                         mu$}\hfill \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
              2405
              2406
                           \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                ■図目次と表目次
\listoffigures 図目次を出力します。
              2407 \newcommand{\listoffigures}{\%
              2408 %<*book|report>
              2409 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
              2410 \else\@restonecolfalse\fi
              2411 \chapter*{\listfigurename}%
              2412 \@mkboth{\listfigurename}{}%
              2413 %</book|report>
              2414 %<*!book&!report>
                   \section*{\listfigurename}%
              2415
                   \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
              2417 %</!book&!report>
              2418 \@starttoc{lof}%
              2419 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
              2420 }
     \1@figure 図目次の項目を出力します。
              2421 \newcommand*{\l0figure}{\0dottedtocline{1}{1\jsZw}{3.683\jsZw}}
  \listoftables 表目次を出力します。
              2422 \newcommand{\listoftables}{%
              2423 %<*book|report>
              2424 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
              2425
                   \else\@restonecolfalse\fi
              2426 \chapter*{\listtablename}%
              2427 \@mkboth{\listtablename}{}%
              2428 %</book|report>
              2429 %<*!book&!report>
              2430 \section*{\listtablename}%
                    \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
```

2432 %</!book&!report>

\1@table 表目次は図目次と同じです。

2436 \let\l@table\l@figure

10.2 参考文献

\bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。

2437 \newdimen\bibindent

 $2438 \setlength\bibindent{2\jsZw}$

thebibliography 参考文献リストを出力します。

2467

\endlist}

[2016-07-16] L 4 TeX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を、文献スタイル (.bst) ではよく 4 がいまだに用いられることが多いため、thebibliography 環境内では例外的 に出さないようにしました。

```
2439 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
    \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue
    \global\let\presectionname\relax
    \global\let\postsectionname\relax
2444 %<*kiyou>
2445
    \vspace{1.5\baselineskip}
    \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}%
    \vspace{0.5\baselineskip}
2447
2448 %</kiyou>
\list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
         2452
2453
          \leftmargin\labelwidth
2454
          \advance\leftmargin\labelsep
          \@openbib@code
2455
          \usecounter{enumiv}%
2456
          \let\p@enumiv\@empty
2457
          \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
2458
2459 %<kiyou>
           \small
     \sloppy
2460
     \clubpenalty4000
2461
     \@clubpenalty\clubpenalty
2462
     \widowpenalty4000%
2463
     \sfcode`\.\@m}
2464
2465
    {\def\@noitemerr
      {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
2466
```

\newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。

2468 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}

\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによって変更されます。

2469 \let\@openbib@code\@empty

\@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 [] を全角 [] に変え、余分なスペースが入らないように **\jsInhibitGlue** ではさみました。とりあえずコメントアウトしておきますので、必要に応じて生かしてください。

2470 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}

\cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが, コンマとかっこを和文 \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので, 必 \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \jsInhibitGlue で取っていますので, オリジナル同様, Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。

- 2471 % \def\@citex[#1]#2{\leavevmode
- 2472 % \let\@citea\@empty
- 2473 % \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
- 2474 % {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
- 2475 % \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
- 2476 % \ifOfilesw\immediate\write\Oauxout{\string\citation{\Ociteb}}\fi
- 2477 % \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
- 2478 % \G@refundefinedtrue
- 2479 % \@latex@warning
- 2480 % {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
- 2481 % {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}{#1}}
- 2482 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \jsInhibitGlue}

引用番号を上ツキの 1) のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に \unskip を付けて先行のスペース (~ も)を帳消しにしています。

- 2483 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip
- 2484 % \@ifnextchar [{\@tempswatrue\@citex}{\@tempswafalse\@citex[]}}
- 2485 % \def\@cite#1#2{ $$^{\hbox{\scriptsize}}#1\if@tempswa$
- 2486 % , \jsInhibitGlue\ $\#2\fi$ }) }}\$}

10.3 索引

theindex $2\sim3$ 段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

2487 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境

- 2488 \if@twocolumn
- 2489 \onecolumn\@restonecolfalse
- 2490 \else
- 2491 \clearpage\@restonecoltrue
- 2492 \fi

```
2494
                   \ifx\multicols\@undefined
           2495 %<book|report>
                                   \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
           2496 %<book|report>
                                   \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
           2497 %<!book&!report>
                                     \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
           2498 %<!book&!report>
                                     \twocolumn[\section*{\indexname}]%
                   \else
           2499
           2500
                     \ifdim\textwidth<\fullwidth
                       \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
           2501
                       \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
           2502
           2503
                       \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
           2504 %<book|report>
                                     \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
           2505 %<book|report>
                                     \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
           2506 %<!book&!report>
                                       \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
           2507 %<!book&!report>
                                       \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
                     \else
           2509 %<book|report>
                                     \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
           2510 %<book|report>
                                     \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
           2511 %<!book&!report>
                                       \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
           2512 %<!book&!report>
                                       \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
           2513
                     \fi
                   \fi
           2514
           2515 % < book | report >
                                 \@mkboth{\indexname}{}%
           2516 %<!book&!report>
                                   \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
           2517
                   \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
                   \parindent\z@
           2518
                   \parskip\z@ \@plus .3\p@?\relax
           2519
                   \let\item\@idxitem
           2520
           2521
                   \raggedright
           2522
                   \footnotesize\narrowbaselines
           2523
           2524
                   \ifx\multicols\@undefined
                     \if@restonecol\onecolumn\fi
           2525
                     \end{multicols}
           2527
           2528
                   \fi
           2529
                   \clearpage
           2530
 \@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。
   \subitem 2531 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % 元 40pt
\subsubitem ^{2532} \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{2\jsZw}} % \overrightarrow{\pi} 20pt
           2533 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\jsZw}} % 元 30pt
\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。
           2534 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p0? \@plus5\p0? \@minus3\p0?\relax}
            索引の \see, \seealso コマンドで出力されるものです。デフォルトはそれぞれ see, see also
   \seename
             という英語ですが、ここではとりあえず両方とも「→」に変えました。⇒($\Rightarrow$)
 \alsoname
```

\columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw

2493

などでもいいでしょう。

2535 \newcommand\seename{\if@english see\else \rightarrow \fi} 2536 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else \rightarrow \fi}

10.4 脚注

\footnote 和文の句読点·閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため, \footnotemark \inhibitglue を入れることにします。pLPTFX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は, このパッチが不要なのであてません。

> パッチの必要性は「\pltx@foot@penalty が未定義か」で行う。\inhibitglue の代わ りに \jsInhibitGlue を使う。

2537 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined

\let\footnotes@ve=\footnote

2539 \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}

\let\footnotemarks@ve=\footnotemark

2541 \def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve}

2542 \fi

\@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 * を付けています。「注 1」の形式に するには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenext と合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい pTrX では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐた め、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました(Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 pLFTFX の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。pLFTFX の日付が2016/04/17より新しい場合は、このパッチが不要なのであてません。

pT_FX 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

\thefootnote 脚注番号に*印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは*印も脚注番号も付 きません。

[2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しま

[2016-10-08] TODO: 脚注番号が newtxtext や newpxtext の使用時におかしくなってし まいます。これらのパッケージは内部で \thefootnote を再定義していますので, 気になる 場合はパッケージを読み込むときに defaultsups オプションを付けてください (qa:57284, qa:57287).

 $2543 \end{area} $$2543 \end{area} \end{area} $$2543 \end{area} $$

「注1」の形式にするには次のようにしてください。

2544 % \def\thefootnote\\ifnum\c@footnote\\iz@注\kern0.1\jsZw\@arabic\c@footnote\fi}

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

2545 \renewcommand{\footnoterule}{% 2546 \kern-2.6\p@? \kern-.4\p@ 2547 \hrule width .4\columnwidth 2548 \kern 2.6\p@?}

\c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。

2549 % <book | report > \@addtoreset { footnote } { chapter }

(@footnotetext 脚注で \verb が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, *T_EX and TUG NEWS*, Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

[2016-08-25] コミュニティ版 pIFTEX の「閉じ括弧類の直後に\footnotetext が続く場合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。

[2016-09-08] コミュニティ版 pIATFX のバグ修正に追随しました。

[2016-11-29] 古い pIATrX で使用された場合を考慮してコードを改良。

2550 \long\def\@footnotetext{%

2575

\fi}

2551 \insert\footins\bgroup \normalfont\footnotesize 2552 2553 \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty \splittopskip\footnotesep 2554 \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM 2555 2556\hsize\columnwidth \@parboxrestore \protected@edef\@currentlabel{% 2557 \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark 2558 2559 }% \color@begingroup 2560 2561\@makefntext{% 2562 \rule\z@\footnotesep\ignorespaces}% \futurelet\next\fo@t} $2564 \left(\frac{\int c_t \left(\frac{c_t}{c_t} \right) - c_t}{c_t} \right)$ \else \let\next\f@t\fi \next} 2565 2566 \def\f@@t{\bgroup\aftergroup\@foot\let\next} $2567 \left(\frac{1}{41}\right)$ 2568 \def\@foot{\@finalstrut\strutbox\color@endgroup\egroup \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined\else \ifhmode\null\fi 2570 \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else 2571 2572 \penalty\pltx@foot@penalty \pltx@foot@penalty\z@ 2573 2574 \fi

\@makefntext 実際に脚注を出力する命令です。**\@makefnmark** は脚注の番号を出力する命令です。ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

```
2576 \newcommand\@makefntext[1]{%
```

- 2577 \advance\leftskip 3\jsZw
- 2578 \parindent 1\jsZw
- 2579 \noindent

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext [0] {...} とすれば番号を付けない 脚注になります。ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので,工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

- 2581 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
- 2582 % \begingroup
- 2583 % \ifnum#1>\z@
- 2584 % \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax
- 2585 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
- 2586 % \else
- 2587 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%
- 2588 % \fi
- 2589 % \endgroup
- 2590 % \@footnotetext}

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

\jsInhibitGlueAtParTop 「段落頭の括弧の空き補正」の処理を \jsInhibitGlueAtParTop という命令にして、これ を再定義可能にした。

2591 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

\everyparhook 全ての段落の冒頭で実行されるフック。これの初期値を先述の \jsInhibitGlueAtParTop とする。

 $2592 \verb|\def| everyparhook{\jsInhibitGlueAtParTop}|$

2593 \AtBeginDocument{\everypar{\everyparhook}}

[2016-07-18] \inhibitglue の発行対象を \inhibitxspcode が 2 に設定されているものすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で \@tempa を使っていたのがよくなかったので、プレフィックスを付けて \jsc@tempa にしました (forum:2085)。

[2017-02-13] \jsc@tempa は実はテンポラリではなく「この処理専用のユニーク制御綴」である必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので、専用の命令 \jsc@ig@temp に置き換えました (Issue #54)。

```
\@inhibitglue JS クラスでの \jsInhibitGlueAtParTop の実装。(これは (u)pTpX 専用である。)
                                          2594 \def\@inhibitglue{%
                                                          \futurelet\@let@token\@@inhibitglue}
                                          2596 \setminus begingroup
                                          2597 \left| \text{GDEF=} \right|
                                          2598 \let\CATCODE=\catcode
                                          2599 \label{eq:2599} \label{eq:2599} \label{eq:2599} $$ \endon{ENDGROUP=\endgroup} 
                                          2600 \CATCODE`k=12
                                          2601 \CATCODE`a=12
                                          2602 \CATCODE`n=12
                                          2603 \CATCODE \ j=12
                                          2604 \CATCODE`i=12
                                          2605 \CATCODE`c=12
                                          2606 \CATCODE`h=12
                                          2607 \CATCODE`r=12
                                          2608 \CATCODE`t=12
                                          2609 \CATCODE`e=12
                                          2610 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
                                          2611 \setminus ENDGROUP
                                          2612 \def\@@inhibitglue{\%}
                                                              \expandafter\expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@to
                                          2614 \expandafter\def\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter#\expandafter1\KANJI@CHARACTER#2#3\jsc
                                                              \label{lem:lemp} $$ \end{figure} $$ \end{fig
                                          2615
                                          2616
                                                             \ifx\jsc@ig@temp\@empty
                                                                    \ifnum\the\inhibitxspcode`#2=2\relax
                                          2617
                                                                           \inhibitglue
                                          2618
                                          2619
                                                                    \fi
                                                            \fi}
                                          2620
                                                       これだけではいけないようです。あちこちに \everypar を初期化するコマンドが隠され
                                                 ていました。
                                                       まず,環境の直後の段落です。
```

[2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に追随して \clubpenalty のリセットを追加しました。

```
2621 \def\@doendpe{%
2622 \@endpetrue
2623 \def\par{%
2624 \@restorepar\clubpenalty\@clubpenalty\everypar{\everyparhook}\par\@endpefalse}%
2625 \everypar{{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\@endpefalse\everyparhook}}
\item 命令の直後です。
```

```
2626 \left[ \#1 \right]  {%
      \if@noparitem
2627
2628
        \@donoparitem
2629
      \else
2630
        \if@inlabel
          \indent \par
2631
        \fi
2632
        \ifhmode
2633
          \unskip\unskip \par
2634
2635
        \if@newlist
2636
          \if@nobreak
2637
2638
             \@nbitem
          \else
2639
2640
             \addpenalty\@beginparpenalty
             \addvspace\@topsep
2641
2642
             \verb|\addvspace{-\parskip}|| %
2643
          \fi
        \else
2644
          \addpenalty\@itempenalty
2645
2646
          \addvspace\itemsep
2647
        \global\@inlabeltrue
2648
      \fi
2649
      \everypar{%
2650
2651
        \@minipagefalse
        \global\@newlistfalse
2652
2653
        \if@inlabel
2654
          \global\@inlabelfalse
          {\sc}^{\sc}
2655
            \ifvoid\z@
2656
              \kern-\itemindent
2657
            \fi}%
2658
          \box\@labels
2659
          \penalty\z@
2660
2661
        \if@nobreak
2662
          \@nobreakfalse
2663
2664
          \clubpenalty \@M
2665
        \else
          \clubpenalty \@clubpenalty
2666
          \everypar{\everyparhook}%
2667
2668
2669
        \bxjs@ltj@inhibitglue
2670
        \everyparhook}%
2671
      \if@noitemarg
        \@noitemargfalse
2672
2673
        \if@nmbrlist
          \refstepcounter\@listctr
2674
```

```
\fi
2675
2676
2677
               \begin{tabular}{l} $$ \shox \end{tabular} $
               \global\setbox\@labels\hbox{%
2678
                    \unhbox\@labels
2679
                    \hskip \itemindent
2680
                    \hskip -\labelwidth
2681
2682
                    \hskip -\labelsep
                    \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
2683
                         \box\@tempboxa
2684
2685
                    \else
2686
                         \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
2687
                    \hskip \labelsep}%
2688
2689
               \ignorespaces}
         二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \section 類の直後に 2回, 前者が 3回目以
    降に実行されます。
2690 \def\@afterheading{%
              \@nobreaktrue
               \everypar{%
2692
2693
                    \if@nobreak
2694
                         \@nobreakfalse
2695
                         \clubpenalty \@M
                         \if@afterindent \else
2696
2697
                              {\setbox\z@\lastbox}%
                         \fi
2698
2699
                    \else
                         \clubpenalty \@clubpenalty
2700
                         \everypar{\everyparhook}%
2701
                    \fi\everyparhook}}
2702
         \@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの pI\!TE\!X \!2_{arepsilon} は段落の頭にグ
    ルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず,不統一でした。
    そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし、こ
     こでは逆にグルーを入れない方で統一したいので、また元に戻してしまいました。
          しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。
2703 \def\@gnewline #1{%}
              \ifvmode
2704
                    \@nolnerr
2705
2706
                    \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
2707
2708
                    \jsInhibitGlue \ignorespaces
              \fi}
2709
```

12 いろいろなロゴ

IATeX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は jslogo パッケージに移転しました。後方互換のため, jsclasses ではデフォルトでこれを読み込みます。nojslogo オプションが指定されている場合は読み込みません。

BXJS クラスでも jslogo オプション指定の場合に jslogo パッケージを読み込むように した。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。

※ \小、\上小の制御綴は定義しない。

```
2710 \if@jslogo
2711 \IfFileExists{jslogo.sty}{%
2712 \RequirePackage{jslogo}%
2713 }{%
2714 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
2715 {The package 'jslogo' is not installed.\MessageBreak
2716 It is included in the recent release of\MessageBreak
2717 the 'jsclasses' bundle}
2718 }
2719 \fi
```

13 amsmath との衝突の回避

最近の \LaTeX では該当の問題は対処されているので削除。

14 初期設定

■いろいろな語

```
\prepartname
```

```
2728 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
```

```
\refname
\bibname 2729 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
\indexname
\tablename 2730 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}
\figurename
\tablename 2731 \newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}
\tablename 2732 \newcommand{\figurename}{\if@english Fig.~\else 図\fi}
\tablename 2733 \newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi}
\appendixname
\abstractname 2734 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
\tablename 2735 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
\tablename 2736 %<!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}
```

■今日の日付 IFTeX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦 にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \和暦 と書いてください。

環境変数 SOURCE_DATE_EPOCH_TEX_PRIMITIVES が設定されている場合は"今日"が過去の日付になる可能性があるが、その場合、和暦表記は平成2年(1990年)以降でのみサポートする。

※"新元号"への対応?

\today

```
2737 \setminus \texttt{Otempswafalse}
2738 \if p\jsEngine \@tempswatrue \fi
2739 \if n\jsEngine \@tempswatrue \fi
2740 \ \text{if@tempswa} \ \text{expandafter} \ \text{@firstoftwo}
2741 \else
                \expandafter\@secondoftwo
2742 \fi
2743 {%
2744 % 欧文 8bitTeX の場合
2745 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
2746 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
2747 \def\西暦{\jsSeirekitrue}%
2748 \def\和暦{\jsSeirekifalse}}
2749 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
2750 \def\Wareki{\jsSeirekifalse}
2751 \def\bxjs@if@use@seireki{%
      \ifjsSeireki \expandafter\@firstoftwo
2753 \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
2754 }{%
2755 \newif\if 西暦 \西暦 true
2756 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
2757 \def\西暦{\西暦 true}%
```

```
\def\和暦{\西暦 false}}
2759 \def\Seireki{\西暦 true}
2760 \def\Wareki{\西暦 false}
2761 \def\bxjs@if@use@seireki{%
      \if 西暦 \expandafter\@firstoftwo
      \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
2763
2764 }
2765 \bxjs@decl@Seireki@cmds
2766 % \bxjs@unxp
2767 \let\bxjs@unxp\@firstofone
2768 \bxjs@test@engine\unexpanded{\let\bxjs@unxp\unexpanded}
2769 % \bxjs@iai
2770 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
     \def\bxjs@iai{\noexpand~}
2772 \else \def\bxjs@iai{}
2773 \fi
2774 % \heisei
2775 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
2776 % \today
2777 \edef\bxjs@today{%
2778
      \if@english
        \ifcase\month\or
2779
2780
          January\or February\or March\or April\or May\or June\or
          July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
2781
          \space\number\day, \number\year
2782
      \else
2783
        \ifnum\heisei>\@ne
2784
2785
          \expandafter\noexpand\expandafter\bxjs@if@use@seireki
2786
        \else \expandafter\@firstoftwo
        \fi {%
2787
          \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
2788
2789
          \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
          \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
2790
2791
          \bxjs@unxp{{平成}\bxjs@iai\number\heisei\bxjs@iai\bxjs@unxp{{年}}%
2792
          \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
2793
          \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
2794
        }%
2795
      fi
2796
2797 \let\today\bxjs@today
```

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.ldf)が読み込まれた場合に影響を受けないようにする。

```
2798 \AtBeginDocument{%
2799 \ifx\bbl@jpn@Seirekitrue\@undefined\else
2800 \bxjs@decl@Seireki@cmds
2801 \g@addto@macro\datejapanese{%
```

```
2802 \let\today\bxjs@today}%
2803 \fi}
```

■ハイフネーション例外 T_{EX} のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

2804 \hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-script}

■ページ設定 ページ設定の初期化です。

```
2805 %<slide>\pagestyle{empty}%
```

 $2806 \ \% \ article|report>\ pagestyle{plain}\%$

 $2807 \ \texttt{\cok}\ \texttt{\pagestyle\{headings}\ \texttt{\cok}\$

2808 \pagenumbering{arabic}

2809 \if@twocolumn

2810 \twocolumn

2811 \sloppy

2812 \flushbottom

 $2813 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}$

2814 \onecolumn

2815 \raggedbottom

2816 **\fi**

2817 %<*slide>

2818 \renewcommand\familydefault{\sfdefault}

2819 \raggedright

2820 %</slide>

■BXJS 独自の追加処理 🕾

和文ドライバのファイルを読み込む。

2821 \catcode`\?=12

 $2822 \ \texttt{ifx} \ \texttt{0jadriver} \ \texttt{lse}$

 $2823 \verb|\input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}|$

2824 \fi

最後に日本語文字のカテゴリコードを元に戻す。

2825 \bxjs@restore@jltrcc

2826 %</cls>

以上です。

付録 A 和文ドライバの仕様 湾

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、 ★印を付けたものは"書込"が許されるものである。

• \jsDocClass [文字トークンの let] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一 致する(\if で判定可能)。

\jsArticle bxjsarticle クラス

\jsBook bxjsbook クラス

\jsReport bxjsreport クラス

\jsSlide bxjsslide クラス

- \jsEngine [文字トークンの let] 使用されているエンジンの種別。(\if で判定 可能)。
 - p pdfT_FX (DVI モードも含む)
 - 1 Lua T_{FX} (")
 - x X7TFX
 - j pT_FX または upT_FX
 - n 以上の何れでもない
- \ifjsWithupTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが upTpX であるか。
- \ifjsWitheTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが ε -T_FX 拡張であるか。
- \ifjsInPdfMode [スイッチ] 使用されているエンジンが (pdfT_EX・LuaT_EX の) PDF モードであるか。
- \jsUnusualPtSize [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、11pt、12pt のいずれでもない場合の \@ptsize の値。(\@ptsize 自体があ まり有用でないと思われる。)
- \jsScale [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対するスケール。クラスオプション scale で指定される。(既定値は 0.924715。)
- \jsJaFont [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション jafont で指定された値。
- \jsJaParam [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まってなくて、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション japaram で指定された値。
- \jsInhibitGlue [マクロ] \inhibitglue という命令が定義されていればそれを 実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで \inhibitglue を用いている箇所 は全て \jsInhibitGlue に置き換えられている。従って、\inhibitglue は未定義 でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- \jsInhibitGlueAtParTop [マクロ] ★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を 行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- \jsZw [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで zw 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際

に用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に \jsScale \times (フォントサイズ) であると定められている(フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に \jsScale の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- \jsFontSizeChanged [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- \jsResetDimen [マクロ]★ 上記 \jsFontSizeChanged の中で呼び出される、 ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで 設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

2827 %<*drv>

付録 B 和文ドライバ: minimal 🕾

jadriver の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、standard ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ(xeCJK や $LuaT_EX$ -ja 等)を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、 $(u)pT_EX$ エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

B.1 補助マクロ

2828 %<*minimal>

2829 %% このファイルは日本語文字を含みます

\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand。

2830 \def\DeclareJaTextFontCommand#1#2{%

2831 \DeclareRobustCommand#1[1]{%

2832 \relax

2833 \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi

2834 {#2##1}}%

2835 }

\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。

 $2837 \quad \texttt{\ \ } \texttt{DeclareRobustCommand\#1[1]\{\%\}}$

2838 \relax

 ${\tt 2840} \qquad {\tt \family\family\family} \\$

2841 \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax

2842 #2##1}%

```
2843 }%
                 2844 }
\bxjs@if@sf@default \familydefault の定義が"\sfdefault"である場合に引数のコードを実行する。
                 2845 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
                 2846 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
                 2847 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
                      \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
                 2848
                      \AtBeginDocument{%
                 2849
                        \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
                 2850
                 2851 }
    \jsLetHeadChar \jsLetHeadChar\CS{(トークン列)}: トークン列の先頭の文字を抽出し、\CS をその文
                   字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。
                   ※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は \CS は \relax に等置される。
                   ※文字トークンは"\the-文字列"のカテゴリコードをもつ。
                   ※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位
                   バイトの場合は1文字分のバイト列(のトークン列)を抽出する。この場合は元のカテゴリ
                   コードが保持される。
                 2852 \def\jsLetHeadChar#1#2{%
                      \begingroup
                 2853
                 2854
                        \escapechar=`\\ %
                        \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
                 2855
                        \bxjs@let@hchar@exp#2}%
                 2856
                 2857
                       \endgroup
                      \let#1\bxjs@g@tmpa}
                 2858
                 2859 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
                       \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
                 2861 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
                      \bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi{% 波括弧
                 2862
                 2863
                        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                      }{\bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi{% 空白
                 2864
                        \bxjs@let@hchar@out\let\space%
                      }{\bxjs@cond\if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi{% バックスラッシュ
                 2866
                 2867
                        \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
                       }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}}
                 2869 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
                       \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
                 2871 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@let@hchar@exp@c#1#2\@nil{%}}}
                 2872 %\message{<#1#2>}%
                       \bxjs@cond\if#1\@backslashchar\fi{% 制御綴
                        \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
                 2874
                          \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                 2875
                 2876
                        }{%else
                          \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
                 2877
                        }%
                 2878
                      }{%else
                 2879
```

\bxjs@let@hchar@chr#1%

2880

```
2881
     }}
2882 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
2884 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
      \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
      \toks@\bgroup}% skip to right brace
2886
 UTF-8 のバイト列を扱うコード。
2887 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
2888 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
2889 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
2890 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
2891 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
2892 \let\bxjs@let@hchar@chr@ue@a\bxjs@let@hchar@chr
2893 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
      \@tempcnta=`#1\relax
2895 %\message{\the\@tempcnta}%
      \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
2896
2897
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
2898
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
2899
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
2900
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
2901
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
2902
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
2903
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
2904
2905
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
2906
      }{%else
2907
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
2908
     }}}}}
2909 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
2911 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}
2913 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}
2915 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%
     \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3#4}}}
```

B.2 (u)pT_EX 用の設定

2917 \ifx j\jsEngine

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラス で除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ \jsLetHeadChar を和文文字トークンに対応させる。

2918 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1{% 2919 \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#1\relax#1}

```
2920 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3{%
2921 %\message{(#1)}%
2922 \bxjs@cond\if#1t\fi{%
2923 \bxjs@let@hchar@chr@ue#3%
2924 }{%else
2925 \bxjs@let@hchar@out\def{{#3}}%
2926 }}
2927 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@pp
```

■エンジン依存の定義 最初にエンジン(pT_EX か upT_EX か)に依存する定義を行う。 \ifjsWithupTeX は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが upT_EX である かを表す。

\jsc@JYn および \jsc@JTn は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを表す。

```
2928 \edef\jsc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi}
2929 \edef\jsc@JTn{\ifjsWithupTeX JT2\else JT1\fi}
2930 \edef\jsc@pfx@{\ifjsWithupTeX u\fi}
```

\bxjs@declarefontshape は標準の和文フォント宣言である。後で \bxjs@scale を求めるため一旦マクロにしておく。\bxjs@sizereference は全角幅を測定する時に参照するフォント。

まず upT_{EX} の場合の定義を示す。JS クラスの uplatex オプション指定時の定義と同じである。

```
2931 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
2932 \ifjsWithupTeX
2933 \def\bxjs@declarefontshape{%
2934 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-h}{}%
2935 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-h}{}%
2936 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-v}{}%
2937 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-v}{}%
2938 }
2939 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}
```

 $pT_{E\!X}$ の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じである。

```
2940 \else
2941 \def\bxjs@declarefontshape{%
2942 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jis}{}%
2943 \DeclareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jisg}{}%
2944 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tmin10}{}%
2945 \DeclareFontShape{JT1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tgoth10}{}%
2946 }
2947 \def\bxjs@sizereference{jis}
2948 \fi
```

既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。

2949 \def\bxjs@tmpa#1/#2/#3/#4/#5\relax{%

```
2950 \def\bxjs@y{#5}}
2951 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@y{10}%
2952 \else
2953 \expandafter\expandafter\bxjs@tmpa
2954 \expandafter\string\the\jfont\relax
2955 \fi
2956 \@for\bxjs@x:={\jsc@JYn/mc/m/n,\jsc@JYn/gt/m/n,%
2957 \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
2958 {\expandafter\let\csname\bxjs@x/10\endcsname=\@undefined
2959 \expandafter\let\csname\bxjs@x/\bxjs@y\endcsname=\@undefined
```

■和文フォントスケールの補正 実は、 pT_EX の標準的な和文フォント(JFM のこと、例えば jis)では、指定された \jsScale(この値を s とする)をそのまま使って定義すると期待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1 zw の大きさが指定されたサイズではなく既にスケール(この値を f とする;jis では 0.962216 倍)が掛けられた値になっているからである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ \bxjs@scale に保存する。

```
2960 \begingroup
2961 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
      \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
      \setbox\z@\hbox{\bxjs@tmpa\char\jis"2121\relax}
2964 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
     \left\langle d^{20}\right\rangle
2965
2966
        \global\let\bxjs@scale\jsScale
2967
     \else
2968 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
        \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
2969
2970
        \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
        \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
2971
        \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
2972
2973
     \fi
2974 \endgroup
2975 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}
```

■和文フォント関連定義 \bxjs@scale が決まったので先に保存した標準和文フォント宣言を実行する。

2976 \bxjs@declarefontshape

フォント代替の明示的定義。

```
2986 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}} fmc} {mc}{m}{sc}{<->} ssub*mc/m/n}{}
2987 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
2988 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{gt}{m}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}
2989 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
2990 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}
   欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
 関係の定義を行う。
2991 \DeclareRobustCommand\rmfamily
2992 {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
      \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
2994 \DeclareRobustCommand\sffamily
2995
     {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
      \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
2997 \DeclareRobustCommand\ttfamily
2998
     {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
      \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3000 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3001 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3002 \bxjs@if@sf@default{%
     \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
   念のため。
3004\selectfont
 ■パラメタの設定
3005 \prebreakpenalty\jis"2147=10000
3006 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
3007 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
3008 \inhibitxspcode \! =1
3009 \inhibitxspcode \overline{\tau}=2
3010 \xspcode \ += 3
3011 \xspcode \\=3
   "80~"FF の範囲の \spcode を 3 に変更。
3012 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{%
3013 \xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne}
   \jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。
3014 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue
   \jsResetDimen は空のままでよい。
 ■組方向依存の処理 組方向判定の if-トークン(\if?dir) は pTrX 以外では未定義である
 ため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に!をエスケープ
 文字に使う。
3015 \begingroup
3016 \catcode \!=0
```

\bxjs@ptex@dir 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。

```
3017 \gdef\bxjs@ptex@dir{%
3018
             !iftdir t%
3019
             !else!ifydir y%
3020
            !else ?%
             !fi!fi}
         新版の pTrX で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。
    ※現在のpIATFX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、\@makefnmark の定義
    が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。
3022 % 古い \@makefnmark の定義
3023 \long\def\bxjs@tmpa{\hbox{%}}
               !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
               !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}}
3026 \ifx\0makefnmark\bxjs0tmpa
! ifydir \hbox{\hbox{\dtextsuperscript{\normalfont\dthefnmark}} \hbox{} % $$ $ \color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\colo
               !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}
3029
3030 \fi
3031 \endgroup
    B.3 pdfTFX 用の処理
3032 \else\ifx p\jsEngine
3033 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@ue
3034 \verb|\conlypreamble\bxjs@cjk@loaded|
3035 \def\bxjs@cjk@loaded{%
3036
             \def\@footnotemark{%
                    \leavevmode
3037
3038
                    \ifhmode
                         \edef\@x@sf{\the\spacefactor}%
3039
                         \ifdim\lastkern>\z@\ifdim\lastkern<5sp\relax
3040
3041
                                 \unkern\unkern
                                 \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
3042
                         \fi\fi
3043
                         \nobreak
3044
3045
3046
                    \@makefnmark
3047
                    \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
                    \relax}%
3048
3049
              \let\bxjs@cjk@loaded\relax
3050 }
3051 \AtBeginDocument{%
              \@ifpackageloaded{CJK}{%
3052
                    \bxjs@cjk@loaded
3053
3054
             }{}%
```

3055 }

B.4 X_{TE}X 用の処理

```
3056 \else\ifx x\jsEngine
                                                                             \bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を
                                                                      適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。
                                                                  3057 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
                                                                                   \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
                                                                  3058
                                                                  3059
                                                                                    \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
                                                                                          \bxjs@let@hchar@chr@xe
                                                                  3060
                                                                                   }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
                                                                  3061
                                                                  3062 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
                                                                                  \c)=\t)
                                                                  3063
                                                                                   \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}
                                                                  3064
     \bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。
                                                                  3065 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\@undefined\else
                                                                                   \def\bxjs@do@precisetext{%
                                                                  3066
                                                                                          \XeTeXgenerateactualtext=\@ne}
                                                                  3067
                                                                  3068 \fi
\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。
                                                                  3069 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
                                                                  3070 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
                                                                                   \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
                                                                                   3072
                                                                                          \jsSimpleJaSetup
                                                                  3073
                                                                                          \ClassInfo\bxjs@clsname
                                                                  3074
                                                                  3075
                                                                                             {'\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
                                                                  3076
                                                                                 \fi\fi}
                  \jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。
                                                                  3077 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
                                                                                   \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
                                                                                    \XeTeXlinebreakskip=Opt plus 1pt minus 0.1pt\relax
                                                                                   \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}
                                                                  3080
                                                                       B.5 後処理(エンジン共通)
                                                                  3081 fifi
                                                                             simplejasetup オプションの処理。
                                                                  3082 \ \texttt{\fr} \ \texttt{\colored} 
                                                                  3083
                                                                                   \AtBeginDocument{%
                                                                  3084
                                                                                          \ifbxjs@simplejasetup
                                                                                                \bxjs@do@simplejasetup
                                                                  3085
```

precisetext オプションの処理。

3086 3087 \fi

```
3088 \ifbxjs@precisetext
3089 \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
3090 \ClassWarning\bxjs@clsname
3091 {The current engine does not supprt the\MessageBreak
3092 'precisetext' option\@gobble}
3093 \else
3094 \bxjs@do@precisetext
3095 \fi
3096 \fi
```

■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が true であり、かつ fancyhdr が使用された場合に以下の対策を行う。

- デフォルトの書式設定に含まれる"二文字フォント命令"を除去する。
- bxjsbook において、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に変える。

3097 \ifbxjs@fancyhdr

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実行の間で実行されるべき。

3098 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr

3099 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{%

ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、"二文字フォント命令" を除去したものに置き換える。

※和文なので \sl は無い方がよいはず。

- 3100 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\rightmark}\strut}% 3101 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\rightmark}\strut}%
- 3102 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi 3103 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
- 3104 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi
- 3105 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- $3106 $$ \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\eftmark}\strut}\%$
- 3107 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\leftmark}\strut}%
- 3108 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
- 3109 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
- 3110 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi
- 3111 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- 3112 \def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}%
- 3113 \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}%
- 3114 \ifx\f@ncyecf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyecf\bxjs@tmpb \fi
- 3115 \ifx\f@ncyocf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyocf\bxjs@tmpb \fi

\fullwidth が(定義済で)\textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に合わせる。

- 3116 \ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth
- 3117 \setlength{\@tempdima}{\fullwidth-\textwidth}%
- 3119 }\bxjs@tmpa

```
\fi\fi
                   3120
                   3121
                        \PackageInfo\bxjs@clsname
                         {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}}
\bxjs@pagestyle@hook \pagestyle へのフックの本体。
                   3123 \def\bxjs@pagestyle@hook{%
                       \@ifpackageloaded{fancyhdr}{%
                          \bxjs@adjust@fancyhdr
                          \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax
                   3126
                   3127 }{}}
                      \pagestyle にフックを入れ込む。
                   3128 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle
                   3129 \def\pagestyle{%
                   3130 \bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}
                      begin-document フック。
                    ※これ以降に fancyhdr が読み込まれることはあり得ない。
                   3131 \AtBeginDocument{%
                   3132 \bxjs@pagestyle@hook
                       \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
                      終わり。
                   3134 \fi
                      以上で終わり。
                   3135 %</minimal>
```

付録 C 和文ドライバ: standard ※

標準のドライバ。

- \rmfamily/\sffamily/\ttfamily での和文ファミリ連動
- $\mbox{\mbox{$\mbox{}\mbox{$
- \textmc/\textgt
- \zw
- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing
- \autoxspacing/\noautoxspacing

■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォントの "プリセット" の指定として用いる。プリセットの値は、TFX Live の kanji-config-updmap

コマンドで使う"ファミリ"と同じにすることを想定する。特別な値として、auto は kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

C.1 共通処理 (1)

まず minimal ドライバを読み込む。

- 3136 %<*standard>
- 3137 %% このファイルは日本語文字を含みます
- ${\tt 3138 \setminus input\{bxjsja-minimal.def\}}$

simplejasetup は standard では無効になる。

- 3139 \bxjs@simplejasetupfalse
- 3140 \ifjsWitheTeX

使える場合は、「\dimexpr 外部寸法表記\relax」の形式(これは内部値なので単位として 使える)で各命令定義する。

 \j Q \j Q と \j H はともに $0.25\,\mathrm{mm}$ に等しい。

- \jH3141 \@tempdima=0.25mm
 - 3142 \protected\edef\jQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
 - $3143 \left(\frac{JH}{jQ} \right)$

\trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。

- \trueH3144 \ifjsc@mag
 - 3145 \@tempdimb=\jsBaseFontSize\relax
 - $\verb| \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\@tempdimb}| % \\$
 - 3147 \@tempdima=2.5mm
 - 3148 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
 - 3149 \protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
 - 3150 \@tempdima=10pt
 - 3151 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
 - 3152 \protected\edef\bxjs@truept{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
 - 3153 \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\p@
 - 3154 \fi
 - 3155 \let\trueH\trueQ

\ascQ \ascQ は\trueQ を和文スケール値で割った値。例えば、\fontsize{12\ascQ}{16\trueH} \ascpt とすると、和文が 12Q になる。

同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。

- 3157 \protected\edef\ascQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
- 3158 \@tempdima\bxjs@truept \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
- 3159 \protected\edef\ascpt{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
- 3160 \fi

続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)

\bxjs@kanjiskip 和文間空白の量を表すテキスト。

3161 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}

\setkanjiskip 和文間空白の量を設定する。

3162 \newcommand*\setkanjiskip[1]{%

\edef\bxjs@kanjiskip{#1}%

3164 \bxjs@reset@kanjiskip}

\getkanjiskip 和文間空白の量を表すテキストに展開する。

3165 \newcommand*\getkanjiskip{%

3166 \bxjs@kanjiskip}

\ifbxjs@kanjiskip@enabled 和文間空白の挿入が有効か。ただし pTFX では自身の \(no)autospacing での制御を用い るのでこの変数は常に真とする。

3167 \newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue

\bxjs@enable@kanjiskip 和文間空白の挿入を有効/無効にする。(pTFX 以外)

3169 \bxjs@kanjiskip@enabledtrue

\bxjs@reset@kanjiskip}

3171 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%

\bxjs@kanjiskip@enabledfalse 3172

3173 \bxjs@reset@kanjiskip}

\bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。

3174 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%

\ifbxjs@kanjiskip@enabled

\setlength{\Otempskipa}{\bxjsOkanjiskip}% 3176

3177 \else \@tempskipa\z@

3178 \fi

\bxjs@apply@kanjiskip} 3179

\bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。

\setxkanjiskip 3180 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}

\edef\bxjs@xkanjiskip{#1}%

\ifbxjs@xkanjiskip@enabled $_{3183}$ \bxjs@reset@xkanjiskip}

\bxjs@enable@xkanjiskip3184 \newcommand*\getxkanjiskip{%

\bxjs@disable@xkanjiskip 3185 \bxjs@xkanjiskip}

3186 \newif\ifbxjs@xkanjiskip@enabled \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue

 $\verb|\bxjs@reset@xkanjiskip| 3187 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@xkanjiskip{% | line |$

3188 \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue

\bxjs@reset@xkanjiskip}

3190 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%

\bxjs@xkanjiskip@enabledfalse 3191

\bxjs@reset@xkanjiskip}

3193 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%

```
3194
     \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
3195
      \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@xkanjiskip}%
3196
    \else \@tempskipa\z@
     \fi
3197
     \bxjs@apply@xkanjiskip}
3198
   \jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追随するように
 する。
3199 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
    \bxjs@reset@kanjiskip
3200
     \bxjs@reset@xkanjiskip}
3203 \let\bxjs@apply@xkanjiskip\relax
```

■和文フォント指定の扱い

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を"調整"して、その結果を \bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は"非埋込 (noEmbed)"の設定が禁止される。この禁止の場合も含め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。

```
3204 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont
3205 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%}
3206
      \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
        \bxjs@get@kanjiEmbed
3207
3208
        \ifx\bxjs@kanjiEmbed\relax
          \let\bxjs@tmpa\@empty
3209
3210
        \else
          \let\bxjs@tmpa\bxjs@kanjiEmbed
3211
3212
        \fi
      \else
3213
        \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3214
3215
      \fi
3216
      \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3217
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
         {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
3218
3219
          not available on the current situation}%
        \let\bxjs@tmpa\@empty
3220
3221
      \fi\fi
3222 }
3223 \def\bxjs@@auto{auto}
3224 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}
```

\bxjs@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値。\bxjs@get@kanjiEmbed により実際の設定値が取得されてここに設定される。

3225 \let\bxjs@kanjiEmbed\relax

\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値を取得する。

```
3226 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
3227 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
```

```
\begingroup\setbox\z@=\hbox{%
       3228
       3229
               \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
       3230
               \endlinechar\m@ne
               \let\do\@makeother\dospecials
       3231
               \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
       3232
               \let\bxjs@tmpa\@empty
       3233
               \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
       3234
       3235
               \ifeof\@inputcheck\else
                 \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
       3236
                 \closein\@inputcheck
       3237
       3238
               \fi
               \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
       3239
                 \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
       3240
                 \@tempswatrue
       3241
       3242
                 \loop\if@tempswa
       3243
                   \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                   \expandafter\bxjs@get@ke@a\bxjs@tmpa\@nil kanjiEmbed \@nil\@nnil
       3244
                   \ifx\bxjs@tmpa\relax\else
       3245
       3246
                     \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpa
                     \@tempswafalse
       3247
       3248
                   \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
       3249
       3250
                 \repeat
               \fi
       3251
       3252
             }\endgroup
       3253
             \let\bxjs@kanjiEmbed\bxjs@g@tmpa
       3254 }
       3255 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@a
       3256 \def\bxjs@get@ke@a#1kanjiEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
             \footnoteman{#2}%
       3257
             \else \let\bxjs@tmpa\relax
       3258
       3259
             fi
\jachar \jachar{(文字)}: 和文文字として出力する。
       3260 \newcommand*\jachar[1]{%
             \begingroup
         \jsLetHeadChar で先頭の"文字"を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。
       3262
               \jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
               \ifx\bxjs@tmpa\relax
       3263
       3264
                 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
       3265
                   {Illegal argument given to \string\jachar}%
       3266
               \else
                 \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
       3267
       3268
               \fi
       3269
             \endgroup}
         \jsJaChar を \jachar と等価にする。
       3270 \let\jsJaChar\jachar
```

```
下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。
3271 \let\bxjs@jachar\@firstofone
```

■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、hyperref 側の処理は無効にしておく。

3272 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}

```
\bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。
```

```
3273 \Conlypreamble\bxjsCfixChyperrefCunicode
3274 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%
      \PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%
3275
      \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
3276
3277
        \KV@Hyp@unicode{##1}%
        \def\KV@Hyp@unicode###1{%
3278
          \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
3279
3280
             \csname if####1\endcsname\else
            \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3281
            {Blcoked hyperref option 'unicode=####1'}%
3282
          \fi
3283
3284
        }%
3285
      }%
3286 }
```

\bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。

```
3287 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
3288 \def\bxjs@urgent@special#1{%
      \AtBeginDvi{\special{#1}}%
3289
3290
      \AtBeginDocument{%
3291
        \@ifpackageloaded{atbegshi}{%
          \begingroup
3292
             \toks\z@{\special{#1}}%
3293
            \toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
3294
3295
             \xdef\AtBegShi@HookFirst{\the\toks@\the\toks\tw@}%
3296
          \endgroup
        }{}%
3297
      }%
3298
3299 }
```

C.2 pTFX 用設定

 $3300 \if j\jsEngine$

■共通命令の実装

```
3301 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
3302 \kanjiskip\@tempskipa}
3303 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
3304 \xkanjiskip\@tempskipa}
```

```
\jaJaChar のサブマクロ。
3305 \def\bxjs@jachar#1{%
3306 \bxjs@jachar@a#1....\@nil}
3307 \def\bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5\@ni1{%
 引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしてそれをそのまま出力する。
3308 \ifx.#2#1%
 引数が複数トークンの場合は、UTF-8のバイト列であると見なし、そのスカラー値を
 \@tempcnta に代入する。
3309
     \else\ifx.#3%
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3310
       \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
3311
3312
       \bxjs@jachar@b
3313
     \left( x \right) = 1.00
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3314
3315
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
       \advance\@tempcnta`#3 \advance\@tempcnta-"E2080
3316
3317
       \bxjs@jachar@b
3318
     \else
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3319
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3320
       \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
3321
       \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
3322
3323
       \bxjs@jachar@b
3324
     fi\fi\fi
 符号値が \@tempcnta の和文文字を出力する処理。
3325 \ifjsWithupTeX
     \def\bxjs@jachar@b{\kchar\@tempcnta}
3326
3327 \else
     \def\bxjs@jachar@b{%
3328
3329
       \ifx\bxUInt\@undefined\else
3330
         \bxUInt{\@tempcnta}%
3331
       \fi}
3332 \fi
 ■和文フォント指定の扱い pTrX は既定で kanji-config-updmap の設定に従うため、
 \isJaFont が auto の場合は何もする必要がない。無指定でも auto でもない場合は、
 \jsJaFont をオプションにして pxchfon パッケージを読み込む。
3333 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3334 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
     \let\bxjs@tmpa\@empty
3336 \else\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3337
     \def\bxjs@tmpa{noembed}
3338 \fi\fi
3339 \ifx\jsJaFont\@empty\else
    \edef\bxjs@nxt{%
3340
       \noexpand\RequirePackage[\jsJaFont]
3341
```

```
3344 \fi
 ■otf パッケージ対策 インストールされている otf パッケージが scale オプションに対
 応している場合は scale=(\jsScale の値) を事前に otf に渡す。
 ※ otf.sty の中に「\RequirePackage{keyval}」の行が存在するかにより判定している。
 (もっといい方法はないのか……。)
3345 \begingroup
3346
     \global\let\@gtempa\relax
     \colored{Code} = 0 \colored{Code} = 12
3347
     |def|bxjs@check#1|@nil{%
       |bxjs@check@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
3349
3350
     |def|bxjs@check@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
       |ifx$#1$|bxjs@check@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
3351
      |catcode`|\=0 \catcode`\|=12
3352
     \def\bxjs@check@b#1keyval#2\@nnil{%
3353
3354
       ifx$#2$\ell
         \xdef\@gtempa{%
3355
3356
            \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
       \fi}
3357
3358 \@firstofone{%
     \catcode10=12 \endlinechar\m@ne
3359
     \let\do\@makeother \dospecials \catcode32=10
3360
     \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
     \@tempswatrue
3362
3363
     \loop\if@tempswa
3364
       \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
3365
       \if@tempswa
         \read\@inputcheck to\bxjs@line
3366
3367
         \expandafter\bxjs@check\bxjs@line\@nil
3368
       \fi
     \repeat
     \closein\@inputcheck
3371 \endgroup}
3372 \@gtempa
 ■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。
3373 \ifbxjs@hyperref@enc
3374 \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
3375 \fi
   tounicode special 命令を出力する。
3376 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
       \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
3377
3378
     \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
3379
     \left| \frac{1}{2121} \right| = 140 \% sjis
3380
```

{pxchfon}[2010/05/12]}% v0.5

3342 3343

\bxjs@nxt

```
\bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
3381
      \else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex
3382
        \ifbxjs@bigcode
3383
          \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
3384
          \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
3385
3386
          \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
3387
3388
      \fi\fi\fi
3389
      \let\bxToUnicodeSpecialDone=t
3390
3391 \fi
```

■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で有効とする。すなわち enablejfam=false 以外の場合は @enablejfam を真にする。

```
3392 \ifx f\bxjs@enablejfam\else
3393 \@enablejfamtrue
3394 \fi
実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
3395 \if@enablejfam
3396 \DeclareSymbolFont{mincho}{\jsc@JYn}{mc}{m}{n}
3397 \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
```

```
3397
     \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
     3398
     \jfam\symmincho
3399
     \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
3400
3401
     \AtBeginDocument{%
       \ifx\reDeclareMathAlphabet\@undefined\else
3402
3403
         \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\@mathrm}{\@mathrm}{\
         \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathbf}}%
3404
         \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\@mathsf}{\@mathsf}}%
3405
3406
       \fi}
3407 \fi
```

C.3 pdfT_EX 用設定: CJK + bxcjkjatype

3408 \else\if p\jsEngine

■bxcjkjatype パッケージの読込 \jsJaFont が指定されている場合は、その値を bxcjkjatype のオプション(プリセット指定)に渡す。(auto ならば \bxjs@get@kanjiEmbed を実行する。) スケール値 (\jsScale) の反映は bxcjkjatype の側で行われる。

```
3409 \bxjs@adjust@jafont{f}
3410 \edef\bxjs@nxt{%
3411 \noexpand\RequirePackage[%
3412 \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else \bxjs@tmpa,\fi
3413 whole,autotilde]{bxcjkjatype}[2013/10/15]}% v0.2c
3414 \bxjs@nxt
3415 \bxjs@cjk@loaded
```

```
■hyperref 対策 bxcjkjatype 使用時は unicode にするべき。
 ※取りあえず固定はしない。
3416 \ifbxjs@hyperref@enc
3417 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
3418 \fi
   \hypersetup 命令で(CJK*環境に入れなくても)日本語文字を含む文書情報を設定でき
 るようにするための細工。
 ※ bxcjkjatype を whole 付きで使っていることが前提。
 ※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがそ
 の場で展開されてしまう」ため困難である。
3419 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\Qundefined
3420 \begingroup
3421 \CJK@input{UTF8.bdg}
3422 \endgroup
3423 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%}
    \@nameuse{CJK@UTF8Binding}%
3425 }
3426 \fi
   ~ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。
3427 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
3428 \verb|\g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%}|
3429
    \ifx~\bxjs@@CJKtilde
       \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace
3430
       \verb|\label{thyPsd@LetUnexpandableSpace|} bxjs@LetUnexpandableSpace||
3431
       \let~\@empty
3433
    \fi
3434 }
3435 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
3436 \def\bxjs@@tildecmd{~}
3437 \def\bxjs@LetUnexpandableSpace#1{%
     \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
3438
       \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
3439
3440
    \fi}
3441 \fi
 ■共通命令の実装
3442 \newskip\jsKanjiSkip
3443 \newskip\jsXKanjiSkip
3444 \ifx\CJKecglue\@undefined
     \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
3445
3446 \fi
3447 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
3448 \verb|\let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip|
3449 \texttt{\protected\def\bxjs@CJKglue\{\hskip\jsKanjiSkip\}}
```

3450 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%

```
3451
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
3452
     \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
3453 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
3454 \let noautoxspacing bxjs@disable@xkanjiskip
3455 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
3456 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \jsXKanjiSkip\@tempskipa
3457
     \let\CJKecglue\bxjs@CJKecglue}
   \jachar のサブマクロの実装。
3459 \def\bxjs@jachar#1{%
3460 \CJKforced{#1}}
 ■和文数式ファミリ CJK パッケージは(恐らく)数式文字として CJK 文字をサポートし
 ていない。従って @enablejfam は常に偽になる。
3461 \ifx t\bxjs@enablejfam
    \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
      {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak
       CJK package does not support Japanese math}
3464
3465 \fi
 C.4 X<sub>∃</sub>T<sub>E</sub>X 用設定: xeCJK + zxjatype
3466 \else\if x\jsEngine
 ■zxjatype パッケージの読込 スケール値(\jsScale)の反映は zxjatype の側で行われる。
3467 \RequirePackage{zxjatype}
3468 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
3469 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
3470 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
3471 \ifx\zxJaFamilyName\Qundefined
    \ClassError\bxjs@clsname
3473
    {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc
3474 \fi
 ■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして
 zxjafont を読み込む。非指定の場合は IPAex フォントを使用する。
3475 \bxjs@adjust@jafont{f}
3476 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
     \setCJKmainfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexMincho}
     \setCJKsansfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexGothic}
3478
3479 \else
     \edef\bxjs@nxt{%
3480
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]%
           {zxjafont}[2013/01/28]}% v0.2a
3482
    \bxjs@nxt
3483
```

3484 \fi

■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

 $X_{
m T}_{
m E}$ X の場合は、xdvipdfmx が UTF-8 ightarrow UTF-16 の変換を行う機能を持っているため、本来は special 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、hyperref での方針としては、 $X_{
m T}_{
m E}$ X の場合にもパッケージ側で文字コード変換を行う方が望ましいと考えている。実際、unicode を無効にしていると警告が出て強制的に有効化される。一方で、過去(r35125 まで)の xdvipdfmx では、文字列を UTF-16 に変換した状態で与えるのは不正と見なしていて警告が発生する。

これを踏まえて、ここでは、「 $X_{
m TIEX}$ のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を 既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

```
3485 \ifnum\strcmp{\the\XeTeXversion\XeTeXrevision}{0.99992}>\m@ne 3486 \ifbxjs@hyperref@enc 3487 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref} 3488 \fi 3489 \fi
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも(少なくとも現状の)xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近いものが得られるらしい。

従って、\jsInhibitGlueAtParTop は結局何もしないことにする。 3490 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

■共通命令の実装

```
3491 \newskip\jsKanjiSkip
3492 \newskip\jsXKanjiSkip
3493 \ifx\CJKecglue\@undefined
     \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
3495 \fi
3496 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
3497 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
3498 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
3499 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
3500
      \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
3502 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
3503 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
3504 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
3505 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \jsXKanjiSkip\@tempskipa
     \xeCJKsetup{CJKecglue={\bxjs@CJKecglue}}}
```

\mcfamily、\gtfamily は本来は zxjatype の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的 にここで定義する。

3508 \ifx\mcfamily\@undefined

```
3509 \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
3510 \protected\def\gtfamily{\CJKfamily{\CJKsfdefault}}
3511 \fi
  \jachar のサブマクロの実装。
3512 \def\bxjs@jachar#1{%
3513 \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
3514 #1}
```

■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で無効とする。すなわち enablejfam=true の場合にのみ @enablejfam を真にする。

```
3515 \ifx t\bxjs@enablejfam
3516 \@enablejfamtrue
```

3517 \fi

実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。

※ FIXME: 要検討。

3518 \if@enablejfam

3519 \xeCJKsetup{CJKmath=true}

3520 \fi

C.5 LuaTFX 用設定: LuaTFX-ja

 $3521 \le if l\jsEngine$

■LuaT_EX-ja パッケージの読込 luatexja とともに luatexja-fontspec パッケージを読み込む。

luatexja は自前の \zw (これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す)を定義するので、\zw の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく \jsZw であることに注意が必要。

% 1.0b 版から「graphics パッケージに pdftex オプションを渡す」処理を行っていたが、 1.4 版で廃止された。

```
3522 \left| \text{undefined} \right|
```

 $3523 \verb|\RequirePackage{luatexja}|$

 $3524 \verb|\RequirePackage{luatexja-fontspec}|$

■和文フォント定義 luatexja-fontspec で使用する和文スケール値を \jsScale と合致 させたいのだが……もっと良い方法はないのか?

```
3525 \verb|\ExplSyntaxOn|
```

 $3526 \verb| fp_gset:Nn \g_ltj_fontspec_scale_fp { \jsScale } \\$

3527 \ExplSyntaxOff

\jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は、luatexja-preset パッケージの ipaex オプション (IPAex フォント使用) と等価な設定を用いる (luatexja-preset は読み込まない)。

```
3528 \bxjs@adjust@jafont{t}
```

 $3529 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed$

```
3530
     \def\bxjs@tmpa{noembed}
3531 \fi
3532 \ifx\bxjs@tmpa\empty
     \defaultjfontfeatures{ Kerning=Off }
3533
     \setmainjfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexMincho}
3534
     \setsansjfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexGothic}
3535
3536 \else
3537
     \edef\bxjs@nxt{%
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]
3538
           {luatexja-preset}}%
3539
3540
     \bxjs@nxt
3541 \fi
   欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
 関係の定義を行う。
3542 \DeclareRobustCommand\rmfamily
3543
     {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
      \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3544
3545 \DeclareRobustCommand\sffamily
     {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
      \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3547
3548 \DeclareRobustCommand\ttfamily
     {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
      \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3550
3551 \AtBeginDocument{%
3552
     \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}
     \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
3553
      \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\mathsf}{\mathsf}}%
3555 \bxjs@if@sf@default{%
     \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
 ■和文パラメタの設定
3557%次の3つは既定値の通り
3558 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`',10000}}
3559 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={\ ",10000}}
3560 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`",10000}}
3561 \ltjsetparameter{jaxspmode={`!,1}}
3562 \ltjsetparameter{jaxspmode={`\opi,2}}
3563 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
3564 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}
 ■段落頭でのグルー挿入禁止
3565 \protected\def\@inhibitglue{%
    \directlua{%
3566
       luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
3567
3568 \let\bxjs@ltj@inhibitglue\@inhibitglue
```

```
■hyperref 対策 unicode にするべき。
3570 \ifbxjs@hyperref@enc
3571 \bxjs@fix@hyperref@unicode{true}
3572 \fi
 ■共通命令の実装
3573 \protected\def\autospacing{%
3574 \ltjsetparameter{autospacing=true}}
3575 \protected\def\noautospacing{%
3576 \ltjsetparameter{autospacing=false}}
3577 \protected\def\autoxspacing{%
    \ltjsetparameter{autoxspacing=true}}
3579 \protected\def\noautoxspacing{%
     \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}
3581 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}
3583 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}
   \jachar のサブマクロの実装。
3585 \def\bxjs@jachar#1{%
3586 \time 1 = x^2 
 ■和文数式ファミリ LuaTpX-ja では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要
 な設定は済んでいる。従って @enablejfam は常に真になる。
3587 \ifx f\bxjs@enablejfam
     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
      {You cannot use 'enablejfam=false', since the\MessageBreak
3589
3590
       LuaTeX-ja always provides Japanese math families}
3591 \fi
```

C.6 共通処理 (2)

3592 fifififi

■共通命令の実装

■和文・和欧文間空白の初期値

```
3599 \end{set} \begin{subarray}{ll} 3599 \end{set} \begin{subarray}{ll} 3600 \end{subarray} \begin{subarray}{ll} 3601 \end{set} \begin{subarray}{ll} 3601 \end{subarray} \begin{subarray}{ll} 3602 \end
```

以上で終わり。

3603 %</standard>

付録 D 和文ドライバ: modern 🕾

モダーンな設定。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

3604 %<*modern>

3605 \input{bxjsja-standard.def}

D.1 フォント設定

T1 エンコーディングに変更する。

```
※以下のコードは \usepackage [T1] {fontenc} と同等。
```

 $3606 \times 1 = 1$

3607 \def\encodingdefault{T1}%

3608 \input{t1enc.def}%

 $3609 \verb|\fontencoding| encoding default \verb|\selectfont|$

3610 \fi

基本フォントを Latin Modern フォントファミリに変更する。

※以下は \usepackage [noamth] {lmodern} と同じ。ユーザは後で lmodern を好きなオプションを付けて読み込むことができる。

```
3611 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0
```

3612 \renewcommand{\rmdefault}{lmr}

3613 \renewcommand{\sfdefault}{lmss}

3614 \renewcommand{\ttdefault}{lmtt}

3615 \fi

大型演算子用の数式フォントの設定。

※ amsfonts パッケージと同等にする。

 $3616 \DeclareFontShape{OMX}{cmex}{m}{n}{%$

3617 <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%

3618 <8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%

 $3619 \verb|\expandafter\ex| omX/cmex/m/n/10\endcsname\relax|$

amsmath 読込時に上書きされるのを防ぐ。

 $3620 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{cmex@opt}\{10\}}$

D.2 fixltx2e 読込

※ fixltx2e 廃止前の LATeX カーネルの場合。

 $3621 \ifx\OIncludeInRelease\Oundefined$

3622 \RequirePackage{fixltx2e}

3623 \fi

D.3 和文カテゴリコード

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。

3624 \RequirePackage{bxjscjkcat}

D.4 完了

おしまい。

3625 %</modern>

付録 E 和文ドライバ: pandoc 🕾

Pandoc 用の何か。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

3626 %<*pandoc>

 $3627 \verb|\input{bxjsja-standard.def}|$

E.1 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに"option clash"の検査をスキップする。この時に何らかのコードを実行させることができる。

\bxjs@set@dupload@proc

\bxjs@set@dupload@proc{ $\langle ファイル名\rangle$ }{ $\langle 定義本体\rangle$ } 特定のファイルの読込が \ @filewithoptions で指示されて、しかもそのファイルが読込済である場合に、オプション重複検査をスキップして、代わりに $\langle 定義本体\rangle$ のコードを実行する。このコード中で #1 は渡されたオプション列のテキストに置換される。

 $3628 \verb|\@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc|$

 $3629 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@set@dupload@proc\#1}}\%$

3630 \expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname bxjs@dlp/#1\endcsname}

 $3631 \verb|\conlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a|$

 $3632 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@set@dupload@proc@a#1{\%}}}$

3633 \@onlypreamble#1\def#1##1}

\@if@ptions \@if@ptions の再定義。

3634 \@onlypreamble\bxjs@org@if@ptions

3635 \let\bxjs@org@if@ptions\@if@ptions

```
3636 \newif\ifbxjs@dlp
                   3637 \ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{@if@ptions}$#1$#2$#3{%}}
                         \bxjs@dlpfalse
                         \def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currext}%
                   3639
                   3640
                         \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
                           \expandafter\ifx\csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname\relax\else
                   3641
                             \bxjs@dlptrue \fi
                   3642
                   3643
                         \fi
                         \ifbxjs@dlp \expandafter\bxjs@do@dupload@proc
                   3644
                         \else \expandafter\bxjs@org@if@ptions
                   3645
                         \fi {#1}{#2}{#3}}
                   3646
                   3647 \AtBeginDocument{%
                         \let\@if@ptions\bxjs@org@if@ptions}
                   3649 \@onlypreamble\bxjs@do@dupload@proc
                   3650 \def\bxjs@do@dupload@proc#1#2#3{%
                         \csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname{#3}%
                         \@firstoftwo}
                   3652
\bxjs@mark@as@loaded \bxjs@mark@as@loaded{\langleファイル名\rangle} : 特定のファイルに対して、
                     (\Offilewithoptions の処理に関して) 読込済であるとマークする。
                   3653 \def\bxjs@mark@as@loaded#1{%
                   3654
                         \expandafter\bxjs@mal@a\csname ver@#1\endcsname{#1}}
                   3655 \def\bxjs@mal@a#1#2{%}
                   3656
                         \int x#1\relax
                           \def#1{2001/01/01}%
                   3657
                   3658
                           \ClassInfo\bxjs@clsname
                            {File '#2' marked as loaded\@gobble}%
                   3659
                   3660
                         \fi}
                     E.2 lang 変数
                       lang=ja という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な
                     Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐため、とりあえず両パッケージ
                     を無効化しておく。
                   3661 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>0
                     Polyglossia について。
                   3662 \bxjs@mark@as@loaded{polyglossia.sty}
                   3663 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
                   3664
                         \ClassWarning\bxjs@clsname
                   3665
                           {Loading of polyglossia is blocked}}
                   3666 \ifx\setmainlanguage\@undefined
                   3667 \newcommand*\setmainlanguage[2][]{}
                   3668 \newcommand*\setotherlanguage[2][]{%
                   3669
                         \ifcat_#2_\else
                           \expandafter\let\csname #2\endcsname\@empty
                   3670
```

\expandafter\let\csname end#2\endcsname\@empty

```
3672
         \expandafter\let\csname text#2\endcsname\@firstofone
3673
3674 \newcommand*\setotherlanguages[2][]{%
      \ensuremath{\tt Qfor\bxjsQtmpa:={\#2}\do{\%}}
         \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}
3677 \fi
3678 \else
 Babel について。
3679 \bxjs@mark@as@loaded{babel.sty}
3680 \bxjs@set@dupload@proc{babel.sty}{%
      \ClassWarning\bxjs@clsname
       {Loading of babel is blocked}}
3682
3683 \let\foreignlanguage\@secondoftwo
3684 \ \text{let}\ \text{otherlanguage}\ \text{@gobble}
3685 \let\endotherlanguage\@empty
3686 \fi
```

E.3 geometry 変数

geometry を "再度読み込んだ"場合に、そのパラメタで \setpagelayout* が呼ばれるようにする。

```
3687 \bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{% 3688 \setpagelayout*{#1}}
```

E.4 CJKmainfont 変数

LuaT_EX (+ LuaTeX-ja) の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```
3689 \if 1\jsEngine
3690 \bxjs@mark@as@loaded{xeCJK.sty}
3691 \providecommand*{\setCJKmainfont}{\setmainjfont}
3692 \fi
```

E.5 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは fixltx2e パッケージを読み込むが、最近(2015 年版以降)の \LaTeX ではこれで警告が出る。これを抑止する。

IATeX カーネルが新しい場合は fixltx2e を読込済にする。

```
3693 \ \texttt{Moreover} \\ 3694 \ \texttt{Moreover} \\ 3695 \ \texttt{fi}
```

E.6 cmap パッケージ

エンジンが $(u)pIAT_EX$ のときに cmap パッケージが読み込まれるのを阻止する。(実際は警告が出るだけで無害であるが。)

3696 \if j\jsEngine 3697 \bxjs@mark@as@loaded{cmap.sty} 3698 \fi

E.7 microtype パッケージ

警告が多すぎなので消す。

エンジンが $(u)pIAT_EX$ のときに microtype パッケージが読み込まれるのを阻止し、さらにテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は standard ドライバでこの処理を行っていたが、元来は Pandoc 用の処理なので、1.5 版で pandoc に移動。

3702 \if j\jsEngine
3703 \bxjs@mark@as@loaded{microtype.sty}
3704 \newcommand*\UseMicrotypeSet[2][]{}
3705 \fi

E.8 完了

おしまい。

3706 %</pandoc>

和文ドライバ実装はここまで。

3707 %</drv>

付録 F 補助パッケージ一覧 🕸

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込んで利用することもできる。

• bxjscjkcat: modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

3708 %<*anc>

付録 G 補助パッケージ: bxjscompat 🕾

ムニャムニャムニャ……。

G.1 準備

```
3709 %<*compat>
                       3710 \def\bxac@pkgname{bxjscompat}
           \bxjx@engine エンジンの種別。
                       3711 \let\bxac@engine=n
                       3712 \ensuremath{\mbox{def\bxac@do#1#2}}
                       3713
                             \edef\bxac@tmpa{\string#1}%
                             \edef\bxac@tmpb{\meaning#1}%
                             \ifx\bxac@tmpa\bxac@tmpb #2\fi}
                       3716 \bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}
                       3717 \bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=l}
  \bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの
                         終わりまで実行を遅延する。
                       3718 \verb|\ifx\jsAtEndOfClass\@undefined|
                       3719 \let\bxac@delayed@if@bxjs\@firstofone
                       3720 \else \let\bxac@delayed@if@bxjs\jsAtEndOfClass
                       3721 \fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\RevokeOldLuaTeXBehavior 3722 \newif\ifbxac@in@old@behavior
                       3723 \let\ImposeOldLuaTeXBehavior\relax
                       3724 \let\RevokeOldLuaTeXBehavior\relax
```

G.2 X₃T_EX 部分

 $3725 \ \text{ifx x\bxac@engine}$

```
XFTFX 文字クラスのムニャムニャ。
3726 \@onlypreamble\bxac@adjust@charclass
3727 \bxac@delayed@if@bxjs{%
      \verb|\difpackageloaded{xeCJK}{}{\wedge}|
3728
        \ifx\xe@alloc@intercharclass\@undefined\else
3729
            \ifnum\xe@alloc@intercharclass=\z@
3730
          \PackageInfo\bxac@pkgname
3731
            {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%
3732
          \InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%
3733
3734
            \xe@alloc@intercharclass=3
3735
          }{%else
3736
            \PackageWarning\bxac@pkgname
              {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
3737
3738
               \@gobble}%
3739
          }%
3740
        \fi\fi
        \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z@
3741
3742
          \PackageInfo\bxac@pkgname
```

```
3744
                                                                              \ensuremath{\texttt{Qfor\bxac@x:=}}
                                                       3745
                                                                                   3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
                                                                                   3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
                                                       3746
                                                                                   30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
                                                       3747
                                                                                   31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
                                                       3748
                                                       3749
                                                       3750
                                                                              }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
                                                                          \fi
                                                       3751
                                                                   }%
                                                       3752
                                                       3753 }
                                                           以上。
                                                       3754\fi
                                                           G.3 LuaTFX 部分
                                                       3755 \ifx 1\bxac@engine
                                                                ムニャムニャ。
                                                       3756 \unless\ifnum\luatexversion<80 \ifnum\luatexversion<85
                                                                     \chardef\pdftexversion=200
                                                                     \def\pdftexrevision{0}
                                                       3758
                                                                    \let\pdftexbanner\luatexbanner
                                                       3760 \fi\fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 3761 \verb|\begingroup\expandafter\expandafter\expandafter| expandafter \verb|\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter| expandafter \verb|\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandaft
                                                       3762 \exp \text{andafter} \ output mode \endcsname \relax \else
                                                       3763 \def\bxac@ob@list{%
                                                                     3764
                                                                     3765
                                                                     \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
                                                       3766
                                                                     \do{\protected\edef}\pdfhorigin{{\pdfvariable horigin}}%
                                                       3767
                                                                     \do{\protected\edef}\pdfvorigin{{\pdfvariable vorigin}}}
                                                       3768
                                                       3769 \def\bxac@ob@do#1#2{\begingroup
                                                                     \expandafter\bxac@ob@do@a\csname bxac@\string#2\endcsname{#1}#2}
                                                       3770
                                                       3771 \def\bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup
                                                                     \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
                                                       3772
                                                                     \else \let#3#1\relax \let#1\@undefined
                                                       3773
                                                                     \fi}
                                                       3775 \protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior{%
                                                       3776
                                                                     \unless\ifbxac@in@old@behavior
                                                                          \bxac@in@old@behaviortrue
                                                       3777
                                                                         \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                       3778
                                                       3780 \protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%
                                                                     \ifbxac@in@old@behavior
                                                       3781
                                                       3782
                                                                         \bxac@in@old@behaviorfalse
                                                                         \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                       3783
                                                                    \fi}
                                                       3784
```

{Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%

3743

3785 \fi

漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニャムニャ。

```
\ifnum\luatexversion>64 \directlua{
        local function range(cs, ce, cc, ff)
3787
          if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
3788
3789
            local setcc = tex.setcatcode
            for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
3790
3791
          end
3792
        end
3793
        range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
        range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
3794
3795
        range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
        range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
3796
        range(0xACOO, 0xD7A3, 11, false)
3797
        range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
3798
        range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
3799
        range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
3800
        range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
3801
3802
        range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
        range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)
3803
3804
        range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
        range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
3805
3806
     }\fi
 以上。
3807\fi
```

G.4 完了

おしまい。

3808 %</compat>

付録 H 補助パッケージ: bxjscjkcat 🕾

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

H.1 準備

```
3809 %<*cjkcat>
3810 \def\bxjx@pkgname{bxjscjkcat}
3811 \newcount\bxjx@cnta
\bxjx@engine エンジンの種別。
3812 \let\bxjx@engine=n
3813 \def\bxjx@do#1#2{%
3814 \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
3815 \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
```

```
\ifx\bxjx@tmpa\bxjx@tmpb #2\fi}
3817 \bxjx@do\kanjiskip{\let\bxjx@engine=j}
3818 \bxjx@do\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
3819 \bxjx@do\XeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}
3820 \bxjx@do\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
3821 \bxjx@do\luatexversion{\let\bxjx@engine=l}
   それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを
 検査する。
3822 \ensuremath{\mbox | 1}{2}%
3823
     \if#1\bxjx@engine
3824
       \@ifpackageloaded{#2}{}{%else
         \PackageError\bxjx@pkgname
3825
3826
          {Package '#2' must be loaded}%
3827
          {Package loading is aborted.\MessageBreak\@ehc}%
         \endinput}
3828
3830 \bxjx@do{p}{bxcjkjatype}
3831 \bxjx@do{x}{xeCJK}
3832 \bxjx@do{1}{luatexja}
   古い LATEX の場合、\TextOrMath は fixltx2e パッケージで提供される。
3833 \ifx\TextOrMath\@undefined
3834 \RequirePackage{fixltx2e}
3835 \fi
```

H.2 和文カテゴリコードの設定

upI $otin T_E X$ の場合、和文カテゴリコードの設定を $Lua T_E X$ -ja と(ほぼ)等価なものに変更する。

```
3836 \if u\bxjx@engine
3837 \@for\bxjx@x:={%
3838 0080 0100 0180 0250 0280 0300 0500 0530 05
```

※ LuaT_FX-ja との相違点: A830、A960、1B000。

```
3838 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
3839 0700,0750,0780,07C0,0800,0840,08A0,0900,0980,0A00,%
3840 0A80,0B00,0B80,0C00,0C80,0D00,0D80,0E00,0E80,0F00,%
3841 1000,10A0,1200,1380,13A0,1400,1680,16A0,1700,1720,%
3842 1740,1760,1780,1800,18B0,1900,1950,1980,19E0,1A00,%
3843 1A20,1AB0,1B00,1B80,1BC0,1C00,1C50,1CC0,1CD0,1D00,%
3844 1D80,1DC0,1E00,2440,27C0,27F0,2800,2A00,2C00,2C60,%
3845 2C80,2D00,2D30,2D80,2DE0,2E00,4DC0,A4D0,A500,A640,%
3846 A6A0,A700,A720,A800,A830,A840,A880,A8E0,A900,A930,%
3847 A980,A9E0,AA00,AA60,AA80,AAE0,AB00,AB30,AB70,ABC0,%
3848 D800,DB80,DC00,E000,FB00,FB50,FE00,FE70,%
3849 10000,10080,10100,10140,10190,101D0,10280,102A0,%
3851 10480,10500,10530,10600,10800,10840,10860,10880,%
3852 108E0,10900,10920,10980,109A0,10A00,10A60,10A80,%
```

```
3853 10ACO,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,10E60,%
3854 11000,11080,110D0,11100,11150,11180,111E0,11200,%
3855 11280,112B0,11300,11480,11580,11600,11680,11700,%
3856 118A0,11ACO,12000,12400,12480,13000,14400,16800,%
3857 16A40,16AD0,16B00,16F00,1BC00,1BCA0,1D000,1D100,%
3858 1D200,1D300,1D360,1D400,1D800,1E800,1EE00,1F000,%
3859 1F030,1F0A0,1F100,1F200,1F300,1F600,1F650,1F680,%
3860 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,F0000,100000%
3861 }\do{\kcatcode"\bxjx@x=15 }
```

H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

※ここで「ギリシャ・キリル文字」は Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるもののみを指すことにする。

\bxjx@grkcyr@list 対象のギリシャ・キリル文字に関するデータ。

```
3863 \def\bxjx@grkcyr@list{%
3864 \do{0391}{LGR}{\text{LGR}}{\text{A}}\%
                                                                                                          % GR. C. L. ALPHA
3865 \do{0392}{LGR}{\text{LGR}}{\text{ExtBeta}}{B}
                                                                                                          % GR. C. L. BETA
                                                                                                          % GR. C. L. GAMMA
3866 \do{0393}{LGR}{\text{camma}}{\text{camma}}
                                                                                                          % GR. C. L. DELTA
3867 \do{0394}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Delta}}
                                                                                                          % GR. C. L. EPSILON
3868 \do{0395}{LGR}{\textEpsilon}{E}%
                                                                                                          % GR. C. L. ZETA
3869 \do{0396}{LGR}{\text{textZeta}{Z}}%
3870 \do{0397}{LGR}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{}
                                                                                                          % GR. C. L. ETA
3871 \do{0398}{LGR}{\text{Theta}}
                                                                                                          % GR. C. L. THETA
                                                                                                          % GR. C. L. IOTA
3872 \do{0399}{LGR}{\text{textIota}{I}}%
3873 \do{039A}{LGR}{\textKappa}{K}%
                                                                                                          % GR. C. L. KAPPA
3874 \do{039B}{LGR}{\text{Lambda}}{\lambda}
                                                                                                          % GR. C. L. LAMDA
                                                                                                          % GR. C. L. MU
3875 \do{039C}{LGR}{\text{L} mu}{M}
3876 \do{039D}{LGR}{\text{N}}%
                                                                                                          % GR. C. L. NU
                                                                                                          % GR. C. L. XI
3877 \do{039E}{LGR}{\text{xi}}%
3878 \do{039F}{LGR}{\text{cmicron}}{0}%
                                                                                                          % GR. C. L. OMICRON
3879 \do{03A0}{LGR}{\textPi}{\Pi}%
                                                                                                          % GR. C. L. PI
3880 \do{03A1}{LGR}{\text{\colored}} 
                                                                                                          % GR. C. L. RHO
                                                                                                          % GR. C. L. SIGMA
3881 \do{03A3}{LGR}{\textSigma}{\Sigma}%
                                                                                                          % GR. C. L. TAU
3882 \do{03A4}{LGR}{\text{T}}%
3883 \do{03A5}{LGR}{\textUpsilon}{\Upsilon}%
                                                                                                         % GR. C. L. UPSILON
3884 \do{03A6}{LGR}{\text{hi}}%
                                                                                                          % GR. C. L. PHI
3885 \do{03A7}{LGR}{\text{cmtChi}}{X}%
                                                                                                          % GR. C. L. CHI
3886 \do{03A8}{LGR}{\text{textPsi}}{\text{Psi}}
                                                                                                          % GR. C. L. PSI
                                                                                                          % GR. C. L. OMEGA
3887 \do{03A9}{LGR}{\text{cmega}}{\Omega}
                                                                                                          % GR. S. L. ALPHA
3888 \do{03B1}{LGR}{\text{\textalpha}}{\alpha}
3889 \do{03B2}{LGR}{\text{textbeta}}{\text{beta}}
                                                                                                          % GR. S. L. BETA
3890 \do{03B3}{LGR}{\text{xtgamma}}{\text{gamma}}
                                                                                                          % GR. S. L. GAMMA
3891 \do{03B4}{LGR}{\text{\colored}} \delta{\colored} \delt
                                                                                                          % GR. S. L. DELTA
3892 \do{03B5}{LGR}{\textepsilon}{\epsilon}%
                                                                                                          % GR. S. L. EPSILON
3893 \do{03B6}{LGR}{\text{xzeta}}{\text{zeta}}
                                                                                                          % GR. S. L. ZETA
```

```
3894 \do{03B7}{LGR}{\text{texteta}}{\text{c}}
                                                 % GR. S. L. ETA
3895 \do{03B8}{LGR}{\text{texttheta}}{\text{theta}}
                                                 % GR. S. L. THETA
3896 \do{03B9}{LGR}{\text{textiota}}{\iota}
                                                 % GR. S. L. IOTA
3897 \do{03BA}{LGR}{\text{textkappa}}{\kappa}%
                                                 % GR. S. L. KAPPA
3898 \do{03BB}{LGR}{\text{lambda}}{\lambda}
                                                 % GR. S. L. LAMDA
                                                 % GR. S. L. MU
3899 \do{03BC}{LGR}{\text{mu}}%
3900 \do{03BD}{LGR}{\text{nu}}%
                                                 % GR. S. L. NU
3901 \do{03BE}{LGR}{\text{xi}}%
                                                 % GR. S. L. XI
                                                 % GR. S. L. OMICRON
3902 \do{03BF}{LGR}{\text{comicron}}{o}%
                                                 % GR. S. L. PI
3903 \do{03C0}{LGR}{\textpi}{\pi}%
                                                 % GR. S. L. RHO
3904 \do{03C1}{LGR}{\text{textrho}}{\text{ho}}%
3905 \do{03C2}{LGR}{\textvarsigma}{\varsigma}% % GR. S. L. FINAL SIGMA
3906 \do{03C3}{LGR}{\text{textsigma}}{\text{sigma}}
                                                 % GR. S. L. SIGMA
3907 \do{03C4}{LGR}{\text{texttau}}{\text{tau}}%
                                                 % GR. S. L. TAU
3908 \do{03C5}{LGR}{\text{\textupsilon}}{\wpsilon}{\}
                                                 % GR. S. L. UPSILON
3909 \do{03C6}{LGR}{\text{textphi}}{\phi}
                                                 % GR. S. L. PHI
3910 \ensuremath{\texttt{3910}} \ensuremath{\texttt{CR}}{\text{chi}}%
                                                 % GR. S. L. CHI
3911 \do{03C8}{LGR}{\textpsi}{\psi}%
                                                 % GR. S. L. PSI
3912 \do{03C9}{LGR}{\text{cmega}}{\text{cmega}}%
                                                 % GR. S. L. OMEGA
3913 \do{0401}{T2A}{\CYRYO}{}%
                                                 % CY. C. L. IO
3914 \do{0410}{T2A}{\CYRA}{}%
                                                 % CY. C. L. A
                                                 % CY. C. L. BE
3915 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%
3916 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%
                                                 % CY. C. L. VE
                                                 % CY. C. L. GHE
3917 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}%
                                                 % CY. C. L. DE
3918 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%
3919 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%
                                                 % CY. C. L. IE
                                                 % CY. C. L. ZHE
3920 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%
3921 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%
                                                 % CY. C. L. ZE
3922 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%
                                                 % CY. C. L. I
                                                 % CY. C. L. SHORT I
3923 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%
                                                 % CY. C. L. KA
3924 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%
3925 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%
                                                 % CY. C. L. EL
3926 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%
                                                 % CY. C. L. EM
3927 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%
                                                 % CY. C. L. EN
                                                 % CY. C. L. O
3928 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%
                                                 % CY. C. L. PE
3929 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%
                                                 % CY. C. L. ER
3930 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%
                                                 % CY. C. L. ES
3931 \do{0421}{T2A}{\CYRS}{}%
3932 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%
                                                 % CY. C. L. TE
                                                 % CY. C. L. U
3933 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%
3934 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%
                                                 % CY. C. L. EF
3935 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%
                                                 % CY. C. L. HA
                                                 % CY. C. L. TSE
3936 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%
                                                 % CY. C. L. CHE
3937 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%
3938 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%
                                                 % CY. C. L. SHA
3939 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%
                                                 % CY. C. L. SHCHA
3940 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%
                                                 % CY. C. L. HARD SIGN
3941 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%
                                                 % CY. C. L. YERU
                                                 % CY. C. L. SOFT SIGN
3942 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}%
```

```
% CY. C. L. E
3943 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%
3944 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}%
                                                % CY. C. L. YU
3945 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%
                                                % CY. C. L. YA
3946 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%
                                                % CY. S. L. A
                                                % CY. S. L. BE
3947 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%
                                                % CY. S. L. VE
3948 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}%
                                                % CY. S. L. GHE
3949 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%
3950 \do{0434}{T2A}{\cyrd}{}%
                                                % CY. S. L. DE
                                                % CY. S. L. IE
3951 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%
                                                % CY. S. L. ZHE
3952 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%
                                                % CY. S. L. ZE
3953 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%
3954 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%
                                                % CY. S. L. I
                                                % CY. S. L. SHORT I
3955 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%
                                                % CY. S. L. KA
3956 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%
3957 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%
                                                % CY. S. L. EL
3958 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%
                                                % CY. S. L. EM
3959 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%
                                                % CY. S. L. EN
                                                % CY. S. L. O
3960 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%
3961 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%
                                                % CY. S. L. PE
                                                % CY. S. L. ER
3962 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%
3963 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%
                                                % CY. S. L. ES
                                                % CY. S. L. TE
3964 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%
3965 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%
                                                % CY. S. L. U
                                                % CY. S. L. EF
3966 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%
                                                % CY. S. L. HA
3967 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%
3968 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%
                                                % CY. S. L. TSE
                                                % CY. S. L. CHE
3969 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%
3970 \do{0448}{T2A}{\cyrsh}{}%
                                                % CY. S. L. SHA
3971 \do{0449}{T2A}{\cyrshch}{}%
                                                % CY. S. L. SHCHA
                                                % CY. S. L. HARD SIGN
3972 \do{044A}{T2A}{\cyrhrdsn}{}%
                                                % CY. S. L. YERU
3973 \do{044B}{T2A}{\cyrery}{}%
3974 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}%
                                                % CY. S. L. SOFT SIGN
                                                % CY. S. L. E
3975 \do{044D}{T2A}{\cyrerev}{}%
3976 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%
                                                % CY. S. L. YU
                                                % CY. S. L. YA
3977 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%
3978 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%
                                                % CY. S. L. IO
3979 \do{00A7}{TS1}{\textsection}{\mathsection}% SECTION SYMBOL
3980 \do{00A8}{TS1}{\textasciidieresis}{}%
                                                 % DIAERESIS
3981 \do{00B0}{TS1}{\textdegree}{\mathdegree}% % DEGREE SIGN
3982 \do{00B1}{TS1}{\text{textpm}}{\pm}%
                                                % PLUS-MINUS SIGN
3983 \do{00B4}{TS1}{\text{textasciiacute}}
                                                % ACUTE ACCENT
3984 \do{00B6}{TS1}{\textparagraph}{\mathparagraph}% PILCROW SIGN
3985 \do{00D7}{TS1}{\text{texttimes}}{\text{times}}
                                                % MULTIPLICATION SIGN
3986 \do{00F7}{TS1}{\text{textdiv}}{\text{div}}%
                                                % DIVISION SIGN
3987 }
```

3988 \providecommand*{\mathdegree}{{}^{\circ}}

\ifbxjx@gcc@cjk 〔スイッチ〕ギリシャ・キリル文字を和文扱いにするか。

```
3989 \newif\ifbxjx@gcc@cjk
  \greekasCJK ギリシャ・キリル文字を和文扱いにする。
\nogreekasCJK ギリシャ・キリル文字を欧文扱いにする。
             3990 \newcommand*\greekasCJK{%
                  \bxjx@gcc@cjktrue}
             3992 \newcommand*\nogreekasCJK{%
             3993
                  \bxjx@gcc@cjkfalse}
\bx0fake0grk \bx0fake0grk{(出力文字)}{(基準文字)} :
             3994 \def\bxjx@do#1\relax{%
                   \def\bxjx@fake@grk##1##2{%
             3995
             3996
                     \end{after} $$ \operatorname{cgrk@a\meaning} #2#1\end{after} $$ \operatorname{cgrk@a\meaning} #2#1\end{after} $$
                  \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@nil##3##4{%
             3997
             3998
                     \ifx\\##1\\%
                       \bxjx@cnta##4\divide\bxjx@cnta\@cclvi
             3999
                       \multiply\bxjx@cnta\@cclvi \advance\bxjx@cnta`##3\relax
             4000
             4001
                       \mathchar\bxjx@cnta
                     \left\{ \frac{\#3}{fi} \right\}
             4002
             4003 }\expandafter\bxjx@do\string\mathchar\relax
               ■pdfLaTeX・upLaTeX の場合
             4004 \ifnum0\if p\bxjx@engine1\fi\if u\bxjx@engine1\fi>0
               まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。
             4005 \@ifpackageloaded{inputenc}{}{%else
                   \RequirePackage[utf8]{inputenc}}
             4007 \def\bxjx@tmpa{utf8}
             4008 \ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname
                  \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname
                    {Input encoding changed to utf8}%
             4010
             4011
                   \inputencoding{utf8}%
             4012 \fi
                upIATeX の場合は当該の文字を含むブロックをの和文カテゴリコードを変更する。
             4013 \if u\bxjx@engine
             4014 \kcatcode"0370=15
             4015 \kcatcode"0400=15
             4016 \kcatcode"0500=15
             4017 \fi
               各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。
             4018 \def\do#1{%
                  \@tempcnta="#1\relax
             4019
                   \@tempcntb=\@tempcnta \divide\@tempcntb256
             4020
                   \expandafter\let\csname bxjx@KCR/\the\@tempcntb\endcsname=t%
             4021
                   \expandafter\bxjx@do@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}
```

 $4023 \def\bxjx@do@a#1#2#3#4#5{%}$

```
\ifx\\#5\\%
                          4024
                          4025
                                 \def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%
                              \else\ifcat A\noexpand#5%
                          4026
                                 \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
                          4027
                                   \label{liminum} $$ \prod \ensuremath{\mbox{\sc Noexpand Pi\else\noexpand pi\fi}}% $$
                          4028
                               \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
                          4029
                          4030
                               \fi\fi
                          4031
                               \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}
                          4032
                          4033 \if u\bxjx@engine
                          4034 % {\bxjx@KC/NN}{XXXX}{ENC}{\textCS}{\mathCS}
                          4035 \def\bxjx@do@b#1#2#3#4#5{%}
                               \kchardef#1=\@tempcnta
                               \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{#1}{#3}{#4}}%
                          4037
                          4038
                               \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
                          4039 \else\if p\bxjx@engine
                          4041
                               \mathchardef#1=\@tempcnta
                          4042
                               4043 \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
                          4044 \fi\fi
                          4045 \bxjx@grkcyr@list
                          4046 \let\bxjx@do@a\undefined
                          4047 \let\bxjx@do@b\undefined
\bxjx@DeclareUnicodeCharacter \bxjx@DeclareUnicodeCharacter を改変して、ギリシャ・キリル文字の場合に再定義を
                           抑止したもの。
                          4048 \@onlypreamble\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter
                          4049 \let\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter\DeclareUnicodeCharacter
                          4050 \Conlypreamble\bxjxCDeclareUnicodeCharacter
                          4051 \def\bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2{%
                          4052
                               \count@="#1\relax \bxjx@cnta\count@ \divide\bxjx@cnta256
                               \expandafter\ifx\csname bxjx@KCR/\the\bxjx@cnta\endcsname\relax
                          4053
                                 \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
                          4054
                          4055
                               \else\expandafter\ifx\csname bxjx@KC/\the\count@\endcsname\relax
                                 \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
                          4056
                          4057
                               \else
                                 \wlog{\space\space skipped defining Unicode char U+#1}%
                          4058
                          4059
            \bxjx@ja@or@not \bxjx@ja@or@not
                          4060 \def\bxjx@ja@or@not#1#2#3{%
                           \greekasCJK の場合は、無条件に和文用コードを実行する。
                          4061 \ifbxjx@gcc@cjk #1%
                           \nogreekasCJK の場合は、エンコーディングを固定して欧文用のコードを実行するが、そ
```

のエンコーディングが未定義の場合は (フォールバックとして) 和文用コードを使う。

4062 \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%

```
4063
                          \else \UseTextSymbol{#2}{#3}%
                    4064
                          \fi\fi}
\DeclareFontEncoding@
                      \DeclareFontEncoding@ にパッチを当てて、\DeclareFontEncoding の実行中だけ改変
                      後の \DeclareUnicodeCharacter が使われるようにする。
                    4065 \begingroup
                    4066 \verb|\toks@expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}
                    4067 \texttt{\label{lem:apandDeclareFontEncoding@##1##2##3{\%}} \\
                    4068
                          \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd
                    4069
                          \the\toks@
                          \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd}}
                    4071 \endgroup\next
                    4072 \ensuremath{\mbox{def\bxjx@swap@DUC@cmd}{\%}}
                    4073
                          \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter
                          \let\DeclareUnicodeCharacter\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
                    4075
                          \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa}
                        以上。
                      ■X∃ATEX · LualATEX の場合
                    4076 \le \inf 0 if x\bxjx@engine1\fi\if 1\bxjx@engine1\fi>0
                        各文字について、math active を設定する。
                    4077 \def\do#1{\%}
                          \bxjx@cnta="#1\relax
                    4078
                    4079
                          \begingroup
                            \lccode`~=\bxjx@cnta
                    4080
                          \lowercase{\endgroup
                            \bxjx@do@a{~}}{#1}}
                    4082
                    4083 \def\bxjx@do@a#1#2#3#4#5{%
                          \ifx\\#5\\\let\bxjx@tmpa\relax
                          \else\ifcat A\noexpand#5%
                    4085
                            \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
                    4086
                              {\ifnum\uccode`#5=`#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%
                    4087
                          \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
                    4088
                          \fi\fi
                    4089
                    4090
                          \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
                            \mathcode\bxjx@cnta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
                    4091
                    4092
                          \fi}
                      「Unicode な数式」の設定が行われているかを(簡易的に)検査して、そうでない場合にの
                      み、こちらの設定を有効にする。
                    4093 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
                    4094 \ifx\bxjx@tmpa\pi \bxjx@grkcyr@list \fi
                    4095 \let\bxjx@do@a\undefined
                        LuaTEX における \(no)greekasCJK の定義。jacharrange の設定を変更する。
                    4096 \if 1\bxjx@engine
                          \protected\def\greekasCJK{%
                    4097
```

\bxjx@gcc@cjktrue

4098

```
\ltjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}}
4099
     \protected\def\nogreekasCJK{%
4100
       \bxjx@gcc@cjkfalse
4101
       \label{linear} $$ \begin{split} & \exists z = \{-2, -8\} \} \end{split}
4102
4103 \fi
   X元TFX における \(no)greekasCJK の定義。
4104 \if x\bxjx@engine
     \protected\def\greekasCJK{%
        \bxjx@gcc@cjktrue
4106
4107
       \def\do##1##2##3##4{\XeTeXcharclass"##1\@ne}%
4108
       \bxjx@grkcyr@list}
     \protected\def\nogreekasCJK{%
4109
       \bxjx@gcc@cjkfalse
4110
4111
        4112
       \bxjx@grkcyr@list}
4113 \fi
   以上。
4114 \fi\fi
```

H.4 初期設定

ギリシャ・キリル文字を欧文扱いにする。

 $4115 \verb|\nogreekasCJK|$

H.5 完了

おしまい。

4116 %</cjkcat>

補助パッケージ実装はここまで。

4117 %</anc>